ストレンジツインズ

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ストレンジツインズ

【Ｎコード】
Ｎ０５６５Ｍ

【作者名】
羽鳥　紘

【あらすじ】
女装好き女好き妹大好きだけど刀を持ったら敵はなし。そんな厄介な兄を持った妹の苦労は尽きない！？　旅先は風任せ兄任せ、波乱万丈剣と魔法のハートウォーミングファンタジー★

兄妹と闇夜の魔物　１（前書き）

小説の内容の一部に、バトルシーン・流血・ラブシーン等を含みます。かなり婉曲な表現にはなってますが、閲覧に際しましては自己責任でお願い致します。

兄妹と闇夜の魔物　1

男の子には、だれにも言えないひみつがありました。
普段は、ふつうの家でふつうに暮らす、ふつうの男の子。
しかして彼のもうひとつの顔は、
弱者を助け、悪をくじく正義の味方だったのです。

――なんて。
物語というのは、昔から展開が決まっている。
所謂王道とでも言うのだろうか。
とても解りやすく、ありきたりなストーリー。
そう思うのは、子ども向けの絵本がわかりやすく書かれていて、
それを読んで育つからなのだろうか。
幼い頃から繰り返し語られるお約束の英雄譚は、大人にも好まれる。
それはそれで良いのだけれど。

「俺、正義の味方になろうかな」

兄の一言に、少女は目を点にした。
大人と呼ぶにはまだ幼い。それは認めるけれど。
幼児向けの絵本を未だ自分に読み聞かせているのは、実は本人のお気に入りだからだなんて。
さすがに妹も、今日まで気付かなかったわけである。

■　□　■　□　■

「そしてまさか本気だったなんてね……」

両手でカップを持って温かいスープを啜りながら、少女は嘆きを口にした。
歳の頃、二桁に差し掛かるか否か。
普通ならまだ親元で母の作ったご飯を食べている頃合だが、少女は冒険者のごった返す夕方の大衆食堂にいた。肩で揃えたブロンドと、それを留める大きな赤いリボン、そして同じ色の赤いワンピースの上から若草色のマントを羽織っている。明らかに少女は場から浮いているのだが、彼女自身にはそれを気にする様子はまるでなかった。彼女は知っていたからである。
どれだけ自分が浮いていたって、人の目は集まらないであろうことを。
何故なら、自分以上に隣の兄が浮いているからだ。何処に行ったって、彼が全ての視線を攫ってしまう。
きらめく長いプラチナブロンド、宝石さながらの蒼い瞳、白磁の肌と絶世の美貌。
それだけで目立って仕方ないのに、髪をひとつに束ねるリボンも羽織るジャケットも何故かピンク。だから余計に誤解されるのだ。
隣に集中する視線の中からひとつ、こちらに近づいてくるものを感じて少女はカップを置いた。
食事は旨いが頭は痛い。
兄について、これまで挙げた事項についてはまだいいのだ。目立つのも慣れた。兄の少女趣味にも慣れた。
妹を一番困らせているのは――
「いよぉ、綺麗な姉ちゃん。これから俺と遊ばない？」
麦酒のジョッキを片手に、冒険者風の男が声をかけてくる――兄に。それもまたいつものことで。
ごん、と派手な音を立てて兄がジョッキ（中身ジュース）をテーブルに置き、椅子を蹴って立ち上がり。
「俺の妹に手を出すなぁぁぁ！！！！！！」

まるで見当違いのことでブチ切れて暴れだすのもいつものことなのだが。

「これぱっかりは慣れないわ……」

騒がしくなった背後を他所に、少女はもう一度カップを両手で持つと、冷めたスープを一気に干した。

「だからね、リゼル兄さん。みんなは私じゃなくて、兄さんに声を掛けてるのよ。いい加減に解って」

「何言ってるんだティラ。俺は男だぞ」

「それを知ってるのは多分私だけよ。男だって主張したいなら、せめて女装はやめるべきと思う」

「ダメだ！　せめて俺が女装してティラに近づく男を少しでも減らさないと！！」

「大丈夫。兄さんが男装したって兄さんの方がきれいよ」

「わかってなーーーーーいっ！！」

ばんっと兄がテーブルを叩き、派手な音と共に立ち上がる。その一瞬前に耳を塞いでいた両手を下ろし、妹は嘆息した。

「ティラは自分の魅力をわかってない！　小さいうちからこんなに可憐で清楚で可愛くて、お兄ちゃんは心配で心配で夜も眠れないんだぞおおおお！！」

まだ何か叫んでいる兄を置いて洗面所に向かい、歯ブラシを口に含む。

「ああっ、歯磨きするなら一緒にしようよー！」

平和な時間は一呼吸も続かず、嵐はすぐに背後に帰ってくる。

小さな宿の一部屋だ、非難できる場所などないからそれは仕方ない。この兄から目を離すのも怖いから、二部屋取るわけにもいかな

い。　がらがらと口をゆすいで吐き、ティラはとっととベッドへ向かった。だがそれを見た兄が慌てて口に水を含むのに気付き、ぐるりと回れ右をすると、びしっと人差し指を兄に突きつける。

「歯磨きは三分間！！」

鋭い妹の叫びに、兄は再び歯ブラシを口に突っ込むのだった。

兄妹と闇夜の魔物　2

隣のベッドから兄が起き上がった気配で、ティラは目を覚ました。いつも起こすまで爆睡しているのに珍しいことだと、ティラもシーツを除けて起き上がる。

「今日は随分早いのね、兄さん」

ベッドに腰掛けながら声をかけると、リゼルは大真面目な顔でこちらを振り返り、至って真剣な声を上げた。

「俺の美人アンテナが反応した」

呆れた、と呟いてティラは肩を竦めた。

この兄は、酷く女顔で女装が趣味の癖して、酷く女好きなのである。そして酷くシスコンだ。

重複し難いと思われる幾つかの属性を、見事に兼ね備えた厄介な兄に頭を痛めていると、彼は慌てた様子で駆け寄ってきた。

「でも誤解するな、ティラ。ティラより可愛い女はいない」

「誤解しているのは兄さんよ」

「妬くなよ。お兄ちゃんも辛いところだが、お兄ちゃんはティラとは結婚できないんだ」

「何の話か知らないけど、早く彼女を作ってくれた方が私は安心だわ」

できないと思うけど。

後半の呟きは、最後の優しさで溜息と共に飲み込んだ。

「なんでもいいから早く行きましょう。美人さんが逃げちゃっても知らないわよ」

代わりに出てきた欠伸を片手で押さえながら、ティラはベッドに掛けていたマントをもう片方の手で取った。

ティラとしては美人などどうでもいいが、昨日兄が騒ぎを起こしたせいで食事を十分に取れず、小腹が空いていたのだ。早く朝食にしたかった。

果たして兄が尻尾を振って駆け寄っていった相手は、兄に負けず劣らずの美人だった。これにはティラも驚いた。
まず、銀髪。別段、酷く珍しいというわけではないが、ありふれているわけでもない。それだけで結構目を引く。
加えて、紫水晶のような瞳。
今、兄妹が旅をしているこの大陸では、色んな人種や民族がごった混ぜになって暮らしている。その上混血も進んだものだから、髪の色も目の色も肌の色もとりどりだが、その中にあって銀髪紫眼というのはリゼルもティラも初めて見た。
さて、最高に人目を引く人物が二人も並んでしまったわけだが、ティラの危惧に反して食堂は静かなものだった。何のことは無い、まだ朝食には早い時間で、皆眠っているだけなのだが。
「隣いいですか、綺麗なお姉さん」
そんなせっかくの静かな朝食を、兄が台無しにする。昨日自分がキレた相手と大差ない台詞という自覚はあるのだろうか。しかも返事を待たずに座っている。頭を押さえながら、ティラもそっとその隣に座る。
「朝食くらい静かに食べたいと思ったことはないか？」
だが、美女が溜息交じりにそんな言葉を吐き出すので、ティラは慌てて席を立った。
「あの、すみません。兄がご迷惑を」
「――兄」
リゼルを通り越して、紫の瞳がティラの方を射抜く。美貌には兄で慣れているティラだが、そのあまりの美しさに一瞬たじろぐ。それも無理はなく、リゼルとは違って彼女は正真正銘の女だし、歳の頃も大人の美しさを備えている。
「似てない兄妹だな」
ふっと彼女は苦笑した。だがその言葉に、一瞬兄妹のまとう空気が変わったことに気付き、女はそのどちらからも視線を外すと目の

前のサラダをつついた。
「俺はリゼルで、妹はティエラと言います。名前を聞いてもいいですか？」
美女の気の無いそぶりもなんのその、リゼルが明るい声を上げる。空気を読むということは辞書にない。
結局彼女は、兄妹に朝食が運ばれて来る頃には自分の皿を綺麗に空にして、こちらに微笑ひとつだけを残して席を立った。
はぁと息をついて、ティラが運ばれてきたクロワッサンにかぶりつく。
「綺麗な人見たらとにかく軟派するのやめなさいよ。相手も迷惑でしょう」
それを飲み下してから兄をやんわり嗜めると、ミルクを一気飲みしたばかりの兄が血相を変えてこちらを見てきた。
「ティラ！　嫉妬してくれてお兄ちゃんは嬉しい」
「だから違うってば」
口の周りについたミルクを拭うのと黙らせるのと、二つの目的で兄の口にナプキンを押し当てていると、さっきの女性が旅支度を整えて階段を下りてきていた。
「もう行っちゃうみたいね」
「追おう♪」
ミルクを飲もうとしていた手を止め、ティラは「は？」と素っ頓狂な声を上げて兄を振り返った。ミルクを飲むタイミングがもう少し早ければ、吹き出していたところだろう。リゼルはパンを口の中に押し込んで、椅子を蹴って立ち上がっていた。
「なんで！？」
「ミステリアスな美女、気になるじゃないか。どうせすることないし、追わなきゃ損損」
言うなり兄は飛び出して行く。
荷物など身に着けているものしかないし、自分達も朝に発つつもりだったから支払いは追えている。だからと言って急すぎる兄に閉

口しながら、せめてティラはもうひとつ、パンを口に捻じ込んだ。

兄妹と闇夜の魔物　3

ティラは沈鬱な気持ちでがたごと馬車に揺られていた。
この馬車がどこ行きなのか、兄は絶対に知らない。とはいえ、御者の口から出た地名はティラも知らないものだったから、それを兄が気にしたところで結果は変わらなかっただろうが。
考え無しに飛び出した奔放な兄を追いかけると決めた時点で、こういう展開は覚悟していたけれど。いくらなんでも兄は奔放すぎる。
美人を見かけては後を追って、一体自分達はどこに流されていくのだろう。……周りまわって家に帰れるかもしれないけれど。
当の美人が声を上げたのは、ティラが楽観的な方向に逃避を始めた頃だった。
「君は何か、私に用でもあるのか？」
黒いローブの下から、呆れと苦笑を多分に含んだ声が漏れてくる。銀髪紫眼はそのローブの下にしまっているから、乗合馬車の視線はリゼルが独り占めだ。この際ピンクのマントでもいいから、兄も顔を隠すことを覚えてくれればいいのにとティラは思う。
事実、何度かそれを実行しようとしたが、兄に目立っている自覚がないので言うことを聞いてくれない。
「美女を追いたくなるのは男のサガです」
終始にこにこしっぱなしのリゼルは、そのままの表情で、大変素直な胸のうちを述べている。もう少し包み隠せと言いたくなる。本能のまま行動しているのがバレバレだ。
見てくれだけはいいのにナンパが成功しないのは、とんでもなく口下手な所為だろう。……いや、女装の所為か。
「素直なのはいいが、私は煩い男は嫌いだ」
「俺はおねーさんみたいなクールな女性、好みです」
会話がかみ合っていない。
ティラが欠伸をかみ殺そうとしていると、ふと強い視線を感じた。

黒のローブから覗く紫水晶が、「お前の兄をなんとかしろ」と語っている。
なんとかできるような兄なら苦労しない。肩を竦めて、「無理です」のジェスチャーをすると、嫌そうな顔をされたが仕方ない。
ティラにしても、誰かなんとかしてくださいの境地だが、その願いを聞き届けてくれたように馬車が止まる。だが外から聞こえてきた御者の悲鳴は、なんとかしてくれた誰かに感謝を述べるような場面でもないことを物語っていた。
「な、何？」
腰を浮かしかけたティラだったが、強い衝撃に荷台の床に引き戻された。女性客の悲鳴に、馬車の中は騒然となった。冒険者風の男が数人、馬車を降りようとして鋭い咆哮に足を止める。だが外に出るまでもなく間もなく幌は引き裂かれ、異形の獣が数体、馬車を取り囲んでいるのが確認できた。
「ッ、合成獣（キメラ）だッ……！」
女性達の悲鳴に、冒険者の情けない悲鳴が混じる。いろんな獣を手当たり次第にブチ込んでできたような獣の裂けた口から垂れた涎が荷台を伝う。
「……なんだ、お前達。腰の獲物は飾りだったのか？」
そんな騒然とする場にそぐわない静かな声が間近から流れる。ティラだけは冷静にそれを聞いていたが、周囲のものにそれを聞く余裕はなかったようだ。兄を見上げてみると、俯いたまま震えていて、ティラは小首を傾げた。
「兄さん？」
「もうひとつ。私は弱い男も嫌いだ。とくに、飾りで獲物を持つような――」
おそらく兄に向けられているのであろう静かな声を辿ると、やはり紫の瞳は、兄の腰の刀に注がれていた。その視線を剥がすように強く睨むと、意外そうな女の眼差しとかち合う。
「兄さんは弱くなんか――――」

だがティラの言葉は咆哮に遮られた。涎を撒き散らし、合成獣が牙をむく。その顎が真っ直ぐこちらに向かうのに、紫眼の女が舌打ちしながら手を翳す。そしてその唇が何事かを紡ぐ――――前に。

白銀の閃きが女とティラの前を行き過ぎて、そしてずしゃりと獣の頭が馬車に落ちる。血も流さずに、獣の姿は砂になって消えた。

「魔成生物……？」

「キメラは大体そうだ」

女の声は淡々としていたが、僅かに驚きを含んでいたのをティラは聞き逃さなかった。それはキメラの正体に関してではなく、何がキメラを倒したかへの驚きだろう。どちらについても、ティラは驚かなかったが。

だがその代わり、次の瞬間にはげんなりした。

「ヨシキターーーー！！　俺ついに正義の味方デビュー！　ちょっと俺、興奮で震えがトマラナイ！！」

いつの間にか抜刀した兄が、それを高々掲げて叫んでいる。獣を倒したあとの残身をそのままに吼える姿はカッコイイのだが、言葉を聞くとただの阿呆だ。

はあ、という小馬鹿にしたような女の溜息を、再び悲鳴がかきけした。まだキメラは数体残っている。

リゼルの顔がいきいきと輝き、ティラがますますげんなりして、女の表情は冷たいまま変わらなかったが。

『“我が御名において命ず。天地を飲んで盛る焔、阻むもの焼き尽くせ”』

瞬間、肌が焼けるような熱を感じる。

女の唇が震えたかと思うと灼熱の炎が前触れなく巻き起こり、あとは瞬きする間にキメラの姿は綺麗に消えていた。あれだけの熱量

なのに馬車は焦げてもおらず、リゼルが猛々しいポーズのままぱちくりと目を瞬かせる。
他の乗客が事態を理解できず騒ぐのを尻目に、女は何事もなかったかのように馬車を飛び降りる。
「待って下さい」
ティラもほぼ似たようなもので、兄と乗客とを全て思考の外に締め出すと、女を追って荷台を飛び降りた。
「貴女は何者ですか？　貴女のような力の波動、初めて見ました。精霊魔法使い（エレメンター）なんてもうほとんど見ないのに、貴女が使う呪文（スペル）も私が知ってる定義とは違う」
キメラを倒したのは、女が使った炎の魔法だった。だが、昔でこそ珍しくなかった魔法だが、その力は衰退の一途を辿り今ではもうほとんど見られない。だというのに、女の力は魔法の衰退が始まった数十年前であって既に強すぎるようにティラには思えた。本で読んだだけの知識ではあるが、それだけでもさっきの炎は異常だと断定できる。
ティラの言葉に、女は振り返ると黒いフードを取り払った。銀の髪が肩に流れ、ふっと紫水晶の瞳が笑う。脳に刻み込まれるくらい印象的な微笑みだった。
「ティラ～、お兄ちゃんを置いていかないで～」
情けない声がしてティラは表情を歪めたが、女を追ったままの視線はまた、魔法の光を捉えた。負傷した御者に歩み寄った女が、また魔法を――おそらく癒しの魔法を使っている。
「……リゼル、だったかしら？」
突然に、そして全く意外に。
女は癒しの魔法を使いながら、兄の名前を呼んだ。それは兄にとっても意外だったのだろう、一呼吸遅れてうわずった返事を兄がする。
「私の名はサーラ。君の刀、飾りじゃないなら頼みたいことがある」
とん、と御者台から女が飛び降りる。

ぱっと顔を輝かせる兄とは対照的に、面倒の予感に妹は小さく息を吐いたのだった。

兄妹と闇夜の魔物　4

御者の傷はサーラに寄って癒され、キメラの群れも消えうせ、何事もなかったかのように馬車は再び動き出した。だが馬車の中までは何事もなかったというわけにはいかない。

兄妹とサーラは好奇の目に晒され続けながら、居心地の悪い馬車旅となった。とはいえ実際に居心地が悪いのはティラだけで、サーラは今までと変わらずフードを目深に被ったままだんまりだったし、リゼルについては今更だ。そんなことで動じるような神経は持ち合わせていない。

そんな事実にティラが一人釈然としない思いと戦っている間にも、馬車は次の街へと辿りつく。無言のままサーラが馬車を降り、慌ててリゼルがそれを追い、その後にティラも続く。時刻はそろそろ夜へと傾き、足元は闇に沈み始めている。できれば夕食にしたいのだけど、というティラの呟きを聞いたわけではないのだろうが、サーラは一直線に街の酒場へと向かった。

「私も兄も未成年ですが」

薄暗く静かな店の前で足を止めたサーラに向けて、ティラはささやかな拒否を示した。まぁいいじゃんと、何も考えず気楽な声を上げる兄を睨んで黙らせていると、くす、と笑い声が落ちてくる。

「頼めば食事も出してくれる、別に酒を飲む必要はないよ。ここは静かで旨い。気に入りの店なんだ」

フードを取り払ってサーラが微笑む。その笑顔に今までのようなとっつきにくさはなくなっていた。ティラがそれに僅かばかり驚いている間に、サーラのローブから覗く白い手がドアを押し、カランとドアベルが澄んだ音で鳴いた。

そのまま真っ直ぐにサーラは奥の席に陣取り、その向かいにリゼルが、そしてその隣にティラが腰を下ろす。ウエイトレスにサーラが口早に注文し、それからほどなくしてテーブルには旨そうな料理

とミルクが3つ並んだ。
「サーラさんは呑まないの？」
「下戸だ」
意外そうな兄の質問に、サーラはこれもまた意外な答えを返し、ミルクのグラスに口をつけた。
「それよりもまず食事にしよう。腹が減っているんじゃないか、ティエラ？」
そんな風に振られて、ティラは少し赤面した。確かに、昨日の夜から兄に振り回されっぱなしでろくに食べていない。昨夜のことはともかく、朝はまだ食事中だったところを見られているから、ろくに食べないで兄を追ってきたのは見透かされているのだろう。素直にティラは手を組むと、手短に食前の祈りをし、そして久々にゆっくりとした食事にありついた。
サーラの言うとおり、食事はどれも旨かったが、店は静かだった。いつものように喧騒に晒されることはない。サーラが気に入りだというのも道理だ。そうやって食事を満喫するあまり、忘れそうになっていたサーラの依頼について彼女が語り出したのは、一通り皆が胃袋を満たしてからだった。
「……君達は、キメラについてどの程度知っている？」
そんな風に切り出したサーラに、兄妹は顔を見合わせた。
「どの程度って、人並みに。ここ数年、異常発生してるってくらいは」
兄がそんな風に言い、肯定するようにティラも頷いた。
「そう。このところこの大陸を中心にキメラの被害が相次いでいる。私はそれを専門に解決する、所謂キメラハンターだ」
顔の方に流れた銀髪を、無造作にサーラの手が後ろに払う。彼女の腕に光るいくつかのブレスレットがぶつかりあって、シャラン、と音を奏でた。その音に、キメラハンター、そう半数するリゼルの声が重なった。
キメラハンターというのは、今しがたサーラが言ったように、キ

メラを専門に駆逐するハンターだ。一体何故、最近になって合成獣（キメラ）が異常発生するようになったのかは解明されていない。だがキメラ達はある日突然姿を現し、月日と共にその数を増しながら人を襲い始めている。その姿や性質は様々だが、凶悪で生命力が強く殺傷能力が高いものが多い。腕に覚えのある冒険者にも恐れられる存在で、キメラハンターはＳクラスのハンターより格上の極めて稀な存在だ。

「……それほど力のある方が、兄さんになんの用なんですか？」

それを踏まえてティラが固い声を上げる。キメラハンターからの依頼など、物騒にもほどがある。そんなティラの懸念を受けて、サーラは少し苦笑した。だが引き下がりはしなかった。

「力があるのは君の兄さんも同じだろう。Ｓクラスのハンターですら尻込みするキメラを一撃で葬った」

「でもあなたはそれ以上に強い力がある」

「それでも助力が必要だ。だがキメラハンターを生業としていても、これはという者はいなかった。そもそも、私はキメラハンターが嫌いだ」

ふとサーラの声が翳る。自分でそれを生業としていながらも嫌いだと謗るその真意がわからず、ティラが思わず口ごもる。だがそれが間違いだった。

「俺で力になれるなら」

にこにことリゼルが安請け合いの言葉を口してしまう。兄さん、と嗜めるようにティラは兄を呼んだが、その言葉をかき消すようにサーラは手を伸ばすとリゼルの手を取った。

「そうか、ありがとう」

サーラがどんな男も一撃で落とすような微笑を見せ、リゼルもまた男なわけで、それも格段に女性に弱い男なわけで、その結果兄のやる気ゲージがＭＡＸになっただろうことなど火を見るより明らかで。

「サーラさん、兄をあまり乗せないで下さい。あなたほどの人が手を余すことを、兄にどうにかできると思えません」

「今度は随分と過小評価するんだな」
リゼルの手を握ったまま、サーラが視線だけをこちらに向けてくる。その強い紫の輝きに、怯まずティラもまたじっと彼女を見据え返したのだが。
「昼間は私に吼えたじゃないか。『兄さんは弱くなんかない』と」
「あれは――」
途端その視線は宙を泳ぎ、さっとティラの顔に朱が差す。そしてその瞬間、サーラの手は空を握っていた。サーラがそれに気付いてリゼルに向き直ったときには、目の前にもう彼の姿はなく。
「ティラーーーー！！　お兄ちゃんは感動した！！　俺はティラの為にもっと強くなるよ！！」
ぎゅうぎゅうとティラを抱きしめながらリゼルが騒ぎ立て、ティラが苦しい、と苦痛を訴えていた。

兄妹と闇夜の魔物　5

闇はすっかり外の世界を染め抜いていたが、サーラはその日のうちの出発を決めた。そのことについてティラが真っ先に反対の声を上げたのは、当然といえば当然のことである。視界の悪い真夜中の戦闘など不利なことしかない。加えて、相手は獣で、魔成生物だ。自然環境に影響されたりはしないから、このデメリットはフェアなものでもない。

「どうして夜が明けるのを待っては駄目なんですか」

ティラのもっともな意見を、だがサーラは一刀の元に切り捨てた。

「目立ちたくない」

合成獣（キメラ）が異常発生しているこのご時勢、夜にうろつくような馬鹿はまずいない。それでなくとも、夜に行動しないというのは冒険者の常識でもあり、そもそも人の生活を営んでいれば自然なことだ。だからこそ、サーラは夜を選ぶのだという。

「あなたの都合にこちらが従う義理はないと思うのですが」

一回りくらい年下の少女の手厳しい意見にサーラは苦笑を浮かべると、見下ろす視線を上へと移した。

「俺は構わないよ。夜目には自信あるし」

「兄さんは黙って！」

目を向けられてリゼルは快い返事をしたが、ティラに一喝されてしゅんとする。そして拗ねたように頭を落とすと、両手の人差し指をつつき合わせて、うざいくらい（ティラ談）にあからさまにいじけてみせた。

「ティラは、俺が弱いと思ってるんだ」

「そうじゃ、ないけど……」

そんな兄に、ティラは苛立ちを多分に含んだ声を上げた。だがそれでも、そうじゃないと言うと弾かれたようにリゼルは頭を上げ、満面の笑みを向けてくる。

「だったら心配しないで待っててよ。ちゃっちゃと片付けて帰ってくるから」
だがその言葉がティラが髪の毛を逆立てんばかりに怒らせたのは、リゼルが取り合ってくれないからということでも、夜にでかけるからでもない。
「良かった、連れて行くと言い出すかと思ったが」
サーラの呟きが、とどめとばかりに神経を逆撫でした。ティラの手がテーブルを叩き、その小さな拳では大した衝撃ではなかったが。
「ティラ、おててが痛くなっちゃう……」
「私も行く」
おろおろとこちらの手を包み込もうとする兄の手を逆に握り返し、視線はテーブルに落としたままティラが呟く。
「でも、危ないよ」
「そうだ。キメラの再生力と殺傷能力を甘く見るな。戦えない者がいては足手まといになる」
今度はティラが手厳しい言葉を浴びせられることになった。だが率直に足手まといと言われてもティラは動じず、なおギロリとサーラを睨み返す。無論サーラもそれで動じるようなことはなかったが、ティラにしてもそれを期待してはいない。すぐにサーラを睨むのはやめて俯いたティラは、一見納得したようにも見えた。だが。
深呼吸をひとつすると、ティラは顔を上げた。
「お兄ちゃん……オネガイ。一緒に行きたいの」
上目遣いで手を組み、可愛く呟いたティラのその声を聞いた瞬間に、結果が見えてサーラは嘆息した。
よくわからない奇声を上げながらぎゅうぎゅうとリゼルがティラを抱きしめ、ティラが苦しい、とうめく。
これが既視感（デジャヴュ）というやつかと、ぽつりとサーラが呟いた。

■□■□■

「それで、実際問題俺は何をすればいーの？」
にこにことまとわりついてくるリゼルを、サーラはまるで蝿でも落とすように払いのけた。ちなみに、蝿とどっちが鬱陶しいかと言われれば、サーラにとっては同等もしくはいい勝負と言ったところか――それにしても。
下手なナンパを続けるリゼルだが、その手はしっかり妹の手を握っている。「危ないから手を繋いでよーね」、そう言って酒場を出るときからずっと二人は手を繋いでいて、ティラは心底げんなりした顔をしていたがそれでも耐えているようだった。
男に色目を使われるのは日常茶飯事のサーラだったが、他の女（それも妹）と手を繋ぎながら声をかけてきた男はリゼルが初めてだ。そもそも、超絶シスコンのくせに女癖が悪いとか。女好きなのに女装するとか。そこは普通重複はしないだろう。
「理解に苦しむ」
「え？」
「いや独り言だ。それで、君に頼みたいことなんだが」
先頭を歩いていたサーラが足を止めて振り返ったので、必然的にリゼルとティラも足を止めることになった。街を出てからもう半刻近く経つ。町の灯はずいぶんと遠くにチラチラしているし、人気はすっかりなくなっていた。今にも闇の向こうから何かが飛び出してきそうで、ティラが我知らず兄の手を握り返す。
「……キメラが発生するのには原因がある。土地に宿る魔力が、時の流れと共に性質を変えて劣化し、現代の力と相合わなくなるからだ。その歪みからキメラが生まれる」
「？？？」
サーラが唐突に語りだしたことは、リゼルの問いへの直接的な答えではなくてリゼルが疑問符を飛ばす。だがティラは逆に少し身を乗り出した。

「古代の魔力と現代のそれとの性質が違うことは、魔法が衰退したことについての最も有名な学説です。でもそれはもう随分前から言われていることなのに、どうしてそれが最近になってキメラになるんですか？」
「君は賢いな。……だがその問いへの明確な答えは私も持っていない。ただ、古代の魔力で作られた物質が、制御に綻びを生じさせて暴発するという現象が過去多発したように、現代の随所に澱のように止まっている古代の力が余分な生命エネルギーを生み出している。私に解ることもそれくらいだ」
　それぞれが一息に述べたあと、それぞれには沈黙が生まれた。逡巡するようなそぶりを見せるティラを、サーラが見守るように紫眼に写している。
「……あのー、それで……」
　ややあってから遠慮がちに上がったリゼルの声で、ティラとサーラはようやく彼の存在を思い出したようだった。
「ああ、忘れていた。それで何が言いたかったかというと、キメラが発生する近くには、必ずキメラを生み出すポイントがあるということだ。これは余り知られていないことだし、常人には見つけられない。私はそのポイントを察知してキメラ発生の原因を絶つためキメラハンターをしている」
「それで俺は……」
「だが今回のポイントをまだ見つけられていない。近くまでは探ったのだが、いかんせんキメラの発生が多すぎる。これではどの道見つけるまでに私の力が尽きてしまう。それでリゼル、君に時間稼ぎを頼みたいんだ」
　どんどんか細くなって行くリゼルの声に苦笑を堪えながらのサーラの言葉が終わると、へにゃりとしていたリゼルのアホ毛がしゃきんと立った。同時に、涙目だった碧眼がいきいきと輝きを取り戻す。
「要するに、敵からサーラさんを守ればいいと」
「陳腐に言うとそんな感じだ」

だるそうに頭をかきながら、サーラは回れ右をして再び歩みを進めた。手を繋いだままのティラがそれを追ったので、一人闘志を燃やしていたリゼルもそれにひきずられていく。

はあ、とティラとサーラの溜息が重なったそのとき――

がさりと、すぐ側の茂みが音を立てた。

兄妹と闇夜の魔物　6

リゼルの動きは、サーラが手を翳すよりティラが悲鳴を上げるよりも早かった。ティラの手を握った手はそのままに片手だけで抜刀し、その勢いを殺さないまま刀を振り抜く。その軌跡の後には両断されたキメラの体が残り、一拍遅れて咆哮が上がり、だがその頃には塵と化したキメラの体を風が攫っていた。何も無くなった空にリゼルが息を吐き出し、抜き身のままの刀を降ろす。

「……変な感じだな。手応えはあるのに何も残らないっていうのは」

刀を握る自分の手を見つめながらリゼルがそんなことを言い、サーラは翳しかけてその必要が無くなった手を腰に当てた。

「半端な生命エネルギーは完全な体になることはできず、奴らは完全なものを求めて襲い掛かる。……哀れだと思わないか。それでも奴らは生きているんだ」

憂いを帯びたサーラの声を風が運び、リゼルは顔を上げた。

「だから金の為にキメラを屠るハンターは嫌いだ」

腰に当てた手も降ろして、サーラは兄妹に背を向けた。ブレスレットが鳴る音に消されそうなほどサーラの声は力なく、弱かった。それまでに見せていた彼女の凛とした強さを全て覆してしまうほど哀惜に満ちた声に、応えたのはリゼルだった。

「サーラさんは優しいんだね」

「君の言葉はいちいち陳腐だ」

首だけで振り返ったサーラの瞳と同時に落とした声には嘲りの色があった。それに対しティラがむっとして口を開きかけたが、先に言葉を続けたサーラがそれを遮る。

「……キメラから見れば私もハンターも同じ。違うと思いたいのは単なる私の自己満足だ」

「でもそれで満足できるのは、サーラさんが優しいからだと思う」

その嘲りが、リゼルへのものではなく自分自身へのものだったの

だと――

兄は最初からきっと気付いていたのだろう。見上げた兄の視線は真っ直ぐにサーラに向けられて、その先でサーラの憂いに満ちた表情が少し色を変えた。

「フツーはそんなことで満足を得ようとしない。そして満足しようとしている自分を責めたりしない。飽きもせずに金とか権力とかを欲したりするもんだよ」

ぎゅう、とティラが強く兄の手を握り、それに応えるように兄が強く握り返してくる。そして、離す。

「そこから動かないでね、ティラ」

放心したようにこちらを向くサーラの背後で、いくつもの気配が揺らめき始める。さすがに一瞬後にはサーラもそれに気付いてはっとした。

「行っていーよ、サーラさん。俺、キメラから人を守る正義の味方になろうと思ったけど、キメラのためにキメラを救う正義の味方になってみる」

刀を構えながらリゼルがにこっと笑う。見慣れた気の抜ける笑顔と、聞きなれてきたアホな台詞が、いつもとは違って聞こえてサーラはまた苦笑した。ずいぶんと毒されたものだ。

「……正義ほど陳腐な単語はないと思っていたが。君には似合っているかもな」

咆哮がサーラの言葉の後半をかきけして、彼女めがけて闇を裂いて光るキメラの爪が踊る。だがひらりと身を翻してそれを避けたサーラは、押し寄せるキメラの群れに突っ込み、そのまま姿を消してしまった。入れ替わるように雪崩れこんでくるキメラ達の胴体に、白刃が閃いて行く。

そして塵になったキメラの体を、次々に風が運んでいった。

■□■

塵が頬を掠めていく。それを視界の端に留めながら、サーラはキメラの群れを逆流していた。
塵と一緒に牙や爪も肌を掠めていくが、それを紙一重で避けながら、サーラは走り続けていく。すれ違い様に襲い掛かってくるキメラ達も、一度やり過ごしてしまえば深追いはしてこない。それは近くにもっと容易に食える“餌”があるからだ。しかも二つも。
キメラは基本的に“発生ポイント”からそう遠ざからない。そして、より弱いものを見分けて襲う。魔成生物である彼らの強弱の判断は魔力だ。つまり強い魔力を持つサーラは、他人と一緒にいれば真っ先にキメラのターゲットからは外れる。持ち合わせる知識と今までの経験からサーラが立てた作戦は、誰かを囮にして、その間にポイントを探し当てて消滅させることだった。
そしてリゼルはその囮に最適な人物だった。
すぐ死なれては囮の意味がない。それ以前に、さすがに死なせてしまっては後味が悪い。だからと言って、強すぎる力を持てばターゲットにはならない。その点リゼルは物理攻撃のみでずば抜けた戦闘能力を持ち、さらにサーラにとって都合の良いことには深追いする気と知識がない。これ以上にうってつけの人物はいない。
ポイントを消滅させれば、少なくともそれを発生源としているこの辺り一帯のキメラは消える。彼ならそれまで持ちこたえてくれるはずだ。
しかし、ティラの存在が気がかりだった。誰かを守りながら戦い、両方無事でいることは格段に難易度が上がる。焦燥感にサーラは舌打ちした。自分らしくない。
「急がないと」
認めながらも呟くと、サーラは目を閉じ手を翳した。
『“探査（スキャン）”』
呟きと共に、目には見えない力の奔流が周囲を取り巻いていく。

だが彼女が望む結果は得られなかった。
「……何故？」
問いかけに答えられる者などいないことを知りながら、彼女は何故と問う。焦燥が冷静を侵食していた。
キメラの群れと、それが押し寄せる方向、そして地理とこの地に属する魔力から、サーラはある程度ポイントのアタリをつけていた。だからこの結果は完全に予想外だった。
「だったら何故、群れはいつも同じ場所に止まる？　ポイントを守るためじゃなければ……」
焦燥を抑えて、思考を働かせる。だが思いついた結論は、およそ自信の持てるものではなかった。
隠すため？
口の中だけで呟いて頭を振る。
「キメラにそんな知能はない。いや、なかった……筈だ」
だがそもそも、キメラの発生自体がもともとはなかったことの筈だ。それに、その数は程度を増して、行動範囲も少しずつだが広がっている。
「――リゼル」
ついに焦燥が全ての感情を上回ると、サーラは唇を噛み踵を返した。

兄弟と闇夜の魔物　7

既に、積もった塵は風が運べないほどの量になっている。
これではそのうち、塵で兄の姿が見えなくなってしまうと思った瞬間、ティラの背中を冷たいものが走った。
「……うおおおあああ！」
ずっと一緒にいたのに全く聞き慣れない兄の雄叫びが黒い夜空に吸い込まれていき、そして塵がまた増えてゆく。だがいくらその量を増やしても、キメラは後から後から姿を現す。どこからともなく、いつまでも。そうして次々とリゼルに牙を向いていく。
キメラの再生力はサーラが述べていた通り半端ではなく、手を切り飛ばした程度では一時凌ぎにしかならなかった。すぐに再生して、息つく暇もなく再びその爪を閃かせる。それをリゼルの刀が両断し、その間にも上から迫る顎を身を捻って避け、そのついでに一緒に回転させた刀が横から迫るキメラを薙ぎ、そして目の前で縦に刀を構えた瞬間、勢いまかせに突っ込んできたキメラが真っ二つに裂かれながらリゼルの両隣をすり抜け、塵になる。
彼らの攻撃は休まることがなく、リゼルは体力を消耗しないように最小限の動きでそれを捌いていた。だがその集中が途切れることがない限り、疲労は蓄積される。兄の頬を伝うのは汗ばかりでなく、赤いものも目立つようになった。
「――兄さん！」
ついにティラは叫んだ。
声をかければ集中を切らすことに繋がり、隙へと変わるかもしれない。そう危惧したから今まで見守ったが、限界だった。
「兄さん、もうやめようよ！　逃げよう！　これじゃキリが無いわ！！」
リゼルがそれで隙を作ることはなかったが、大きく吼えると周囲のキメラを一掃した。そこから次の大群が押し寄せる一瞬のタイム

ラグに、兄はこちらに視線を向けた。
「サーラさんの話だと、発生源をどうにかすればこいつらはどうにかなるみたいだった。もう結構時間が経つから、そろそろ何とかなるよ」
「……そんなの！」
傷を負いながらなお、兄の声は間延びしていてティラの苛立ちを増幅させる。
「そんなの本当かどうかわからないじゃない！　本当だとしても、あの人が戻ってくる保証がないわ！　失敗して逃げたかもしれない。ううん、兄さんを嵌める気だったかもしれない！」
「俺を嵌めて、サーラさんにメリットがないでしょ」
「誰かに頼まれたかも――」
言いかけてティラは口を噤んだ。爪が皮膚を突き破るくらい拳を握り締める。兄を嵌めてメリットになる人物がいるかもしれないと考える自分に嫌悪感を覚えた。
「疑ったって自分が辛くなるだけだよ、ティラ。信じて自分が傷つくだけならいいじゃない。約束を破って誰かが傷つくほうが痛いよ」
俺はね。
そう言って笑う笑顔が、塵の向こうに消える。
だけど、それで堪えた涙を流すことができた。それを兄に見られれば、馬鹿みたいに騒ぐに決まっているから。
馬鹿みたいに心配するから。だから泣かない。
心配させたくない。自分のことで煩わせたくない。あの気が抜けるような笑顔で、ずっと兄には笑っていて欲しいから。だから。
「私は、私はお兄ちゃんがいなくなることが、一緒にいられなくなることが、一番痛いよ……！」
塵を手で掻き分けて、兄の姿を探す。そして、視界が晴れたと思った瞬間、また曇る。顔を上げると、眼前にキメラの牙があった。

悲鳴すら、上げる暇はなく。

「ティラ！！！」

咄嗟に避けたキメラが自分の横を通りすぎるのにリゼルもまた戦慄していた。その牙がどこに向くか予想できたからだ。とっさに後ろに向けた刀は、意に反してとびついてきたキメラを薙ぎ、勢いと速さを失う。届かなかった刃先に失望する暇はなくて、ほぼ反射的にリゼルは刀を投げた。真っ直ぐにそれを背に突き立て、どう、とキメラの体が地に落ちる。その向こうに、妹の無事な姿を見て、だけど安堵するにはあまりに早計な状況だった。

背に刃を立てたまま、キメラが起き上がる。だが、本当に危機なのはリゼルの方だった。

ティラの双眸に、丸腰でこちらに意識を全集中させた兄に一斉に飛び掛るキメラが写る。

「お兄ちゃ――――」

言葉は声にならない。声にしている暇もない。

なんとかしなければ。その思いだけで手を翳す。

小さな力では何にもならない。焼き払うくらいの大きな力。

その一瞬、膨大な量の情報が頭にめぐった。

書物から得た魔法の知識。現代魔法の定義。その具現の方法。そしてそれに必要な力。

サーラが翳した手から迸った炎。そして口にした呪文。異なる定義と、桁外れに強い力。彼女は何と言っていた？

『“我が御名において、命ず！”』

闇夜を塗り替える光のスパークに、サーラは反射的に目の前で手を翳した。
それと同時に、キメラが複数、こちらに向かって襲い掛かってくる。それは、自分より強い力を持つ存在が現れたことを意味した。
「この光――？」
怪訝な声を上げながらも、翳した手から生まれた炎がキメラを屠る。
そうしながら、必死で駆け戻った場所には、倒れたリゼルと、彼に寄り添うティラの姿があった。
「ティエラ、何が――」
「来ないで」
恐る恐る声をかけた先で、ティラがこちらに向けて手を翳した。
「お兄ちゃんを傷つけるものは私が許さない」
瞬間、凄まじい光が彼女を包む。それに飲まれながらも、サーラは冷静を繋いだ。
ティラを包む光の奔流は、一部分だけを避けている。それが視えたから冷静になれた。
「あった……」
やはり、キメラの群れはあえてポイントを避けていた。群れればそこにポイントがあることを示すと考えたからか、或いはただの偶然か。だがそれを考えて結論を出すのは夜が明けてからでも遅くない。それよりやらねばならないことがあった。
「ティエラ、手を下ろせ。私はお前の兄を助けたい。このキメラを消して、リゼルの傷を癒せるのは私だけだ。聡いお前なら解るだろう」
それでもにらみ合いはしばし続いたが、その間に空間が歪んでキメラを生み出す。ティラとサーラの両方の力に触れてそれはすぐに消えたが、どちらの力もそう持続するものではない。既にティラは激しく肩で息をして、髪は汗でべったりと肌にはりついている。

それからすぐに、ティラを包む光は消えて、それと同時に彼女も兄に折り重なるようにして倒れた。サーラが安堵の息をつき、そしてすぐに手を翳す。

『“汝、虚無の海にて眠れ。物質消去（ライフデリート）”』

サーラの唇から歌のような声が紡がれると、今まさに彼女に爪を立てようとしていたキメラが黒い霧に飲まれて消えた。

そして後には、夜の闇と静寂だけが残った。

兄妹と闇夜の魔物　8

「ううっ、名残惜しいですサーラさん」
ずびずびと鼻を鳴らしながらぎゅっと服の袖を掴むリゼルの手を、サーラは気だるそうに叩き落とした。手をさすりながらもなお、ぐしぐしと泣くリゼルの隣で、ティラが欠伸をしている。
「世話になったな」
「なんならこれからも俺が世話を……」
棒読みの謝辞にもめげず、それでも口説こうとしているリゼルを見て、ついにサーラは堪えていた溜息をこれでもかというほどわざとらしく吐き出して見せた。それから真っ直ぐにリゼルに視線を据え、はっきりと告げる。
「君のことは嫌いじゃないが、苦手だ」
「それってことは、つまり……」
リゼルが腕を組み、考え込むように頭を落とす。考えなければわからないようなことでもないのにと、ティラは半眼で兄を見たが、兄が理解するのにはたっぷり３０秒を要した。
「俺、振られたってこと？」
『そういうこと』
女性二人の声が無情にハモり、余計にリゼルを失意のどん底に突き落とす。ぶわわわ、と滝のように涙を流し続けていると、ふと柔らかな感触を額に感じた。
「へ？」
「！？」
「でも、そうね。妹離れできたら考えてあげる」
リゼルの額から唇を離し、さわやかな笑みでサーラが歌う。最後にもう一度、目を点にした兄妹を視界に収めると、あとは振り返らず別れの言葉も口にせずにサーラは歩き出した。
放心する兄妹はまだ凍りついたままだと、背中を通じる気配でわ

かる。
「不思議な兄妹だ」
笑み混じりのサーラの囁きは、底抜けの蒼天に溶けて消えた。
「あうううう、サーラさん……」
「もう、泣かないでよ鬱陶しい」
日が暮れてもまだめそめそしている兄に、苛立ち紛れに枕を投げる。枕は銀髪にぽこんと当たって床に落ちた。拾い上げたリゼルが、それに抱きついてなおもおいおいと泣き続ける。
「……望みがナシってわけでもなかったじゃない？　よかったわね、デコチューされて」
投げ遣りにそんなことを言ってやると、途端に嗚咽が止んだ。だがこれは色んな意味で失言だったと。
悟ったのは目をキラキラさせた兄と目が合ってからだった。
「嫉妬？」
「だから、ちが……」
「妬かなくて大丈夫だよ。お兄ちゃんがデコチューしてあげるから！」
「意味わかんないから！！」
もうひとつ枕を投げつけると、ティラはベッドに潜り込み、頭からシーツを被った。するとすぐに睡魔が襲ってくる。
結局、あのあとどうなったのかティラにはよく解らない。気がついたらリゼルに背負われ岐路を辿っていた。だがその間も眠くて堪らず、兄の背から伝わる体温でその無事が知れたら、そのまま昼まで眠ってしまった。サーラが別れを告げたのは起きてすぐのことである。
しかしそれだけ眠ったにも関わらず、倦怠感は続いていた。だがそのまどろみは、すぐ側で感じた気配に掻き消される。
「――兄さん！？　人のベッドに入ってこないで！！」
「いいじゃんかー。ちょっと前まではいつも一緒に寝てたでしょ？」

確かにそのぬくもりは、よく知ったものでとても落ち着くものだ。
さっきよりも心地よい眠気に誘われ、怒りは消えてしまう。いやもともと怒ってなどいないのだが。
「おやすみ、ティラ」
兄の声が、優しくティラを包み込む。今日はよく眠れそうだった。

兄妹と闇夜の魔物　8（後書き）

兄妹と闇夜の魔物・完　次章へ続く★

兄妹と亡国の姫君　1

温かい。
そのぬくもりは、生まれたての頃、揺り篭に揺られていた頃のよう。そんな、もう覚えていないはずの遠い記憶を手繰り寄せてくれるるような、そんな温かさ。
心地よさは睡魔と一緒に体をすっぽりと包み込むが、ふとその正体を探ろうとしたとき、意識は覚醒に向かった。
――そして。

「……」

目覚めて、その正体を知ると心地よさはだいぶ減退した。
抱き枕のようにこちらをぎゅうぎゅうと抱きしめながら、すぐ側で兄がすかすかと実に幸せそうな寝息を立てている。
勝手にベッドに入るなと言っても、この兄は聞きやしない。だからといって放っておくとこういう事態になっている。嘆息しながら、ティラは爆睡する兄の鼻先に声を掛けた。
「兄さん、朝よ。苦しいから離して」
すると兄はむにゃ、と間の抜けた声を上げ――
「うーん、サーラさん～」
ますますぎゅうっと抱きしめる腕に力を込める、兄のその寝言に。
ティラの頭の中で、何かの線が派手な音を立ててブチ切れた。

頬がひりひり痛むが、それ以上に心が痛む。
起きてから一度も口をきいてくれない妹に、リゼルは何度目かの哀願を試みていた。

「ティラぁ。そろそろ口きいてくれないと、お兄ちゃん悲しくて死んじゃう」
今日もその美貌で周囲の視線を独り占めのリゼルは、さらにめそめそと泣き続けることでさらに何事かと人目を集めていた。いつもはそれに閉口していたティラだが、今は怒りの方がそれを上回っているので、だばだばと涙を流すリゼルを無視して食事をぱくついている。
「ねぇ、ティラぁ。なんでそんなに怒ってるのぉ」
縋りついてくる兄を邪険に手で押し戻しながら、ティラは兄の問いかけにますます苛立ちを募らせていた。
始末の悪いことには、この兄は寝言を言った自覚がないらしい。
「一緒に寝るくらいいいじゃない～、兄妹なんだから～」
まるでわかっていない兄に対し、ティラは苛立ちを露わにするように、飲み干した果汁のカップを音を立てておいた。そろそろ恥ずかしさも限界だ。
「もういい歳なんだからひとりで寝なさい！」
やっと口を開いてくれたかと思えば飛び出したのは怒号で、リゼルはしゅんとした。だって、と口を尖らせ拗ねて見せる兄をもう一度ギロリと睨みつけて黙らせ、また苛立ちまぎれにベーコンにフォークを突き立てる。
「いかがわしい夢みるくらいなら、他の女の人と寝ればいいのよ」
そうしてぼそりと漏らした呟きに、さーっとリゼルの顔色が変わっていく。
「どど、どーして知ってるの。もしかして双子のシンクロ？」
「私と兄さんは、双子じゃないでしょう。別にシンクロしてなくても、兄さんはバレバレなの」
半眼で呆れた声を上げると、だがこちらの怒りは収まっていないというのに、青くなった兄の表情は一転、満面の笑みになる。
「俺のこと、解ってくれてるんだねっ」
「……っ」

ばか、と口をつきかけた悪態は、無垢な笑顔の前に霧散する。その代わりに、ティラは顔を背けると、空になったカップを突きつけた。

「おかわりっ」

「はーい！」

そこに赦免の空気を見て取ると、リゼルは尻尾でも振りそうなほどの軽い足取りで、カップを持ってドリンクコーナーへと向かって行った。羞恥も限界だが、それ以上に怒り続けるのも限界で。

その背を見て、ティラは相好を崩した。

そして食事を再開しようとした瞬間、フォークを持つ手がぐいと掴まれた。怪訝な顔をして、振り向く。もう兄が戻ってきたのかと思ったのだが、視界に入ったのは全く見知らぬ青年だった。

「食事中に失礼。貴女に頼みがあるのです。我が主の元へ」

振り払おうとした手はびくともしなかった。それもその筈で、こちらは年端もいかぬ少女であるのに対し、相手は大人の男だ。それも長身で、細身ではあるが筋肉はがっちりしているのが服の上からでも解る。

「……連れがいますので」

力尽くでと言われれば成す術などない。それでもティラはぴしゃりと取り付く島のない声を上げた。それに対し、青年の態度は変わらなかった。即ち、怒るでもないが諦めてくれる風でもない。

「申し訳ないが時間がない」

声は穏やかだったが、それは力尽くでというのとなんら変わりのない宣告だった。ぐい、と腕がひっぱり上げられ、手から落ちたフォークが皿に当たってかしゃんと音を立てる。だが、食事時で混みあう食堂で、そんな音を聞きつける者も、少女が一人拉致されそうな事態に気付く者も居そうにはなかった。

――たった一人を除いて。

人ごみを縫って飛んできたカップが、青年の頭を直撃して果汁を撒き散らす。致命傷になるはずもないが存在を主張するには十分だったようで、果たして後頭部をさすりながら、青年は振り返った。

「俺の妹に触れるんじゃねぇよ」

カップを投げた格好のまま、切れまくったリゼルが氷点下の声を紡いだ。

兄妹と亡国の姫君　2

頭からオレンジの果汁を滴らせることになっても、青年には特にそれを気にする様子はなかった。もしかして感情が欠落しているのではないかと思うほど表情のない顔がリゼルの方を向く。その静かさとは対照的に、リゼルは全身で怒りながら青年を睨んでいた。

「ティラを離せ」

「……それはできない。主のご命令だ」

「あ、そー」

まずい、とティラは自分が捕まっている状況も忘れて危惧した。リゼルが怒っている。とんでもなく怒っている。この兄は、多少馬鹿だが基本的には人畜無害だ。だが妹が関わると、そうでもない。

「兄さん、落ち着――」

「聞けないってんなら、聞かせるまでだ」

遅かった、とティラが青くなる頃には、既にリゼルは構えていた。体勢を低くして一歩で間合いを詰めたリゼルが、下段から抜刀する。その切っ先が青年の腕を掠めるか否かの刹那、青年はティラから手を離してそれをかわした。その後で再びティラを捕えようと手を伸ばすが、リゼルの刀がそれを許さない。

再び刀がしなり、この辺りでさすがに周囲の客も異変に気付いて騒ぎだす。店内で真剣を振り回して暴れている者がいるのだから無理もない。

店は一瞬でパニック状態になり、悲鳴を上げながら客は逃げ惑う。平静を保っているのは恐らくティラと、そして刀を向けられた青年だけだろう。

――そう、この青年は、全く表情を動かすことなくリゼルの攻撃を避け続けていた。その全ての行動に、ひとつも無駄はない。かわす動きが少しでも早すぎれば、リゼルはそれに追随する。だが捕えたと見えた瞬間、寸前で青年の体は刀の軌跡の横にいる。反応しき

れないリゼルの刀は、そのまま空を裂いてテーブルを両断する。食器が床へと落下し、けたたましい音を立てる。
「兄さ――」
「逃げろ、ティラ！」
止めようにも、そうする手段がない。せめて叫ぶティラの声を掻き消して、兄が警告を飛ばす。だがティラは動けなかった。
店内で刀を抜くなどリゼルの行動は非常識極まりない。本音を言えば他人の振りで逃げたいところではあるのだが――　そうできないのは、相手の青年が只者ではないことが解るからだ。リゼルは本当に、本当に厄介でどうしようもない馬鹿兄だが、一度刀を持てば、その腕前だけは誰にも引けを取らない。そのリゼルと対等に戦える時点で只者ではないのだ。そしてティラはそんな男に――何故か――狙われている。
きっとリゼルは男が只者ではないと見抜き、最初から全力で斬りかかっていったのだろう。
妹を守るために。そんな兄を置いて逃げられるほど、妹は薄情ではない。
「兄さん――！」
ティラの叫びを置いて、リゼルと青年は攻防を繰り広げながら、店の外へと向かっている。青年が誘導しているのか、兄が仕向けているのかはわからないが、どちらにしても店の中では動き辛い筈だった。
そしてようやく店の外へと出た瞬間に、青年が背負っていた剣を抜き放つ。通行人が悲鳴を上げて逃げるが、そのうちの半分は野次馬と化した。悲鳴に歓声も混じっているのは、恐らく戦っている両方が美形だからだろう。青年も、リゼルのような華やかさはないが、なかなかに整った容貌をしていた。二人の攻防は瞬く間に見世物と化す。
いよいよ、これだけの騒ぎと化した場に兄を放ってはいけなくなった。

だが裂帛の気合と共に青年の剣が繰り出されるとそれどころではなく、ティラは全身の血の気が一気に引いた。店の外に出て、ついに青年が攻勢に転じたのだ。それを避けるリゼルに危なげはないが、今度はリゼルが防戦一方になる。

青年の剣は、細身のリゼルの刀に対して随分と重量がありそうな幅の広い両刃剣だった。しかしそれに釣り合わないすばらしいスピードで連続攻撃を仕掛けてくる。リゼルはそれを紙一重で避け続けていたが、直に追い込まれて退路を失くす。一瞬ティラは目を覆いかけたが、その前にリゼルは跳躍し、その爪先の下を青年の剣が横薙ぎしていた。そのままリゼルが軽い身のこなしで屋根の上まで逃れ、息をつく暇もなく青年もその後を追う。斬り合いの場所は屋根の上へと移った。

その頃には下は歓声と喝采にあふれ、二人の決闘は平和な街の思わぬ余興と化して、賭けを始める声が至るところで上がり始めた。その輪からは少し外れた場所で屋根の上の二人を見上げながら、ティラは何とかこの騒ぎを止められないものかと思案していた。だが良い策はひとつも思い浮かばない。すぐ後ろで唐突に気配を感じたのは、途方に暮れたそのときだった。

「全くあの人は、何を遊んでいるんだか」

振り返ると、ファーがあしらわれた白いケープをまとった少女が呆れたように呟いた。

「……あなたは？」

言葉と状況で、おそらくは兄と戦っている青年の関係者だと直感する。その暗黙の問いかけにも答えるように、少女がフードを後ろに払った。

フェアブロンドが零れ、透き通ったブルーアイがまっすぐに射抜いてくる。歳はティラとそういくつも変わらないだろうが、気の強そうな表情は少し大人びて見せていた。そんな面差しの少女は、酷く“誰か”を彷彿とさせる。

「あなた……」

「わたくしの名は、イリヤ・マーリス・カリヌ・ミルヴァ＝グランヴァニス。あっちで貴方の連れと遊んでいるのはわたくしの連れの、フリートですわ」
「……あなたの連れなら、今すぐあの馬鹿騒ぎをやめさせて欲しいのですが」
少なくとも表向きは一切の動揺を飲み込んで、ティラが淡々とした、だが切実な要求を述べる。すると、彼女――イリヤは見下したような目でこちらを見、口元に手を当てて、まぁ、と大仰に嘆いて見せた。
「こちらがご挨拶申し上げておりますのに、貴方は名乗る礼儀もご存知ありませんの？」
高飛車な物言いでこちらの要求をはぐらかされたことにはむっとしたが、話をこじらせては余計な時間を流すばかりだ。焦燥を押し殺して、ティラは端的に名乗った。
「ティエラです」
「わたくしがフルネームで名乗っているのですよ？　失礼だとは思わなくて？」
「……ティエラ・オーア」
苦虫を噛んだような表情でティラが唸る。そんなのティラ態度を、イリヤは気に入らなそうにふんぞり返って眺めていたが、やがてふっと息を吐くと「まあいいですわ」と呟いた。
「ティエラ。わたくしあなたにお願いがあるんですの」
「その前に、あの騒ぎを止めてとお願いした筈です。そうでなければ聞けません」
「あんなもの、どう止めればいいのかわかりませんわ」
イリヤが肩を竦める。
だが、イリヤにしても手段を持たないのだろう。自分が手をこまねいているのと同じように。だが。
「放っておけばおさまります。それよりわたくしの願いを聞きなさい、ティラ。わたくしと一緒に来るのです」

手を掴まれて引かれる。それは先ほどの青年と比べれば、ティラでも振り払えそうなほどどうということはない力だったが。
あえてその手に引かれたまま、ティラは妙に落ち着いていた。いい策を思いついたからだ。いや、考えなかったわけではない。だができれば最終手段にしたかったのだけれど。もうこの際仕方ないだろう。
遠い目をしたこちらにイリヤが怪訝な眼差しを向けてくるが、構わずティラは思い切り息を吸い込み、そして叫んだ。
「お兄ちゃん、たすけてー！　さらわれるぅーーー！！」
それから、ほどなくして。
地響きを立てて駆けつけてきた兄を引っつかんで、ティラはその場からのトンズラを試みるのであった。

兄妹と亡国の姫君　3

あれだけ沸きかえった町も、暮れる頃にはいつもの静けさを取り戻していた。
だが心に平安が訪れるのはまだ先のことになりそうだとティラが嘆息したのは、次の町へ行く馬車に乗ろうとしたこちらの手を、がしりと掴まれたからだった。
「逃げようったって、そうは行きませんわよ」
振り返るまでもなく、声の主には想像がついた。犬みたいにリゼルが髪の毛を逆立てて唸るのに、余計に頭痛が増す。だがとりあえずはステップにかけた足を下ろし、ティラは御者に乗らない意志を示した。
ほどなくしてがらがらと音を立て、馬車が出発する。
「……何の御用ですか」
「随分ですわね。……そこの銀髪の方がめちゃくちゃにしたお店の備品は、わたくしが弁済しておきましたわ。ついでに昼間の騒ぎも、ショーということで片付けておきました。これであなた方はお尋ね者にならずに済んだわけです。わたくしはあなた方の恩人ではなくて？」
「そうなるきっかけを作ったのは、そちらでは」
「否定はしないが、刀を抜いてまで暴れる必要はなかったのではないか？」
答えは意外な方から返って来た。そちらに向けて視線を上げると、イリヤの隣に影のように付き従う青年が、こちらを静かに見下ろしている。名前は確か、フリートと言ったか。
「確かに強引だったのは詫びる。しかし傷つけるつもりはなかった」
「煩いな。どんな理由があろうと俺は俺以外の男がティラに触れるのは許さん」
もしかして斬りかかった理由はそれだけかと。突っ込もうとして

やめた。多分それだけだろう、この兄の場合。
二人の会話は、どう考えてもフリートの方が正論だった。――というより、リゼルの言っていることが無茶苦茶だ。何だか、だんだん悪いのはこちらのような気がしてきて、ティラの頭痛は程度を増した。
「解りました。兄が暴れたことについては、確かに兄が悪いです。後始末して下さったことにも感謝します。だから、話は聞きましょう。そのお願いを引き受けるかどうかは別ですけど」
腹を決めてティラがそう告げる。リゼルの不満そうな視線を感じたが、一瞥で黙らせた。
だがイリヤの興味を引いたのは、専ら話を聞くと言ったことではなかったようだ。
「兄。貴方たち、兄妹でしたの？」
驚きを示すように口元に手を当て、イリヤは交互にリゼルとティラを見た。その後で彼女が口にするであろう言葉が、ティラには予想できていた。
「似てませんわね」
「よく言われます」
苦笑するティラから視線を外し、イリヤはそれをリゼルに固定すると、軽くスカートをつまんで会釈した。
「ご挨拶が遅れましたわね。わたくしはイリヤ・マーリス・カリヌ・ミルヴァ＝グランヴァニス。連れは、フリート・シルヴァス。貴方の名前を教えて頂けるかしら」
見上げられて、リゼルは不機嫌な表情のままイリヤを見下ろした。リゼルが女性に対してそのような不遜な態度を取るのは珍しい。
「リゼル」
「……あなた方って本当に兄妹ですわね。礼儀を知らないところがそっくりですわ」
イリヤが溜息を付き、リゼルが怪訝な顔をする。一方でティラは少し慌てていた。そっと影で兄の服を引こうとするが、イリヤに見

咎められて引っ込める。
「わたくしが身元の全てを明かして丁寧にご挨拶申し上げているんですの。少しは応えようという気になりませんの？」
ぴしゃりと言われ、リゼルが嫌そうな顔をする。だが彼はすぐに思い直したように姿勢を正し、胸に手を当て軽く頭を下げた。
「失礼致しました。リゼル・アーシェントと申します。グランヴァニス皇女イリヤ様におかれましてはご機嫌麗しく、心よりお慶び申し上げます」
軽く皮肉を含んだリゼルの声も、その声色も口調も、まるで兄らしくなくてティラが戸惑う。だがそれ以上に驚いたのは、兄が口にしたことだった。
「皇女？」
イリヤもまたティラと似たような表情だったのだが、ふと苦笑した。だが彼女が次に述べたのは、それとは直接関係のないことだった。
「金に銀（オーア アーシェント）……ね。あなた方は兄妹ではなかったの？」
暗に偽名でしょうと問いかけながらも、イリヤはそれ以上追及してはこなかった。ふ、と相好を崩して半歩引き、背後に見える豪奢な白を真っ直ぐに指差す。
「お話はあそこで致しましょう。リゼルにティエラ。異存はないですわよね？」
問いかけのようでありながら、その実そんなもの言わせないという口調のイリヤに、リゼルもティエラもしぶしぶながら従うことにするのだった。

兄妹と亡国の姫君　4

先導するイリヤに誘われて、リゼルとティラは城へと向かっていた。

その間、ずっとイリヤが無言だったので、一行は気まずい沈黙に包まれていた。もともとティラやフリートは無駄話をするような性質ではないし、リゼルまでもが不機嫌そうな顔をそのままに、一言も言葉を発さなかった。だがティラは、気を抜けば出そうになる溜息をかみ殺すのに、それなりに忙しかったりしたのだが。

また面倒ごとになりそうだ。そう思うと溜息が止まらない。

兄は美人と見れば後を追う、妹が誰かに話しかけられただけで烈火の如く怒る。そしてそれがまたトラブルを起こして厄介ごとの渦に巻き込まれていくのだ。

そもそも、兄と静かな旅をしようというのが、無理な相談なのだろう。

城に辿りついたのは、ティラが遠い目でそんな結論に行き着いた頃だった。だが城が目と鼻の先になって、急にイリヤは足を止めた。

「ああ、そうですわ」

急にそんな独り言を言ってティラを振り返り、何事かと彼女を見返すティラの前で、イリヤは身に着けていた白のケープを脱ぎ始める。そして、怪訝な顔をするティラにそれを被せた。

「さあ、行きますわよ」

そしてまた歩き出す。リゼルは怪訝な顔をしていたが、ティラはなんとなくイリヤの目的が解ってきた。いや、解ってきたというより最初から予想はしていたのだ。それが確信に変わって、ついに堪えていた溜息を吐き出してしまう。だが、今ならフードに隠れてわからないだろう。

ケープは暖かいがとても軽い。肌触りといい、恐らくはとても高価なものだ。あまり馴染みのないそんな感触を肌に感じながら、ま

たイリヤの後を追う。イリヤは正門を避けると、人目を忍ぶように裏門から城の中へと足を踏み入れる。
「どうぞ。わたくしの部屋ですわ」
通された場所でイリヤが口にしたのは意外な言葉だった。
イリヤの高飛車な態度や口調と裏腹に、彼女の部屋は質素なものだった。確かに、敷かれた絨毯やソファの質は素人目にも良いものだったが、華やかさはない。サイドボードの上には彼女の年に相応しく縫いぐるみなどがおいてあったが、目に宝石が付いていたりもしない。町の雑貨屋に売っていそうなごく普通のものだ。そして、そもそもこの部屋自体が、城とは切り離された離れにあった。
「狭くて汚いところですが、どうぞお座りになって」
ティラの驚きを見て取ったのか、苦笑しながらイリヤが椅子を勧める。まだ不躾に部屋をきょろきょろと見回している兄を肘で小突いて嗜めながら、ティラはケープを脱いでソファに身を沈めた。
質素だ、と感じたのはあくまでイリヤのイメージからで――それを抜きにすれば、この部屋だって十分に広い。このソファだって、一般庶民には馴染みのない値段だろう。そんなふかふかで座り心地の良いソファに座りながら、ティラは唐突にここが離れであっても城内だということを思い出した。そして、兄がイリヤを「皇女」と呼んだことも思い出す。
ティラはグランヴァニスという国に心当たりはなかったが、この大陸には新興国が多い。もしかして自分の態度は不敬に当たるのかもしれないと不安になったが、無理に連れてきたのは向こうなのだしと開き直る。そもそも隣の兄がもっと不遜な態度をしている時点で手遅れなのだろうが。
さすがにフリートはソファには座らずイリヤの後ろに控えた形で、イリヤはようやく口を開いた。
「さて、最初に申し上げておきますが。グランヴァニスは３０年も前の戦で滅びました。わたくしは皇女ではありませんわ」
「知ってるよ。ただの嫌味」

組んだ足の上に手をおいて、リゼルが淡々と返す。その態度にイリヤが明らかに顔色を変えたが、堪えたようだった。自身を落ち着けるように乗り出しかけた身をまたソファの背もたれに沈め、何度か深呼吸をする。

「申し訳ありません。兄が失礼なことを」

いくらなんでも言いすぎだとティラは兄を睨んだが、目を逸らされた。相当に機嫌が悪いようだったが、ここまであからさまに怒るのも珍しくて、イリヤよりもティラの方が狼狽してしまう。逆に完全に平静を取り戻したらしいイリヤがティラをおさめた。

「……良いですわ。そう、グランヴァニスはもう無いのです。しかしお父様は戦が始まってすぐ他の大陸に逃れ、そして戦が終わってからこのヴァニスの地に戻り国の再建を始めたんですの。その間にわたくしが生まれました」

自分を指し示し、イリヤが一旦言葉を切る。父のことを語るイリヤの口調は誇らしげだったが、次の瞬間その口調と表情は一転した。

「……父が過労で没したのは昨年の暮れでしたわ」

その瞬間、さすがにリゼルも組んでいた足をほどくと気まずそうな顔をした。ティラもまた表情を曇らす。まだ家族を失った経験はティラにはないが、自分と重ねてみると想像もしたくなかった。今は離れているが、ティラは父と母が好きだ。いなくなることなど考えたくもない。

「それで、私に頼み事というのは何なのですか？」

重くなった場の空気を取り払うように、ティラは話題を変えた。イリヤが哀しい表情をしたのは一瞬のことで、すぐにいつもの強気な顔つきになってきっとこちらを睨みつけてくる。

「だから今そのお話をしているんですの。急かさないで下さる？」

だが、それがなんとなく空元気のようにティラには思えてきた。しかしそれを追求したところでどうしようもないし、何よりそうであっても、それを悟られることをこの少女は望まないだろう。黙って頷くと、満足したようにイリヤもひとつ頷き、話を続ける。

「父が亡くなって問題になったのは、誰が王座につくかということです。ですが問題になるのがおかしいのですわ。当然娘であるわたくしが最も相応しいのに、父の腹心が名乗りを上げたのです。……それからですわ。わたくしが襲われるようになったのは」
「……街でやたら殺気を感じたのはそのせいか」
ぼそりとリゼルが呟き、ティラとイリヤが彼を見る。それからイリヤはすぐに確認するようにフリートに視線を移した。彼が頷くと、明らかにショックを受けたようだったが、すぐにかぶりを振って諦めたように俯く。そして、憂いを消してから顔を上げた。
「それで、ティエラ。頼みというのは……」
「私に、身代わりになれと。そう言いたいのですね」
言葉を濁したイリヤに変わってティラが先回りする。そのことに、イリヤも驚きを示したりはしなかった。
ティラに声をかけた時点で、ティラがそれを察していることなど予想できただろう。
ブロンドにブルーアイ、同じような背格好と年頃。そしてその年に似合わず、大人びた容貌。
ティラとイリヤは、ぱっと見ただけでは区別がつかないほど、よく似ていたのである。

兄妹と亡国の姫君　5

同じ色の瞳が真っ直ぐにぶつかり合い、しばらくは静寂が場を包んだ。
だがややあっておもむろにイリヤが首を縦に振り、そして真っ先に動いたのはリゼルだった。
「断る。行こう、ティラ」
「待って下さい！　一ヶ月……いえ、一週間で良いんですの」
「話にならない」
立ち上がり、ティラの手を引いて今にも退室しそうなリゼルにイリヤが取り縋る。だがその懇願もリゼルはあっさりと断ち切った。
「自分の代わりに他人を危険に晒そうなんて、虫が良すぎると思わない？」
見下ろしてくる冷酷なまでの瞳は同じ青の筈なのに、鏡で見る自分の青よりずっと冷たい。まるで氷のようなその瞳にイリヤは僅かばかり怯んだ。その間にさっさと立ち去ろうとするリゼル、何事かを言いかけたティラ、そのいずれの行動も実行される前に部屋の扉が開いた。
「――まぁ。貴方が例の」
重苦しくなった場の空気にそぐわない華やかな声が部屋に飛び込み、一同の注意を攫う。
豪奢な金髪を結い上げ、上質そうな絹のドレスを纏った女性が、その碧眼に興味津々にティラを映した。
「お母様」
イリヤがそう言う前から、リゼルにもティラにもなんとなく想像はついた。彼女はずかずかと部屋に入ってくると、今までイリヤが座っていたソファに腰を下ろす。フリートが、開け放されたままの扉をそっと閉めた。
「御機嫌よう。わたくしはヴァシリー・マイヤ・ラーナ・ラタ・ア

ルカーサ。イリヤの母ですわ」
　イリヤの母はそう名乗り上げると、値踏みするようにじろじろとティラを見た。リゼルは嫌そうな表情をあからさまにしたが、懇願の視線を感じてひとまずはソファに身を戻す。イリヤとティラが安堵の息を吐いて、イリヤはそのまま兄妹の横に立ち、フリートは扉の位置で控えている。
　一瞬静寂が訪れたが、焦れたようなヴァシリーの視線にティラははっとして口を開きかけた。だがそれを制してリゼルが口を開く。
「俺はリゼル。妹はティエラ。卑しい身ゆえ家名は持っていない」
「……そう。それでは礼儀を知らぬのも致し方ないことね」
　リゼルの態度は、さきほどのように不遜なものではなかったが、かといって丁寧なものでもなかった。それは態度が横柄というよりは、ただ単に怒っているだけなのだが、ヴァシリーは気づかず吐き捨てる。少しだけ彼女は表情を歪めたが、すぐに笑顔を取り繕うと――繕ったことが丸分かりではあったが――、再びティラへと目を向けた。
「それにしても、ティエラ。臣下からイリヤに似た子が街にいると聞いたときは、にわかには信じられませんでしたわ。でも何てこと、あなたは娘にそっくりですわ。ああでも少し気品が足りませんが、それはイリヤが高貴すぎるのですもの、仕方ありませんわね」
「恐れ入ります」
　ティラが淡々とした言葉を返す。どうせ気付かれないだろうと思って皮肉をこめてみたが、案の定ヴァシリーは気付かないようだった。とはいえ、ティラの興味は既に彼女になかった。伏し目がちに俯いたその視界の端に、ティラはイリヤの姿を捉えていた。
「あなたは兄君よりいくらかマシなようね。良かったわ。ティエラ、あなたならばわかってくださるわよね？　イリヤはもうすぐこの国の主となるべき身。その命運を双肩に背負う前に、せめてひとときでも普通の女の子として安息のときを過ごさせてやりたいのです。それにはあなたの協力が不可欠なのですわ」

「勝手な――」
「それで」
ヴァシリーの言葉の最後にリゼルの不機嫌な声が重なり、さらにそれをティラの声が掻き消した。３者の声が交錯した後、言葉を続ける権利を勝ち取ったのはティラだった。
「それで私はどうすれば良いのですか？」
ともすれば承諾を意する言葉に、ヴァシリーはソファに身を沈めなおすと満足げな笑みを浮かべた。
「簡単なことですわ。しばしの間、このヴァニス城で暮らしてくれれば良いの。その間、貴方の警護はフリートがします。危険なことは何もなくてよ」
「ちょっと待った」
今度こそリゼルが強い調子で言葉を挟み、ヴァシリーとティラの会話は中断された。だが今回に限っては、ティラも兄を止めることはできなかった。それほど、ティラ自身も動揺していたのだ。恐らく、兄が声を上げたのも同じ理由で。
「そいつがティラを守るだって？　じゃあ俺は」
「下賤の者を城に置くことはできませんわ。あなたは街ででも待っていなさいな。その間の宿泊費くらい出してあげてよ」
リゼルの冷え切った視線が真っ直ぐヴァシリーに向かい、だが彼女も怯むことなく真っ直ぐにリゼルを睨めつけてくる。蔑みの混じるその視線に、リゼルは呆れたように短く息を吐き出し、視線を外した。
「行こう、ティラ。やっぱり話にならない」
「兄さ――」
リゼルが立ち上がり、さきほどのようにこちらの腕を掴んで引っ張る。これは引きずってでも連れていかれると直感し、ティラはイリヤの方を見た。
「待ちなさい、ティエラ。引き受けてくれるならどんなお礼でもします。あなたが望むものを望むだけ保証しますわ。富も、この国で

の身分も」
――そんなことに興味はなかったが。耳を抜けていくヴァシリーの言葉より、ティラには気になったことがあった。だから、強くこちらの腕を引く兄に従うのをやめる。力尽くでは勝てないが、いざ抵抗を示せば、兄は力尽くで従えようなどとは思わない筈だ。案の定戸惑ったようにこちらを見た兄に小さく首を振って見せると、ティラはヴァシリーではなくイリヤに向かって言葉を発した。
「……一晩、考えさせて下さい」
驚いたようにイリヤが双眸を見開く。だが困ったようにその視線は母を向き、そしてヴァシリーは苦い顔をしたが、
「お母様、一晩くらい良いではありませんか。どうせこのわたくしとお母様の願いを、この者達が断れる筈はないんですから」
母の渋い顔にイリヤは一瞬で戸惑いを消すと、堂々と言い放った。そんな娘の様子に、ヴァシリーは渋い顔を戻すと笑顔に戻り、そうねと零す。
「では部屋を用意させましょう。それまでにあなたの兄君をよく躾けておくことね」
それからはしばらくヴァシリーの高笑いが響いて、リゼルも、さすがにティラも、そしてフリートまでも、しばらくげんなりしたのだった。

兄妹と亡国の姫君　6

「まさか、引き受けるつもりなの？　ティラ」
与えられた部屋に入るなり、兄がそんなことを聞いてくる。
その質問をひとまずは置いておいて、ティラは部屋の中を見回した。イリヤの部屋とそう大差はない、落ち着いた雰囲気のゲストルームは、手入れが行き届いていて小奇麗だ。ふかふかのベッドに腰掛けると睡魔に誘われ、そのまま倒れこみたい気分になったが、何か言いたげな兄に気付いてティラはその誘惑に逆らった。
「……兄さん、今日は変よ」
溜息と共に吐き出す。だがその後は続かなかった。言葉にしたことはずっと引っかかっていたことではあるけれど、何が変なのかはっきりとは答えられないからだ。違和感は確かにここにわだかまっているのに。
「ティラだって変だ」
隣のベッドに腰を下ろし、こちらと向かい合う形で、リゼルはそんな風に返してきた。驚きに、ティラが伏せていた目をリゼルに向ける。
「慎重派のティラが、他国の揉め事に首を突っ込みたがるなんてね」
苦笑して肩を竦めるリゼルにティラの胸がざわついた。それで、違和感の正体を知る。
正論なのだ。
フリートと無茶苦茶な乱闘を繰り広げたまではともかく、それから後のリゼルはやけに大人しかった。いつも滅茶苦茶な兄が、城についてからも比較的まともなことしか言っていない。
「兄さん、何か悪いものでも食べた？」
「？」
「ううん、いいものを食べたのかしら……この場合」
腕を組んで唸りだしたティラに、リゼルが怪訝な目を向ける。

「だって、兄さんが比較的まともなことしか言わないんだもの。あ、もしかして、フリートさんと戦ったときに頭でも打ったのかしら」
「ティラ……」
本気で考え込むティラの独り言を聞いて、リゼルがめそめそと涙を流す。それを横目で見て、ティラは安堵したようにふっと息をついた。いい年した男がめそめそ泣くのはどうかと思うが、その方がずっとリゼルらしい。
ティラは立ち上がると、兄の隣まで歩いていってその隣に腰を下ろした。涙のたまった大きな青い瞳がこちらを向く。晴れた空のような青は、いつも曇ることがない。その瞳に、ティラは問いかけた。
「兄さんは、正義の味方なんでしょう？」
ふいをつかれたように、リゼルは大きな目をさらに見開いた。それによって零れそうになった涙を手の甲で拭って、それからいつになく真面目な顔をする。
「そうだけど。あのお姫様に似てたのが俺ならいくらでも代わりをするよ。でもティラが利用されるのは嫌だ。それに、俺が側についてやれないんじゃ話にならないでしょ」
「……利用されてるのは私じゃないわよ」
床に視線を投げ、ティラが呟く。
だがリゼルはそれを否定した。
「ティラ“だけ”じゃないっていうだけだ。ティラだって関われば利用される」
「だったら」
リゼルのジャケットを掴み、ティラが強い調子でリゼルに詰め寄る。
「だったら、私とイリヤを守って、兄さん」
取りすがるティラを、リゼルは少し驚いたように見ていたが――その表情を少し固くして――兄の顔になって、リゼルは妹を見つめ返した。
「ティラは、命を狙われるっていうのがどーゆうことか解ってる？」

はっとしたようにティラはリゼルの服から手を離し、浮かした腰をおろしてまたリゼルの隣に居住まいを正した。床を睨んでしばらく逡巡して、それから小声で、だがはっきりとした言葉を落とす。
「哀しくて辛いことよ。だから助けてあげたいの」
「……そうだね」
ティラと同じように床に視線を落とし、リゼルも呟いた。そこには赦免の色が込められていて、ティラはほっとした。
本当は、面倒なことには関わりたくなかった筈だ。兄のせいで厄介続きと昼間嘆いたばかりなのに、今は自分から厄介ごとに首を突っ込もうとしている。おかしなことだと思う反面、そうしたい理由を挙げればきりがなかった。
「私、離れていても、兄さんは必ず守ってくれるって信じてる」
「無茶言うなよ」
「あら、正義の味方ってそういうものでしょ？」
悪戯っぽい目をした妹に、苦笑を隠して兄は元気に返事をした。そして必ず守ることを心に誓って、苦味のない笑顔を妹に向ける。
「じゃー、ティラが今日も一緒に寝てくれるなら、いいよ」
満面の笑みで抱きついてくる兄に、ティラは一瞬う、と呻いたが、どうせ嫌だと言って突き放したって昨日みたいに強引にベッドに侵入してくるのだろう。仕方ないわね、と精一杯妥協する振りをしながら、だがティラから零れる笑顔にも苦味はないのだった。

■　□　■

同刻、同ヴァニス城離れにて。
有事に備え、イリヤの部屋の前で控えていたフリートだが、内から主に呼ばれて顔を上げた。
入ります、と声を掛けて扉を押し開け、そしてその瞬間に、表情のないフリートの顔に明らかなる驚きが揺れた。
「イリヤ様……、」

「自分じゃ上手くできなくて。揃えて下さらないかしら？」
椅子に座ったままこちらを向くイリヤの長いフェアブロンドは、肩から下が無くなっていた。乱雑に切り落とされて、彼女の足元にただの金糸となって積もっている。驚くフリートとは対照的に、イリヤは他愛無い世間話でもするように話しかけてきた。
「……おれに頼むのは人選ミスではないでしょうか」
「あら、他に頼める人がいて？」
くす、と可笑しそうにイリヤが笑う。どこか自嘲的な笑みに、フリートは黙って頷いた。満足げにイリヤも頷き、手に持った小刀を置く。
「確かその辺に、鋏がありましたわ」
イリヤが指し示した場所から鋏を取ると、フリートはイリヤの後ろに立ち、すっかり短くなってしまった金髪を手に取った。
――刃物を持った者を背後に立たせるなど、確かに誰にでも任せられることではなかった。しかも、命を狙われていて、それが誰なのかもわかっていない状況だ。本当は誰にだってやらせたくないだろう。小さな肩が少し震えているように見えた。
「おれの事は、信用して下さるのですか」
「今更何を言っているの」
フリートが慎重に入れた鋏の先から、細かい毛が零れていく。ふわりと流れてきたそれを見て、イリヤは苦笑した。こんなに少しずつ切っていたのでは夜が明けてしまいそうだ。
「……では何故、おれを城に残すのですか」
「それを言ったのはお母様ですわ。でも、妥当だと思います。いきなり髪が短くなって、さらに貴方の姿まで城になかったら、さすがに誤魔化すのは難しいでしょうから」
しゃきん、と耳元で刃物の合わさる音がする。少し空寒いが、不思議に恐怖はない。
フリートがそれ以上追求しなかったのでイリヤも黙り込み、しばらく鋏の音だけが部屋に響いた。ふわふわと舞う雪のような金色に

無感慨に視線を当てながら、ふとイリヤが呟きを漏らす。
「……信用しているのとは、少し違うかもしれませんわ。ただ、貴方になら殺されても構わないと思うだけです」
髪と一緒に言葉が舞って落ちる。後ろ向きなのだか前向きなのだかわからない強がりに少し苦笑しながら、フリートはイリヤの後ろ髪を少しずつ丁寧に切りそろえていった。

兄妹と亡国の姫君　7

ノックの音に、ティラはまどろみから引き上げられた。兄を押しのけて起き上がり、眠い目をこすりながらカーテンを開けると、丁度空がしらみ始めたところだった。随分と気が早いものだと苦笑しながら寝巻き上にマントを羽織って扉を開ける。

「答えは決まりまして？」

その向こうに現れたイリヤは開口一番にそう言ったが、ティラは答える前に思わず吹き出してしまった。

けらけらと笑うティラを見て、イリヤは一瞬ぽかんとしたが、すぐに真っ赤になって叫んでくる。

「ほ、ほんとうに失礼な方ね！　何故笑うのです」

「何故って……。いいえ、失礼しました。でもあなたって本当に気が早いのね。私が断ったら無駄になるわよ、髪」

ティラが笑った理由が髪のことだと知って、イリヤはさらに赤くなった。だが今度は怒りの赤ではなく、羞恥のそれだろう。乗り出しかけた身を引いて、だがきっと睨んだ目つきはそのままに、イリヤが言葉を返してくる。

「貴方に断る権限なんてないですわ」

「誰にやってもらったのそれ？」

高飛車に告げる言葉は綺麗に流し、ティラがまだ笑いながら聞いてくる。いよいよ怒りと羞恥で声が出ないイリヤに、ティラはどうにか笑いをおさめた。これ以上は冗談で済まなくなりそうだ。

――それにしても。

イリヤの腰まであった髪は、ティラと同じ肩口まででバッサリ切られていた。だがそれに驚くより、綺麗に真っ直ぐ切りそろえられた毛先に笑いがこみあげてしまった。見事なオカッパだ。

「直してあげる。入って」

「余計なお世話――」

「怒鳴らないで、兄さんが起きちゃいます。きっと兄さんも笑いますよ、貴方の髪を見たら」
反射的に口を押さえたイリヤを見て、ティラは微笑んだ。それからベッドに視線を伸ばし、そこから規則正しい寝息が聞こえてくるのを確認する。まだ眠っている兄を起こさないようティラは静かに自分のポーチを探り、ソーイングセットから鋏を取り出した。
「座って下さい」
「……結構ですわ」
だが椅子にかけるよう促すと、イリヤは表情を変えた。少し青ざめた顔を怪訝に思って彼女の視線を追うと鋏に向いており、ああ、とティラも合点がいく。だがその上で、ティラはまたくすりと笑った。
「私が怖いですか？　今から私を命の危険に晒そうというのに？」
蒼白な顔色のまま、イリヤがこちらに視線を戻す。だがやはりその視線だけは、決して曇ることがなかった。迷いも怯みも、眼差しにだけはない。
「断る権限がないなら、貴方を刺して兄さんと逃げたほうがいいかもしれないわね。私も死にたくはないもの」
少し意地悪すぎるかしらとティラは危惧したが、やはりイリヤの表情は変わらなかった。毅然と胸を張って、ティラが勧めた椅子に腰を下ろす。
「はやくして下さいな。貴方は私の代わりになる。そして私に自由を与えるのです」
苦笑して、ティラはイリヤの髪を数束手に取り、縦に鋏を入れていった。手際よくそれを繰り返す。別段、髪を切る能力に長けているわけではないのだが、ティラは手先が器用だった。
もちろんさっきのはただの脅しだったので、髪を揃え終えるとティラはすぐに鋏をしまった。イリヤが大きく息をつき、早々に立ち上がろうとする。
「待って」

だがティラはそれを制すると、自分のリボンを解いた。そして、怪訝な顔をするイリヤにまた前を向かせると、その髪を掬ってリボンを結わえる。すると、いつも鏡で見慣れた人物がそこに現れた。

「貴方の覚悟、受け取ったわ」

■ □ ■

昨日と同じ面子――即ちリゼルとティラ、イリヤとフリート、そしてヴァシリー――が一同に会すると、何か問われる前にティラは進んで声を上げた。

「一晩猶予を下さりありがとうございます。昨日のお話、お引き受けします」

ティラの答えに、ヴァシリーは扇子で口元を隠し、くつくつと笑った。

「そう。良かったわ、貴方が賢い子で」

「だが条件がある」

割って入った声に、ヴァシリーは気分を害したように笑うのをやめた。イリヤとフリートも声の方を向き、その中で一番驚いた表情をしたティラもそちらを見た。

声を上げたのは、他でもない兄リゼルだった。

「ティラの警護をそいつがするというなら、そのお姫様の警護は俺だ」

イリヤとフリートを睨みつけながらリゼルがそう言い放ち、ヴァシリーは顔をひくつかせた。だがリゼルはヴァシリーのことなど歯牙にもかけず、フリートに視点を定めると尚も言い募る。

「ティラに何かあったら、お前のお姫様も無事ではないと思え」

納刀したままではあるが、刀をフリートに突きつけ、リゼルが啖呵を切る。ティラは溜息をつきながら、頭を抑えた。

兄さん、それじゃ正義の味方というよりまるっきり悪役よ。

心の声が聞こえたわけではないだろうが、リゼルはすぐに刀を引いた。どの道、刀を向けられても啖呵を切られてもフリートは微塵も動かなかったし表情も変わらなかったが。
「その代わり、お前がティラを守るなら、俺もお姫様には誰にも指一本触れさせない」
「戯言を。お前のような下賤の輩をイリヤの側におくわけには――」
「だったら力尽くでティラを連れてかえるだけだ」
リゼルが刀の束に手をかけ、重心を落とす。ひっ、と小さな悲鳴を上げてヴァシリーがのけぞった。その彼女の大袈裟すぎるリアクションに閉口して、リゼルが刀から手を離す。元々本当に抜くつもりなどない。
「……約束しよう」
フリートが応えると、リゼルは黙ってソファへと身を戻した。張り詰めた空気が元にもどる。ただ、ヴァシリーの笑顔だけが消えて忌々しそうにリゼルを睨んではいたが、これで話はまとまった。
「決まりですわね。ではティエラ。しっかりわたくしの代わりを務めてくださいましね」
口の利けないヴァシリーに変わってイリヤが場を仕切り、それから旅の少女と亡国の皇女は、その立場を秘密裏に交換したのだった。

兄妹と亡国の姫君　8

それからティラは、丁寧に髪を梳かれて上質なドレスを着せられ、イリヤの部屋に残された。
その間にあれこれ先のことを考えてみたりして、自分に強がってみせたりしても、部屋で一人になると途端に落ち着かなくなった。それは、体のどこかが欠けたような、胸に穴があいていてひゅうひゅうと風が吹き抜けていくような、どこか何かが足りない、そんな気持ちの悪い感覚だった。
何か足りないかなどは始めからわかっている。だけど、わかっていて選んだのだからふっきらなければいけなかった。
ベッドに投げ出していた身に活を入れてティラはそこから起き上がり、集中するように目を伏せて開ける。よし、と小さく気合を入れてから、ティラは真っ直ぐ部屋の扉に向かって歩き出すと、その扉を少し押し開けた。そして、そこに居るであろう青年の名前を呼ぶ。
「フリートさん」
果たしてそこに立っていた黒髪の青年は、呼びかけに応じて漆黒の瞳をこちらに向けてきた。
「少し話をしたいんですが、大丈夫でしょうか」
周囲に他に人気がないのを確認してから囁きかけると、フリートは一瞬怪訝な顔をしたがすぐに部屋へと入ってきた。それから相変わらずの無表情をこちらに向け、忠告するような鋭い声をこちらに向ける。
「用があるなら中から呼べば聞こえる。それから、俺のことは呼び捨てろ。この離れに無関係の者はそう来ないが、それくらいの用心はした方がいい」
確かにそれはもっともだ。ティラにも分かっているのだが、あのイリヤの高飛車な態度や口調を演じるのは、ティラにはどうにも抵

抗があった。
「わかりました、必要に迫られればそうします」
「普段から慣らしておいた方がいいのではないか？」
「そう長居するつもりはありませんから」
　続くフリートの忠言も、ティラは淡々と切り捨てた。その不穏な言葉に、無表情のままフリートがぴくりと片眉を上げる。
「約束をたがえる気か？」
「明確な約束などした覚えはないですが。それに、代わりを務める間、大人しくしているとも一言も言ってません」
　フリートから目を逸らさずに、こちらを射抜くような声に怯まずティラも同質の声を返していく。
「あなたはこの入れ代わりが、単なるイリヤ様の娯楽の為だと思っていますか？　違うでしょう？　だったら教えて下さい。この入れ代わりを指示したのは誰ですか？　王位を狙っている人はどんな人ですか？　イリヤ様は本当に命を狙われているのですか？」
　矢継ぎ早に問いかけると、次第にフリートの瞳から鋭さは消えていった。そしてここに至ってようやく互いに逸らすことのなかった視線を外し、フリートがふっと息を吐き出す。
「お前は見た目だけでなく、内側もイリヤ様と似ているのだな」
　再びこちらに戻ってきた視線は、さきほどとは別人のように柔らかく、慈しむような色さえあった。恐らくは、いつもイリヤに向けている顔なのだろうとなんとなくティラはそんなことを思った。それから、城の人間とは毛並みが違うこの青年とイリヤは一体どういう関係なのだろうという興味が沸く。だが今はそんな詮索をしている場合でないので黙っていると、黙り込んだティラにフリートは違うことを感じたようだった。
「お前にとっては心外かもしれないが……、イリヤ様を悪く思わないでくれ。あれでも精一杯強がっているだけなんだ」
「心外だなんて。それを言うなら、あなたこそ兄さんを悪く思わないで下さいね。兄さんは無茶苦茶な人ですが……」

言いかけて、ティラははたと言葉を止めた。
逆説で止めたはいいが、その先がなかなか浮かばない。
無茶苦茶な人なんですが、事実無茶苦茶なんです。女癖が悪くて困ります。女装癖がありますけど決して変態じゃないんです。シスコンも度が過ぎてます。
「ああっ、どれも駄目だわ！！」
突如頭を抱えてしゃがみこんだティラを、フリートは同情のような、憐れみのような、そんな様々な感情が入り混じった複雑な目で見下ろした。だがすぐにこほんと咳払いをすると、ぶつぶつと何事か呟き続けているティラに声をかけた。
「……確かにお前の兄は変だと思うが、別に無茶苦茶とは思わない。おれだって逆の立場だったら同じことをするだろう。昨日は強引に連れていこうとしたりして、済まなかった」
思わぬ謝罪に、はっとしてティラは顔を上げた。フリートの薄い表情がそれでも精一杯の済まなさをたたえていて、ふとティラは微笑んだ。
「そのことは、もういいわ。でももし悪いと思っているなら、本当のことを教えて下さい」
だが言葉の終わりには笑みを消して表情を引き締める。フリートもまたいつもの鉄面皮に戻り、淡々とした声を返してきた。
「本当のことをと言われても、おれに教えてやれることはない。おれはただのイリヤ様の護衛だ」
「なんでもいいんです。急がないと、もしこの入れ代わりを知っている者の中にイリヤ様を襲った人がいるなら、危険なのはイリヤ様の方に……」
「それは恐らくないだろう」
今一番懸念していることをティラが口に出すと、フリートはあっさりとそれを切って捨てた。
「今回の件を知っているのは、昨日の面々の他ではヴァシリー様の忠臣だけだ。ヴァシリー様に取り入ろうとしている者がイリヤ様を

狙ってもなんのメリットにもならない」
「でも、内通者がいたら……」
フリートの落ち着きに、ティラは若干の違和感を感じていた。イリヤは命を狙われていたのだ。不測の事態を懸念して主を案じるのが普通だろう。
「……フリートさん、あなたはやけに落ち着いているんですね」
疑念をそのまま口に乗せてみると、フリートはこちらに一瞥をくれ、それから無言のまま窓へと近づき、かけたままのカーテンを少し手で寄せた。
「そう見えないかもしれないが、おれは落ち着いてなどいない。こんなこと反対に決まっているし、心配もしているさ。だがイリヤ様が望んだことだから仕方が無い。今回の入れ替わりも、おれを置いていくことも」
「イリヤが……？」
意外に思ってティラが思わず問い直すと、フリートはこちらを振り向いて頷いた。
「それに、今までイリヤ様を襲った者達のいずれも、本気でイリヤ様を殺そうとしているようには見えなかった。杜撰な侵入をするが引き上げが早く尻尾はつかめない。町でも殺気を放つにとどめている。恐らくはただの脅しだ」
ティラもまた、窓の外に歩み寄るとフリートの横に立ち、カーテンを上げて窓越しに町を見下ろした。ここからイリヤと兄を見つけられるわけもないのだが、我知らずティラは通りを目で追っていた。
（イリヤは、何を考えているんだろう）
そんなことを考えていると、ふと視線を感じて隣を向く。その正体など、この部屋にはひとりしかいない。
「……何？」
「何故引き受けた？　最初は気乗りしないように見えた」
突然の問いかけに、ティラはぱちぱちと瞬きを繰り返した。それからふっと苦笑する。

「しないわ、今も。でも、似ていたから」
「？」
わからない、という表情のフリートを見上げ、苦笑したままティラは答えた。
「無理して笑顔を作った鏡の向こうの私と、似ていたからです」
すぐには解らなかったのだろう。フリートの薄い表情の向こうに感情が揺れるまでは時間がかかったが、そのあとでフリートは微かに笑った。だが、それに驚く暇もなく、その笑顔は一瞬にしうせる失せる。
「――危ない！」
何が危ないのか、理解する前に物凄い力で引き寄せられる。結局、何が起きたのかさえ理解できないまま、ティラは目の前の窓硝子が粉々に飛び散るのを呆然と見ているしかなかった。

兄妹と亡国の姫君　9

空は青い。そして高い。町の喧騒は心地よく、自由を体中が喜んでいる。偶にフリートに外に連れ出してもらうことはあったが、ごく短い時間で、城からそう離れることもなかった。外套で顔を隠して、まるで檻から出た罪人のように人目を忍び、そしてまた檻へと帰っていくだけ。だが今は縛るものは何も無い。

――だがひとつ、不満があるとすれば。

「いい加減にして下さいません？　さっきから大の男が、めそめそめそめそ」

ついに我慢も限度を越えて、イリヤはリゼルに向き直ると、両手を腰に当てて怒号を飛ばした。だが大して効果はなく、リゼルはなおもめそめそし続けている。

「だってぇぇぇ……ティラがいないんだもんんん」

情けなくぐしぐしと泣き続けるリゼルを見て、イリヤは呆れましたわ、と溜息をついた。

「あなたって良いのは見てくれだけね」

「よく言われるうううぅ」

返って来た返事に、さらにあきれ返る。その唯一の取り柄であろう美しい外見も、こう情けなくめそめそしていては台無しだ。

「ああ……心配だ。しかも俺以外の男が側にいるなんて。あのムッツリ、ティラに手出したりしてないだろうな」

「フリートはそんなことしませんわ！　破廉恥なことを言わないでくださる？」

めそめそしていたかと思えば、今度は一転変な汗を流しながら、至って真剣な顔と声で心外なことを言う。

これにはさすがにイリヤもむっとしたが、だが元はといえば、自分達の我儘にこの兄妹は付き合わされることになったのだ。こちらを良く思っていなくて当然だろう。それはイリヤも認めなければい

けない事実だった。
「あなたは、さぞ私を恨んでいることでしょうね」
だから、そんなことを口にする。さてどんな嫌味か皮肉が返ってくるだろうと身構えたイリヤだったが、意外にもリゼルはこちらを見て目をぱちくりとし、そして済まなそうにしゅんとした。
「いや。俺の方が、酷いことを言って悪かったよ。ティラを連れていかれそうになって頭に血が上ってた」
え、とイリヤが驚きの声を漏らす。目を丸くしてこちらを見上げるイリヤに、リゼルは苦笑した。冷静になって思い起こしてみれば、この少女に会ってからというもの、自分は嫌な面しか見せていなかった。刀を振り回して怒号を飛ばし、嫌味を言って傷つけ、助けを求めているのに見捨てようとした。どれひとつとして、正義の味方としてあるまじきことだし、どれひとつとして自分らしくない。そんな嫌な面しか見せていないこの少女に、自分は正義の味方だからなどといっても信じてもらえるわけがないだろう。
そして同様に、リゼルもイリヤの高慢で高飛車な面しか見ていないが、それがこの少女の全てかどうかなどわからない。――恐らくは、違うのだろう。だからティラは助けたいと言ったのだろう。
「ごめんね。命を狙われるっていうのは辛いし怖いでしょ。何かを恨みたくもなるし、逃げたくもなる。けどあのムッツリ男とも約束したし、ちゃんと守ってあげるから。意外と腕には自身あるんだよ、唯一の取り柄だって人からも言われるし！」
どちらかといえば、それはけなされているんだろうと思ったが、誇らしげに胸を張るリゼルに思わずイリヤは吹き出してしまった。何故そこで笑うのかがわからないリゼルは暫く不満そうに口を尖らせていたが、イリヤの笑顔が少女らしい素直なそれだったので、リゼルからも自然に笑みがこぼれる。ひとしきりリゼルとイリヤは笑い合っていたのだが、ややあってイリヤはその笑みをおさめるとふと罰が悪そうな表情をした。
「あなたってずるい人ね。わたくしを恨んでいると責めて下されば、

わたくしもあなたに恨み言のひとつも言って、ティエラを見捨てて逃げようという気にもなれたかもしれないのに」
地面に向かってそんなことを吐き捨てる。その地面から、鎖が生えてきて自分を縛り付ける錯覚を見そうになった。結局、檻は城ではなくてこの国で、自由などありはしないのだと本当は解っている。
「……もしそうやって、君がティラを見捨てたなら、俺も君を見捨ててティラを引きずって帰れた。お互い様だってことで」
肩を竦めるリゼルを見て、イリヤは苦笑した。
結局互いにそれを選べなかったから、ここにいる。だったら、この先にすることもひとつだ。
「わたくしは城に戻ります。ティラがわたくしの身代わりを務めている間に、わたくしは城で何が起きているのか、真実はどうなのか、お母様の口からではなく自分の目で知りたいのです」
「だから、ティラに身代わりを頼んだのか」
「ええ。フリートには必ずティエラを守るよう言ってあります。だけど、危険なことにあなたの大事な妹君を巻き込んでしまって、本当に申し訳ありませんでした」
頭を下げるイリヤに、今までの高慢な態度はどこにもない。あれは、きっとあの城で、あの母の元で、皇女たろうとして作り上げた虚像のイリヤなのだろう。そんなイリヤの気持ちが、リゼルには痛いほどわかった。解るから、屈んでそっとその肩に手を置く。
「もういいよ。だったら俺も協力する。この国が良い方へ向かって進めるといいな」
優しく声をかけられ、イリヤは俯いたまま目の端を手でこすった。そして、勝気な笑顔に戻ってリゼルの方を向く。するとリゼルも立ち上がった。
「けど、どうやって城に潜りこむつもりだ？」
「そうですわね。とりあえず……」
言いながら、イリヤが町の方へ目を向ける。通りの向こうで、仕立て屋の看板が風にきぃきぃと揺れていた。

兄妹と亡国の姫君　１０

かくして、城へと舞い戻ったイリヤとリゼルであったが。
「わ、わたくし町娘に見えまして？」
城から出たときは、華美でこそないものの、一目で高価とわかる上質そうな服を着ていたイリヤが、今は町で購入した安物のワンピースをまとっている。ヴァシリーが見たら憤慨しそうな、その辺の町娘がしているような格好だ。ちなみに着ていた服は邪魔なので売り払ってしまった。
だがその辺の町娘がどうであるかなど良く知らない、温室育ちのイリヤにはどうにも不安が付きまとう。
「とりあえず、そのお嬢様言葉としずしず歩くのをやめたら、普通の女の子に見えると思うよ」
「は、はい……う、うん。こんな感じでいいのでしょう……、いい、かな……？」
たどたどしい口調は危なっかしいが、戸惑った表情は年相応に見える。まあ及第点だろうと、リゼルはＯＫサインを作って見せた。
ひとまず安堵したイリヤは、自分のことが落ち着くと今度は違う不安が一気に押し寄せてきた。
改めて見上げたリゼルも、さっきまでとは違う格好をしている。さっきまでの、女物のピンクのジャケットもどうかと思うのだが、今はさらに眉をひそめるような、ひらひらしたきらびやかな女性の服を着ている。
「ところで、あなたのその格好はなんなんですの？　……いえ、なんなの？」
口をへの字に引き結び、イリヤは着飾ったリゼルをまじまじと半眼で見つめた。　確かに、とてもよく似合っている。リボンをといて、背中に流れる銀髪は輝いているし、青い双眸は宝石のよう。そこかしこに身に着けているアクセサリーもセンスがよくて、けして

過度ではなく、リゼルの美しさを引き立てている。だがだからこそ、リゼル自身がさらに目立っているという結果を導き出している。城に戻るまでにすれ違った人がみな、リゼルを振り返っていた。
目立ちたくないというのに、この格好は何なのだろうと思う。確かに、イリヤ自身はリゼルの美しさにすっかり隠れてしまってちっとも目立ちはしないのだが。
「まあ任せときなって。お姫様を一人で危険な場所に放り込んだら、ムッツリ君に怒られるでしょ？」
「フリートですわ。変な呼び方をしないでください……しないで」
「男の名前なんて覚える気はない！」
断言したリゼルに溜息をつく。ティエラはよくこんな変な男と一緒にいられるものだとある意味尊敬の念すら覚えるが、今はそんな場合ではない。それにもう城は目と鼻の先だ。たしなめてもリゼルには聞く気はないようだし、大きな不安を抱えたままイリヤは門まで歩いていくと、その門を護る衛兵に声をかけた。
「あの……わたく、わたし、メイドに雇って欲しくて……きたのですけれども」
「んー？」
たどたどしいイリヤの言葉に、衛兵が怪訝そうに兜を上げてまじまじとイリヤを見た。不審に思われているとわかっても、イリヤには慌てて俯くしかできない。
「名前は」
問われ、イリヤが言葉に詰まる。まさか本名を名乗るわけにもいかない。いくら離れで静かに暮らしているとて、その名を知らないものなど城にはいないだろう。困っていると、俯いた頭の上でリゼルの明るい声が響いた。
「ティエラ。そして私は姉のリゼラと申します」
しゃあしゃあと、よどみなく聞こえてきた全くの偽りに、イリヤは吹き出しそうになった。思わず顔をあげて、それからはっとしてまた顔を背けようとしたが、もう衛兵は自分を見ていない。その他

の兵士も同じく、周囲の者の視線は根こそぎリゼルが攫っていた。
「……お前も、メイドに？」
その美しさに息を呑みながら、衛兵がおずおずと問いかける。リゼルのその姿も態度も、およそメイドとはかけ離れているからだろう、目を奪われながらも衛兵の声には訝しそうな色があった。
「いえ、私は旅の吟遊詩人をしています。どうか私を歌姫として召抱えていただけませんか？　妹はメイドとして働かせてくださいな」
どうしてそう、次から次へと嘘八百を並べられるものなのか。しかも、それが最初から真実であるように、リゼルの顔も声も嘘を言っているようには見えない。イリヤさえも、本当にリゼルは旅の吟遊詩人だったのかと信じてしまうほど。
「それにしても、似てない兄妹だな」
「よく言われますー」
だがそんなやりとりがあってイリヤはむっとした。美しい者と見比べられて似ていないといわれるのは、こちらが地味だと言っているようなものである。しかし思い起こしてみれば、自分もティラに同じことを言った手前文句は言えない。
それはおいておくとしても、事実リゼルとティラは似ていない兄妹だ。そんな似てない兄妹が実在しているというのに、この衛兵は疑っているようである。事実は事実と言い張ればいいだけなのだが、リゼルとイリヤは兄妹ではない。それをどう切り抜けるのか、イリヤはリゼルの次の行動に期待した。だが、それは全くもって予想できないことだった。
「♪Ｉ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｇｅｔ　ａ　ｍａｔｔｅｒ　ｏｆ　ｃｅｒｔａｉｎ　Ｆｏｒ……」
二、三度咳払いをした後、急にリゼルは歌い始めたのだ。
透き通った綺麗な声で。誰もを惹きつけて止まない声で。少し物悲しい、古い言葉で綴られた歌を。

驚くより前に、イリヤもその声に惹き付けられてしまう。

「I do not want to get a matter of certain
For "is" or "is not" I define
I hope, and hold out my hand
to one slender woman
To thy lip, to thy grren eyes.
・・・・～♪」

時が止まったかという錯覚を覚える。それは歌が終わったあとも続いて、我に返るのにはたっぷり数分を要した。
それは周りの衛兵達も同じだったようで、夢見心地の兵を、不敵な笑顔のリゼルが面白そうに眺めている。

――本当にこの人は、わけがわからない人ね。

心の声を聞いたように、リゼルがこちらを見下ろして小さく笑った。だがすぐに衛兵達に向き直り。
「私と妹を雇ってくれる？」
問われてやっと、放心していた衛兵達も我に返る。
「あ、ああ……、いや。そうだな……、シルヴァス様にお窺いしてみよう。暫くここで待て」
「シルヴァス様？」
「今この国には王がいないのだ。補佐だったシルヴァス様が王の代理をしている」
なるほど、とリゼルは表向きの表情は変えないまま、胸の中だけで納得した。恐らくそのシルヴァスという者が、イリヤの言う王位を狙っている者なのだろう。視線だけでイリヤに問いかけてみると、解ってくれたらしくイリヤが小さく頷く。

そうして城の中へと姿を消した衛兵は、数分と経たずに戻ってきた。
「入れ。シルヴァス様がお会いになるそうだ」
衛兵の言葉に、リゼルがぱっと顔を輝かせる。そのシルヴァスという者が本当にイリヤの命を狙っているのか、人柄や考えを知るには願っても無いチャンスだ。イリヤを襲った黒幕を突き止めれば、ティラを危険に晒すこともなくなる。斜め下でイリヤの緊張を感じながら、リゼルははやる気持ちを抑えていた。

兄妹と亡国の姫君　１１

ティラが固く閉じた目を開けると、すぐ側にフリートの険しい横顔があった。さっきまで窓の側に並んで立っていたのに、気が付くとフリートに抱え上げられ、窓からは少し離れたところにいた。恐らくは、窓からの侵入者と降りかかってきた硝子の破片から、フリートが守ってくれたのだろう。ティラには傷ひとつなかったが、フリートの頬には赤い線が走っていた。そして、彼が鋭い視線を向ける先には、黒装束を纏った者が三人、刃を抱えている。

「離すなよ」

囁くや否や、フリートが動く。それと同時に、黒装束も動いていた。慌ててティラがフリートの太い首に抱きつく。

ひゅっと空を裂く風が首元に触れ、その正体を想像してティラは震えた。ティラはフリートのように戦いなれていないし、リゼルのように強いわけでもない。こういった事態に縁もないから、悲鳴を上げて逃げ出したかった。だがその衝動のままそうするほど愚かでもなかった。

恐らくそうすれば、待っているのは死だ。そう直感させる黒々とした空気がそこにあった。これにもまた縁がなかったが、恐らくこれが殺気というものなのだろう。

悲鳴を殺し、ただフリートにしがみつく。そしてフリートは、そのティラをしっかりと抱えながら、落ち着いた身のこなしで双方から襲い来る刃を紙一重で避けて行った。そうしながら、少しずつ窓の方へ近づいていく。やがて完全に侵入者と立ち位置が入れ替わると、フリートは迷わず窓から飛び出した。

「ちょっとっ……！」

さすがにティラの喉から悲鳴が漏れる。イリヤの部屋に来るまで、階段を5回は上った記憶がある。その記憶に違わぬ高さが唐突に眼前に広がり、ティラは再び固く目を閉じた。胃が浮いて悲鳴を閉ざ

し、どんなにきつくフリートの体を掴んでも、落下する感覚は容赦なく体を襲い、だが一瞬後には強い衝撃とともにそれらのものは全て消え去った。
「もう大丈夫だ」
低い声に、ようやくティラは全身の力を抜くと、目を開けた。裸足のままの足の裏に土の感触を感じ、木陰の隙間から太陽の光が差し込んでくる。ぼんやりとそれを見て、それから慌ててきつくフリートにしがみついていた手を離す。そしてティラは思わず周囲をきょろきょろと見回した。
「大丈夫だと言ったろう。ここは城の中庭だし、声を上げれば他の衛兵が気付く。恐らくここまでは追わない」
「あ、いえ。そっちじゃなくて、ある意味そっちよりタチが悪いのが来たらどうしようと思って」
「？」
「なんでもないです。気にしないで下さい」
しばらく待っても、激怒した兄が「他の男にくっつくな！」と叫びながら地響きを立てて駆け寄ってくる気配はなかったので、ティラはひとまず安堵するとフリートに向き直った。
「庇ってくれてありがとうございます。……血が」
「お前の兄と約束しているからな」
淡々と言いながら、フリートが頬の血を拭おうと無造作に手を持ち上げる。だがティラはそれを止め、傷に自分の手を翳した。
『“貴き神の御使いよ。我が手に寄りて癒しの光となれ。起死回生（リザレクション）”』
淡い光がティラの手から零れ、フリートの傷を癒す。ティラの手が離れてフリートが血を手の甲でこすると、そこにもう傷はなかった。
「……お前、魔法が使えるのか？」

「少しだけです。古代では死人に近い者まで蘇らせたという癒しの魔法を用いても、小さな傷を治すだけで精一杯ですけどね」
「だが、魔法を使う者などおれは初めて見た」
「普段は使いません。でも私のせいでできた傷だから……それより」
柔らかい笑顔を浮かべ、そしてティラはすぐにそれを消した。それに合わせて、フリートも表情を固くする。
「これが、ただの脅しですか？　彼らは本当に殺す気に感じたのですが」
「ああ。今までとは違う。明らかに本気だった。牽制でもなんでもない」
はっきりとフリートが肯定して、改めてティラは戦慄した。ひとつ間違えば命を落としていたかもしれない。その事実が心を空寒くさせる。そして、大変なことを引き受けてしまったのだと、解っていた筈なのに今更のように痛感した。あれほどまでにリゼルが止めた理由も今なら解る気がした。
「……ヴァシリー様の気が変わらないのに業を煮やして、脅しから暗殺に切り替えたか、それとも……」
フリートの黒い瞳が、じっと真っ直ぐにティラを射抜く。見つめてくる瞳の奥は、きっと同じことを考えているのだろうとなんとなくティラには解った。
もちろん、フリートが今しがた言ったことも十分にありえる。だが、今このタイミングで。
イリヤとティラが入れ替わった、このタイミングで。
これはただの偶然なのだろうか。
「……それとも、私とイリヤが入れ替わったのを知って襲ったのなら。どうしてイリヤではなく私を狙ったの？」
フリートは答えない。というよりは、答えられないのだろう。同じ疑問を、今フリートも考えていたに違いなかった。
答えを欲するなら、それは自分で探すしかなさそうで――ティラは両手をぎゅっと握り締めた。

その夜ティラは湯を浴びて豪勢な夕食を食べ、寝巻きに着替えてベッドに入ってから百秒数えて起き上がった。
シルクのネグリジェの上にガウンを引っ掛け、ブーツに足を突っ込んでそっと部屋の扉を開ける。
「何をする気だ？」
影のようにそこに控えていたフリートが、険しい顔をこちらに向ける。
「先刻狙われたばかりなんだぞ」
「だからこそ、黙って襲われるのを待っているのも癪でしょう」
そう言い放ち、スタスタと歩き出したティラを見て、フリートは溜息をついた。
「滅茶苦茶なのは、お前の兄ではなくお前の方だな」
「だったらついてこなくて結構です」
「約束がある」
心外なことを言われたので思わずティラは突っぱねたが、フリートは一言で、さらにそれを突っぱねた。その一言に、ティラが苦笑する。実際、それでフリートに「では一人で行け」と言われてしまえば途方に暮れるしかない。またさっきのように襲われればひとたまりもないし、目的の場所へたどう行けばいいのかもわからない。フリートだってそれは解っているはずだ。なのにわざわざ、律儀に約束を持ち出して守ってくれようとしている。
「……ありがとう。正直怖いし、どこに誰がいるのかもわからなかったの」
足を止め、フリートを見上げて素直に礼を述べると、フリートは少し苦笑して見せた。表情のない男だと思っていたが、こうして少しの間でも一緒に居てみると、意外とそうでもないのだと気付く。
「約束もあるし、お前は何か、放っておけない」
そんなことを言われ、ティラは赤面した。だがいきなりひょいと

抱え上げられ、足が宙を泳いで少し慌てる。
「あの……」
「二人でぞろぞろ歩いたら目立つ。それにお前は足音も消せない。……どこに行きたい」
問いかける前に正論を返され、ティラは後の言葉を飲み込んだ。とりあえず、兄のアンテナが不穏な空気を感知しないことを祈ってみながらフリートにつかまり、そしてティラは小さく、だがはっきりと告げた。
「ヴァシリー様のところ」
フリートに特にリアクションはなかったところを見ると、予想はしていたのだろう。一瞥だけで返事をくれて、それからフリートは影のように動き出した。

兄妹と亡国の姫君　１２

「うう、何か凄く不愉快だ」
苦虫を百匹くらい噛み潰したような果てしなく嫌な顔で呻いたリゼルを見て、イリヤもまた不快そうに眉を潜めた。
「それがレディと一緒にいるときに言う言葉でして？　あなた方兄妹はどこまで失礼なのかしら」
「あ、ごめん。違うんだ。俺のアンテナがなんかとても不快なものを受信しただけ」
「何を言っているのかわかりませんわ」
アホ毛を撫で付けているリゼルを横目で見ながら、イリヤは小さく溜息をついた。
衛兵に「ここで待て」と通された部屋で、さていったいどれくらい待ったのだろうという時間が過ぎても、シルヴァスは現れなかった。最初は緊張していたイリヤも、今は飽きてしまって欠伸をかみ殺している。
リゼルは撫で付けても撫で付けても跳ね上がるアホ毛から諦めたように手を離し、その手をテーブルの上で組み合わせて顎を乗せた。
「……にしても。シルヴァスって、最近どこかで聞いたような気がする名前だなー」
「今更ですの？　フリートの姓ですわ」
リゼルの呟きに、呆れと欠伸の両方が混在した、複雑な声をイリヤが返す。ああ、とリゼルは返事をして頭を上げた。だがすっきりしたのは一時だけで、一瞬後には違う疑問が頭を過ぎっていく。
「……それって、どういうこと？」
「クレイヴ・シルヴァスは元グランヴァニスの貴族で、古くからのお父様の親友ですわ。そして、フリートは孤児で流れの剣闘士でした。その腕を買ったお父様がフリートを引き取り、クレイヴが養子にしたんですの。それから、わたくしとフリートは兄妹のように共

に育ちました」
　イリヤの言葉を元に、リゼルは頭の中で人物の相関図を作って行った。そこに今までの情報も加えて、最初から考え直してみる。
　まず、最もリゼルが気になっていたことは、町であれほどの殺気を感じていたのに、終ぞ襲われることはなかったということだ。フリートと大乱闘をしていたときなどこれ以上ない好機だっただろうに、それでもイリヤは無事だった。その為、もしかしたらただの脅しかもしれないと思っていたのだが、フリートがシルヴァスの養子だというのなら、息子の身を案じたのだろうか。
（いや、それより）
　そこまで考えて、リゼルは考えを打ち切り頭を横に振った。
　もし本当にシルヴァスがイリヤの命を狙っているのだとすれば、もっとおかしなことがある。
「それじゃあ、フリートが一番危ないじゃないか。もしシルヴァスが君の命を狙っているなら、フリートを使うのが一番手っ取り早いでしょ？」
「そうですわね」
　あっさりとイリヤは肯定した。そのリアクションを見る限り、イリヤも同じことを考えたことがあるのだろう。
「その危険を承知で、君はフリートを側に置いていたの？」
　これにもあっさりイリヤは頷いた。そして、腑に落ちないといった表情のリゼルを見て、ふっと笑ってみせる。
「そうね、では例えば、あなたがいなくなればいいとティエラが願ったとしたら……あなたはどうしますか？」
　まっすぐに目を覗き込まれてそんなことを問われる。最初何を言われているのかわからなかったが、理解してしまえば複雑な顔をせざるを得なかった。
「……多分側を離れたりはしないな。殺されてもそれでいい」
「でしたら、あなたもわたくしと同じですわね」
「そうか。そうだな」

「あなたみたいな妙な男と同じなのは、不本意ですけれど」
そっぽを向いて、照れたように付け足すイリヤを見てリゼルが「ちがいない」と笑う。ますます変な人だと思いながら、でも、とイリヤは逆説をつけた。
「でも、あなた意外と取り柄は沢山あるようね？　見事でしたわ、歌。なんという歌ですの？」
「知らない」
笑顔で即答され、イリヤはソファから落ちそうになった。
「し、知らないんですの？　わたくし、本当にあなたは吟遊詩人なのかと思ったのに」
「そんなわけないじゃーん。あんなにうまくいくとは思わなかったから自分でも結構びっくりしたくらいだしー」
空いた口が塞がらない。
綿密な計画の上かと思えば、出たとこ勝負だったらしい。この男には呆れることばかりだが、今度という今度は、本当に呆れた。言葉を無くして口をぱくぱくしていると、さすがに罰が悪くなったのかリゼルは済まなそうに頬を掻いた。
「あの歌はねー。母上がよく歌ってただけで、なんて歌なのかどういう意味なのか俺もよくわかんないんだ」
呟いた独り言に、またイリヤの表情が変わる。今度は、どこか羨望のようなものが混じった表情だった。
「お母様も、さぞ歌がお上手なのでしょうね」
「いや……」
「わたくしの母を、軽蔑したでしょう？　でもね、前は違ったの。もっと優しくて、温かくて、わたくしが眠るまでずっと歌を歌ってくれた」
イリヤは、きっと母という言葉に反応したのだろう。寂しそうな、哀しそうな横顔に、ヴァシリーの姿を思い出す。
自分と娘以外の全てを蔑んだような目。確かにそれは見ていて気持ちの良いものではなかったが。

「きっと、イリヤのことを守ろうと精一杯なんじゃないかなー。俺の母上なんて、別に歌上手くなかったしあんまし優しくなかったし怖かったし怖かったし怖かったし」

「なんですの、それ」

茶化してみせると、イリヤは笑った。その笑顔に安心しながら、だが思考は全く違う所に行ってしまう。

もし、イリヤの命を狙っているのがシルヴァスでないのなら。息子を案じて脅しで終わったのではないのなら。

――娘を案じて、脅しで終わったとするなら？　その罪をシルヴァスに着せて失脚を狙ったとしたなら――

「I do not want to get a matter of certain For "is" or "is not" I define I hope, and hold out my hand to one slender woman To thy lip, to thy green eyes.」

それを言葉にするのはやめて、代わりに歌を口ずさむ。

お世辞にも歌が上手いとは言えなかった母が口ずさんでいたその歌は、実のところ正確な音程がわからなかったりもするのだが。

歌詞にしたって、どこの国の言葉でどういう意味なのかも解らない。それでもリゼルはこの歌が好きだった。悲しいときには口ずさんだ。悲しい旋律だから余計悲しくなるのだけど、そうしてひとしきり泣けば元気になれた。

だから、イリヤも少しでも元気になればいい。

心を込めて歌い上げると、拍手は意外なところで起きた。

「――いや。済まない。思わず聴き入ってしまったものでな。待たせて申し訳なかった、私がシルヴァスだ」

いつの間にか開いていた扉の向こうで、黒髪黒目の４０代半ばの男性が、惜しみなく何度も手を叩いている。

聴き入っていたイリヤが我に返って俯く。そこにある緊張を感じ

取って、リゼルも表情を引き締めた。

兄妹と亡国の姫君　１３

咄嗟に動けだせないイリヤに変わり、リゼルは立ち上がると、スカートをつまんで会釈した。
「初めまして。あなたがこの国の王様ですか？」
無垢な笑顔を装いつつ、さりげなく切り込んでみる。だがシルヴァスは実にあっさりと首を横に振った。
「いや、今この国に王と呼べる者はいない。急なる指導者の不在に、今この国は疲弊している。君の歌はそんな者達の癒しになるだろう。どうか、この国に留まり歌って欲しい。大した恩賞を与えることはできぬが、君がこの城に暮らすことを拒む者はいないだろう」
そうして、この国の者の為に歌って欲しいと言うシルヴァスに、演技めいたものは見当たらなかった――少なくともリゼルには、シルヴァスが真剣に国を案じているように見えた。顔つきは精悍だが、黒髪には白いものが混じり、目の下には濃い隈がある。隠しようも無い疲労が全身から見て取れた。その姿は、着飾り高笑いをするヴァシリーとは対照的だ。
「……そうでしょうか。しかし私は下賤の身。城の高貴なる方は反対なさるのでは？」
ヴァシリーを思い出し、そんな風に問いかけてみる。誰にそんなことを言われたのだとでも言いたげに、当初シルヴァスは不思議そうに首を捻っていたが、やがてああ、と思い当たったように身を屈めた。
「もしかして妃殿下に……ヴァシリー様にお会いになられたか？」
シルヴァスが屈んだので、見上げていた視線を真っ直ぐに戻す。リゼルが取った行動はそれだけだったが、シルヴァスが欲していたのはもとより肯定でも否定でもないようだった。
「しかし、ヴァシリー様も君の歌を聴けば少しはお心が安らぐことだろう」

「どういうことですか？」
「あの方は、動転しておられるのだ」
再び顔を上げ、姿勢を正してシルヴァスは部屋の中央へ向けて歩き出した。その背を振り返ると、長身なのにも関わらず酷く小さく感じた。
「いや……皆が動転している。ようやく新たなる一歩を踏み出そうとしたそのときに、指導者が手を引かなくてどうするのだ」
独白のような呟きを耳にして、リゼルはそっとイリヤの表情を盗み見た。だが、彼女は俯きながら、食い入るようにシルヴァスを見つめるばかりで真意はよくわからない。彼女もまた、見極めようとしているのだろう。自分のその目で。
「あなたが指導者にはならないのですか？」
「私では器が足りぬだろうよ。しかし、私がやらねばどうしようもあるまい。彼の遺したものを失う訳にはいかないのだ。そう日々自分を奮い立たせねばやっていられない」
「子は」
ふいに上がった声は、シルヴァスのものでもリゼルのものでもなかった。ふとすれば空耳かと思うほどにか弱く小さな声が、シルヴァスの語尾に被さる。そこで初めて、シルヴァスの視線がイリヤに向いた。その視線にびくびくしながらも、俯いたままイリヤは震える小さな声を紡ぐ。
「子はおられなかったのですか、その指導者に」
シルヴァスがまじまじとイリヤを見つめ、イリヤが慌ててリゼルの陰に隠れる。怯えたような態度に、失礼、とシルヴァスはイリヤから視線を外して咳払いし、再びリゼルに向き直った。
「……その方もまた、王の遺したものだ。君の妹と変わらぬ、年端のいかぬ少女だ。どうしてその小さな肩に、この国の命運などを乗せられようか。私は彼女が潰れるのを見たくなどないし、心無いものに利用させる訳にもいかない。彼女を護るためにも私でなくば駄目なのだ」

びくりと背中でイリヤが震えた。それを確かに感じて振り返る。イリヤはまだ俯いたままで表情はわからなかったが、ぎゅうとこちらの服の端を握り締め、千切れるのではないかというほど力を込めているのが震える拳から伺えた。

「――嘘」

そして、震える声が唇から床に滑り落ちる。リゼルが止める前に、イリヤの感情は堰を切ってしまったようだった。

「嘘よ！　あなたはお父様が作ったこの国と民の心が欲しくなっただけですわ！　そうしてわたくしからこの国を奪おうとしているのよ」

ふう、とリゼルが溜息をつく。演じる必要がなくなったと知り、貼り付けていた笑顔を解いて、背に匿っているイリヤをシルヴァスの前に出した。

その言葉と声から連想できる人物は、シルヴァスにとってひとりしかいないだろう。だがそれでも咄嗟には理解できていないようだった。無理も無いことで、その人物はこんなところに、町娘と変わらぬいでたちでいるはずがないのだ。

「まさか……イリヤ様？　どうしてこのようなところに……その御髪はどうされたのです」

「そうでしょう、あなたの計略なのでしょう。お母様がそう言っていた！　あなたがわたくしから全てを奪うのだと！」

驚きを隠せない様子で近寄ってくるシルヴァスを、避けるようにイリヤは飛びのいた。そして逃げるようにじりじりと後退する。それを見たシルヴァスは、沈鬱な表情でイリヤに近寄るのを止めた。

「私が、あなたから何を奪える筈がありましょうか」

「お願い、クレイヴ……嘘だと言って。あなたが、あなたまでもがわたくしの為にと言うならば、わたくしは一体何を信じれば良いの！？」

こめかみに両の手をあて、イリヤははげしくかぶりを振った。問いかけておきながら、およそ人の話を聞こうという態度ではないイ

リヤに、リゼルが制するように手を伸ばす。だがシルヴァスがその手を掴んで止めた。
「ご自分をお信じ下さい、イリヤ様。何が真実かは、自分で判断するほかはないのです。だからどうかお逃げにならぬよう。あなたがご自分で考えて、王になるというのなら私は止めません。しかし、現実はよくご理解下さい。王など決して華々しいものではありません」
イリヤの両手が、こめかみから耳にうつる。なおも彼女はかぶりを振ったが、シルヴァスの朗々とした声が届いていない筈はなかった。
「よくお考え下さい。そして自分が出した結論を信じるのです」
ゆるゆると。首を振る力は弱まっていき、耳を押さえていた手は今度は顔を塞いだ。指の間から透明な雫がおちて床にはじけるのを見て、リゼルがふう、と大袈裟に息をつく。
「現実を見据えて虚像を看破し、信念を持って貫くには少し辛い歳じゃないかな。それよりはまだお母さんに甘えたいと思うよ？」
はっとしてシルヴァスがリゼルを見る。だがそのシルヴァスの表情を見る前に、パン、という音と衝撃がリゼルを襲っていた。
「わたくしは、そんなに子供ではありませんわ！」
「……なのに強く在ろうとしてしまう。見てて痛々しーんだよね、そういうのは」
頬を撫でて、リゼルは苦笑した。目に涙をためながらも、肩を怒らせてこちらを見るイリヤの瞳に甘えはない。強くまっすぐなブルーアイ。よく知った瞳。
「ま、たまには近道もいいんじゃない？　丁度、教えてくれそうな人がいることだし」
だが、そんな言葉を口に乗せると、イリヤの勝気な瞳は疑問符を浮かべて揺れた。にっこりと笑いながら、リゼルがすっと服の中に右手を入れる。怪訝な顔をするイリヤとシルヴァスの前でその右手を引き抜くと、白銀の刀身が姿を表す。

「とう」
奇術ショーでも目にしたように目を点にする二人の前で、リゼルはそれを天井に向かって投げた。音もなく刀は天井に吸い込まれ、ぎゃ、という悲鳴が落ちてくる。
そこでようやくシルヴァスは顔をこわばらせると衛兵を呼びつけた。
まだ目を点にしたままのイリヤを見て、リゼルはもう一度、にこっと笑った。

兄妹と亡国の姫君　１４

暗い回廊を音もなくフリートは進み、やがて灯りの漏れる部屋の前で立ち止まった。ティラはそっとフリートの腕から地面へと降りると、すぐに扉に耳を押し当てた。

「次は、失敗は許さなくてよ」

中からは、多分に苛立ちを含んだヴァシリーの怒号が聞こえてくる。

（いきなり当たりかしら）

扉に当てた手が汗を帯びる。息を殺して、ティラは中の会話に集中した。声の具合と言葉の内容から言って、独り言のようには到底思えない。

「あの小娘がイリヤに成り代わっている今が好機なのです。実際に怪我のひとつふたつもすれば、城の連中も信じるでしょう。あの者が王位欲しさにイリヤの命を狙っていると」

「しかしヴァシリー様、治療や見舞いの間まで誤魔化せますでしょうか？」

「ならば殺しておしまいなさい！」

おずおずと異を唱えた別の声を、ヴァシリーの叫びが一掃する。その金切り声に、ビクリとティラは身を震わせた。

「……ふふ、そうよ。殺してしまえば良いのですわ。母であるわたくしは疑われることなく、シルヴァスは失脚するでしょう。その後で、奇跡の復活を遂げた聖女としてイリヤが即位するのです。ふふふ……ああ、なんと素晴らしい」

うっとりと自分に陶酔したようなヴァシリーの笑い声に、ティラはぞっとしたように身を引いた。

当たって欲しくなかった自分の推理は、これで全てが正しかったのだと裏打ちされる。

もし、イリヤと自分が入れ代わったこのタイミングで襲撃者が本

気になったのが偶然でないのなら――
黒幕は、イリヤを傷つけることができない者だ。それでもイリヤを襲う理由は、王位を狙ってイリヤの暗殺を企てる者がいると知らしめるため。それが表沙汰になって真っ先に嫌疑をかけられるのは、もう一人の王位候補者であるシルヴァスだろう。これらのことを踏まえると、黒幕はもうヴァシリーしか考えられなかった。だが、ティラはそうあって欲しくなかったのだ。
せめて、ヴァシリーの一派の者が、独断でやったことであって欲しかった。黒幕が母親などと知れば、イリヤがショックを受けるのは間違いない。
「さあお行きなさい。お膳立てはもう済んでいるのです」
「しかし……イリヤ様がこのことを知れば――」
「これがイリヤにとって最も良い道なのです。全ては、イリヤのためですわ。いずれ、あの子もわたくしに感謝する筈です」
ぴしゃりと告げるヴァシリーの声は、もはや耳をそばだてていなくともはっきりと届いた。は、と短い返事がして、中の気配が動く。慌ててティラはフリートを振り返り、そしてそのとき初めて異変に気付いた。会話を聞くのに集中しすぎて気付かなかったが、フリートの様子がおかしい。膝を折って、荒い息をついている。
「フリートさん！？」
肩を揺すって呼びかけたそのとき、丁度扉が開いた。中の灯りにくっきりと照らし出されて、ティラが反射的に顔を覆う。中から現れた黒ずくめが二人、驚いたように身構えて短剣を抜いた。
「まあ、お客様がいらっしゃったのね」
その二人をかきわけ、ヴァシリーが姿を現す。表面上はまるで敵意など感じられない人の好い笑みを浮かべ、彼女はしずしずと歩み寄ってきた。そこにある得体の知れない威圧にティラは後ずさりかけたが、フリートが動かないのでそれ以上は動けない。
「逃げろ……」
掠れた声でフリートが呻いたが、ティラは動かなかった。戦えそ

うもない彼を置いてはいけなかったし、どの道一人で逃げ切ることは無理だろう。
「いいざまですこと、フリート。気付かれない程度に、確実に動きを抑える程度の毒を仕込むのは骨でしてよ」
ヴァシリーの笑みが一転、残忍なものに変わる。少し距離を置いて彼女は立ち止まると、合図のようにすっと腕を伸ばした。それと同時に、黒ずくめが獲物をかざして近寄ってくる。思わずティラは身を固くしたが、すぐ真後ろで気配が動いてはっとする。そちらを振り向くと、フリートが剣を杖代わりに立ち上がろうとしているのが、部屋から漏れた灯りで見えた。
「……ヴァシリー様。どんなに貴女が変わってしまわれても、おれを拾ってくれたエアロン様や、家族同然に接して下さった貴女へのおれの忠義は変わりません。だからこそ」
ふらつく体で、フリートはティラの前に進み出ると剣を抜き放った。とても戦えるようには見えないのに、その威圧に押されて黒ずくめ達が一歩退く。
「だからこそ、これ以上貴女に過ちは犯させません」
「クレイヴの狗が、白々しいことを。安心なさい、お前は殺しませんわ。お前が生きていれば、よりクレイヴへの嫌疑は深まりますものね？　けれどイリヤを護れなかった役立たずの護衛として、この国を去りなさい」
高笑いしながら、ヴァシリーが踵を返す。それとちょうど入れ違いに、黒ずくめ達がフリートに襲い掛かる。彼らが一斉に振りかぶった刃をフリートが蹴散らすが、そこにいつものような力強さはなく、反動でフリートが大きくふらつく。
「フリートさん！」
「逃げろ、ティエラ！　聞いただろう、こいつらはおれを殺せない。だから早く行け！」
「――構いませんわ。フリートも殺しておしまいなさい」
フリートの声を撥ね退けるように、強い調子でヴァシリーが割っ

て入る。その瞳が逃がすまいと真っ直ぐにティラを射抜く。
「殺して遺体は処分なさい。クレイヴの命により暗殺を遂行して逐電。その方が合理的なシナリオですわ」
「あなたというひとは……！」
駆け出そうとした足が震える。彼女の言葉は挑発にも思えたが、狂気に満ちた笑みは本当に殺しかねないとも思えた。憤りに震えながらティラはヴァシリーを睨んだが、それ以上は何をできる筈もなく、ただ震えを殺して唇を噛み締めるしかできない。その間にも見る間にフリートは劣勢に追い込まれ、その手から剣は弾かれてどうと彼の体が地面に倒れる。
「さようなら、この国の礎になれることを誇りに思いなさい」
笑うヴァシリーの顔が黒ずくめに遮られて消え、振り上げられる刃が見える。だがすぐにそれも見えなくなる。
「フリートさ――」
フリートが、身を挺してその間に割って入ったのだった。すっぽりと抱きかかえられもう何も見えなくなったが、フリートが凶刃に倒れる姿が脳裏に浮かんで戦慄する。そしてその次は自分だ。――そこには、あまりにはっきりと死が見えているのに。
なのに心は絶望していなかった。そして、断末魔の悲鳴と共に、フリートが斃れることもなかった。
キン、と澄んだ音と共に、ヴァシリーの高笑いが止んで。
「約束、守ってくれてありがとな。だが――」
礼を述べる聞き慣れた声は、酷く不愉快そうだった。
きっと、今夜は延々拗ねて、くどくど文句を言うのだろうと。それが簡単に想像できて、ティラは状況も忘れて苦笑した。
「俺の妹にくっつくな！！」

最高に機嫌の悪い怒号と共に、銀色の風が駆け抜けた。

兄妹と亡国の姫君　１５

あっという間にカタはついて、一刀の元に倒れ伏した二人組には目もくれず、リゼルがひゅっと空を切ってから刀を納める。
「安心しろ、峰打ちだ」
誰に対して言っているのか解らない自己満足の決め台詞を決めたリゼルだったが、浸っている場合ではないことを思い出して、慌ててばっと振り返った。丁度、危機を脱してフリートから解放してもらったティラが、こちらに視線を向けたところで、リゼルはダッシュで駆け出した。
「ティラァァァァァ！！」
うげ、とティラが呻く間もなく、リゼルがぎゅうぎゅうと抱きしめてくる。
「に、兄さん！　離して！　そんな場合じゃないでしょう！」
「そんな場合だぁぁぁ！　寂じがっだよおぉぉぉ！！」
「兄さん鼻水！　汚い！　っていうか何よその格好は！！」
結局ティラまで状況を忘れてリゼルに説教を始める。そうやってぎゃあぎゃあ騒ぐ兄妹を見て、フリートはふっと笑った。だが、すぐにその気配に気付いて笑みを消す。そう。ティラの言う通り、そんな場合ではなかったのだ。
「イリヤ様……」
フリートが漏らした名前に、さすがにリゼルもティラも、はっとして口を噤む。クレイヴ・シルヴァスの持つランプの灯りが、イリヤの悲壮な表情を映し出していた。
「イリヤ――」
「なんということを……お母様」
ヴァシリーの声を掻き消して、イリヤが震える声を紡ぐ。
「ティエラを犠牲にしてまでわたくしを王位につけることが、わたくしの為と言うのですか？」

「何を言うのイリヤ。ああ、可哀想に。シルヴァスに何を吹き込まれたのです」
それでもヴァシリーは毅然とした態度を崩すことはなかった。イリヤの髪を哀れむように撫で付けて、ヴァシリーは尚もシルヴァスを睨みつける。
「汚い男。わたくしを陥れるため、手の混んだことをなさるのね」
「あのさあ、あんたの手下がもう全部ゲロっちゃったんだけど」
「なんて愚かな。それも計略のうちに決まっているでしょう。恐らくそれはわたくしの家臣ではなく、シルヴァスの狗ですわ」
見下しきった目で冷ややかに告げるヴァシリーに、堪りかねてリゼルは口を挟んだ。だが鮮やかに一蹴されて肩を竦める。リゼルにしてみれば、怒るというより、最早呆れや感心の境地だ。だがシルヴァスはそうではないらしかった。
「ヴァシリー様、どうか正気にお戻り下さい。私があなたを陥れることなど、天地が返っても有り得ませぬ」
「白々しいことを。ねえイリヤ。イリヤはお母様を信じてくれますわよね？」
シルヴァスの必死の声色も突っぱねて、ヴァシリーは娘に取り縋った。母の懇願に、イリヤの表情が迷う。ああ、とシルヴァスが嘆きを口にして顔を覆い、見かねたリゼルが声を挟もうと息を吸って、だがフリートが肩を叩いてそれを阻止する。
「……わたくしは」
誰の助けも借りず、イリヤは自分の唇で語りだした。ぎゅっと両手を握り締め、毅然と上げた顔にもう迷いはない。
「わたくしは、グランヴァニス皇女イリヤとして、クレイヴ・シルヴァスに命じます。わたくしの父エアロンの意志を継ぎ、貴方がこの国を導きなさい」
「イリヤ！」
悲鳴のようなヴァシリーの叫びが響く。そしてヴァシリーが高く手を振りかぶり、引っ叩くつもりだと察してティラは思わず目を瞑

ったが、イリヤは毅然として動かなかった。
「わたくしには、民を導くだけの知識も力もありません。そのわたくしが、どうして指導者となれましょうか」
「あなた以上に相応しいものなどいないのよ！　あの人の娘である、あなた以上に！」
「血で民を救うことはできません。今わたくしにできることは、道を誤らぬことだけですわ」
　振り上げたまま下ろすことのできない、震えるヴァシリーの手を見つめながら、淡々とイリヤは続ける。
「これは、グランヴァニス皇帝エアロンが遺児、皇女イリヤの采配です」
　皇女たる威厳を纏って、厳かにイリヤが告げる。わずか十の少女が、思わず膝を折ってしまうような、そんな威圧を持って周囲を見渡していた。そのイリヤの前で、実際にシルヴァスは跪き、頭を垂れた。
「よくご決断されました、イリヤ様。エアロン様のご遺志は、このクレイヴが命に代えても必ずお守り致します」
　イリヤが頷いて微笑む。大団円、という空気の中で、だがヴァシリーは一人表情に絶望をたたえて崩れ落ちた。
「……では……、では、一体私には何が残るのです。あの方はこの国に全てを掛け、そしてこの国を遺したのに、それまで奪われて、私は……」
　ぶつぶつとうわごとのように繰り返すヴァシリーに、クレイヴとフリートが哀れみの視線を向ける。だがどうすることもできず、ただヴァシリーの悲壮な声だけがしばらく場に響いていたのだが。
「わたくしでは、不足ですか」
　決心したように、イリヤもまた膝をついてヴァシリーを見上げた。
「わたくしと静かに二人で暮らすことでは、お父様を失ったお母様の哀しみは癒されませんか。――でも、お母様」
　はらりと、イリヤの瞳から涙が舞う。もう、そこに皇女イリヤの

面影はなく、歳相応の一人の少女がそこにいた。
「わたくしもずっと寂しかった。わたくしにはお母様が必要ですわ」
イリヤがすすり泣く傍らで、ヴァシリーが毒気を抜かれたように彼女を見つめる。
その二人を見つめながら、ティラはそっとリゼルに寄り添った。
ヴァニス城の離れに、イリヤの嗚咽は夜が明けるまで続いていた。

兄妹と亡国の姫君　１６

「お世話になりました」
旅支度を整え、ヴァニス城の門に立つ兄妹に、イリヤは深々と頭を下げた。
「今は無知ですけれど、今から知識を身につけて、いずれはこの国の為に私も何かできるようになりたいと思います」
上げた顔に、出会ったときのような高圧さはもうどこにもない。温和な微笑みを湛えたイリヤに、リゼルとティラもまた微笑んだ。
そうして簡単な別れを述べて踵を返し、だが袖を掴まれてティラはイリヤを振り返った。
「？」
「ねえ、ティエラ。もしまた近くに来たら、必ず寄って下さいな。わたくし達、きっと良い友達になれると思うの」
そんなことを言われ、ティラは頷きながらイリヤを振り向き、袖を掴む彼女の手に手を重ねた。
「ええ」
「フリートも待っていてよ」
小声でそんなことを囁かれ、ティラがきょとんとする。だが、咳払いが聞こえて二人はそちらを振り仰いだ。
「……イリヤ様」
「だってあなた、やけにティエラのことを楽しそうに話していたじゃない？」
影のように後ろに控えていたフリートが、悪戯っぽいイリヤの視線を受けて困ったように目を逸らす。思わずティラが赤面し、なんとなくイイ空気が漂ったその瞬間。
それと真逆のドス黒い殺気と刀の鳴る音に、その場の全員が凍りついた。
その後はお決まりのようにドタバタ騒ぎだ。誤解とフリートは主

張するが、聞く耳持たないリゼルが刀を振りかぶり、致し方なくフリートが応戦する。そしてそれをティラが必死に諌める。
「奇妙な兄妹ですわ」
そんなやり取りを眺めて、イリヤは晴れやかに笑った。

温かい風が髪を撫で、泳ぐ金髪をティラが手で撫で付ける。
「あ――リボン返してもらうの忘れちゃった。もう、兄さんが暴れるからよ」
ヴァニス城はもう遠くなっている。陽が落ちて、オレンジに染め抜かれた丘の上に、兄妹は並んで腰を下ろしていた。
漏らした不満に返事がなくて隣を見ると、三角座りをしたリゼルが膝に頭を埋め、めそめそと泣いている。
「ああもう鬱陶しいなあ。兄さんのせいで、ちゃんとお別れもできなかったし……」
「だって、ティラが……。俺のティラが……、他の男に……」
「な、なんの話よ！？　だから、誤解で刀を抜いて暴れるのはやめてって何度も言ってるでしょう？」
「誤解なの？　本当？」
リゼルが涙でべしょべしょの顔を上げ、ティラは溜息をつくと、ハンカチを取り出した。
「いい歳した男がすぐ泣かないの」
「ねえねえ、本当に誤解？」
「誤解だってば」
「じゃー俺だけだって言ってよ」
「兄さんってほんと馬鹿」
詰め寄ってきた兄に、涙を拭い終えたハンカチを投げつける。ティラがそっぽを向いてしまったので、リゼルは飛んできたハンカチを握り締めてしゅんとした。
「……でも助けてくれてありがとう」

だが聞こえてきた声に、すぐにリゼルに笑顔が戻る。
ゆっくりと沈む夕陽を眺めながら、しばらくはどちらも無言だったが。
「父上や母上、元気かなあ」
ふとリゼルが漏らした声に、ティラは顔を上げた。
「元気だと思うけど、多分母上は怒っていると思うわ」
「……やっぱり？」
「兄さんが勝手に出ていくし、母上の刀まで無断で持って行っちゃうし。兄さんの部屋、半壊してたわよ」
「……」
ぶるぶると、リゼルが震え上がる。兄が出て行った日のことを思い出して、ティラも遠い目をした。
「もしかしたら、今頃こちらを追いかけているかもしれないわね」
「ありえる。母上ならありえる。……もし見つかって捕まったら……」
想像したくない。したくもないが。
「吊るされるかな」
「吊るされるわね」
遠い目をした兄妹の声がハモり、それから弾かれたように二人は立ち上がった。
「よし、追いつかれる前に次の町だ！」
駆け出すリゼルを追って、ティラも走り出した。
黄昏は優しく全てを赤橙に包んでいた。

兄妹と亡国の姫君　１６（後書き）

兄妹と亡国の姫君・完　次章へ続く★

兄妹と禁忌の魔法　1

強い視線を感じる。
悪意のあるものでも殺気を伴うものでもないが、目立つことをしているわけでもないのにじっと注視されるのは、心地よいことではない。
とはいえ、視線など確かな感覚の元に感じるものでもない。気の所為だったということだって、多々あることでは、ある。
だからそんなことは悶々と悩んだところでどうしようもなく、ついにティラは覚悟を決めると、くるりと首を後ろへ向けた。
――それと同時に。
あれほどまでにまとわりついてきた視線は霧散する。
見遣る先で、兄リゼルが刀の手入れをしている。わざとらしい鼻歌は、今始まったあたりが最もわざとらしい。だが、嘆息して追求するのを堪えると、ティラはまた首の向きを元に戻し、向かっている机に視線を落とした。白かった便箋は、もうだいぶ埋まりかけている。
締めくくりの文章に悩んでいると、また強い視線を感じる。ティラは深いため息をついた。
半刻もかからず終わるような手紙に、一体自分はどれだけの時間を費やさねばいけないのだろう。その嘆きもまたぐっと堪え、ティラはまたくるりと振り向いた。しゅばっと――そんな音が聞こえた気がした。いや、本当に気がしただけだろうが。リゼルは何事もなかったかのように、刀の手入れに没頭している――かのように、見える。
「……兄さん」
「ん、なーに？」
振り向いた兄がにこっと笑う。
なんたらが転んだとやらでもやりたいのかと思ったが、そうでは

ないらしい。いやそれだって解っているのだが。
いい加減苛々が限界に来て、ティラは椅子を蹴った。
「どーしたのティラ」
「ぜんっぜん集中できなくて苛々してきたの。……先お風呂入るからね」
頭をぐしゃぐしゃと掻きむしり、若草色の外套を無造作に外してベッドに投げ捨てると、ティラは風呂場へと姿を消した。
ほどなくしてシャワーの音が聞こえ、それを聞きながらリゼルは刀の手入れを再開――してはいなかった。
「気になる。気になってぜんっぜん集中できない」
放り出しそうになった刀を、思い直してそっと置き――母のものを無断で持ち出しているのだ、万一傷などついては命に関わる――、リゼルは机に近づいた。ティラの口ぶりではまだ書きかけのようだったが、綺麗に二つ折りにされた便箋が、封筒の中に半分だけ突っ込まれている。ちゃんと封をしてないところを見ると、やはりまだ書きかけなのだろう。
シャワーの音がしているのを耳を澄ましてもう一度確認してから、そっと便箋に手を伸ばす。
「『拝啓イリヤ様。お元気ですか？　ティエラです。あれから旅を続け、今はヴァニスからはかなり離れたディアヌという街に来ています。……』」
それは、イリヤに向けて綴られた、当たり障りのない手紙だった。すこし癖のあるティラの文字は、だが女の子らしくて可愛らしく、文字だけでにへらと笑ってしまう馬鹿兄であったが、慌てて表情を引き締めた。そして、夢中で字を追っていく。
「『……旅先は兄さんの気分次第なので、お返事は気にしないでね。でも、リボンを返して貰いに、近いうちまたお邪魔したいと思います。フリートさんにも……』」
そこで文字は途切れていた。恐れていた名前がついに登場して、リゼルの表情が一気に青ざめる。

「あのムッツリ男め……やっぱり俺のティラをたぶらかして」
「何してるのかしら、兄さん？」
唐突に声を掛けられ、リゼルは裕に１０センチは跳ねあがった。だらだらと体中を汗が伝い、全身が危険と警告を放ってくる。声の主などわかりきっているが、聞くかぎり普段通りのトーンの声の裏には、限りなくドス黒いオーラがあって、リゼルは顔を上げることすらできなかった。しかし――、澄ました耳には、まだシャワーの音が聞こえているのだが。
それを不審に思い、手紙を手にしたまま、ギギギと錆びついたドアのような動きでリゼルが顔を上げる。確かに、シャワーの音は聞こえていた。開け放しの風呂場の扉の向こうで、勢い良くお湯をまき散らすシャワーと湯気がよく見える。その前に、バスタオルを体に巻き、仁王立ちでこちらを睨みつける恐ろしい形相のティラがいた。
「え、ええと……、ティラは何してるの」
「石鹸を忘れたの」
「あ、そう……」
「他に言うことは？」
にこ、とティラが微笑む。どこまでもドス黒い何かがつきまとう笑顔に、汗びっしょりになりながらリゼルも微笑み返し。
「んーと、こうゆうこともあるから、今度からは一緒にお風呂に入ろうね！」
一瞬後、リゼルは容赦のない右グーで部屋の外までふっ飛ばされたのだった。

兄妹と禁忌の魔法　2

「もう、信じられないッ！　兄さんの馬鹿！」
ぶつぶつと独り言を言いながら、ティラは一人往来を歩いていた。手紙を出しに行く目的だったが、縋りついてくる兄は引きはがしてきた。めそめそ泣いていたが知ったことではない。そもそもいつものことである。
いつものことと言い切ってしまうなら、度を過ぎたシスコンもいつものことではあるのだが――
「人の手紙を勝手に読むなんて、いくら兄さんでもどうかと思う」
手にした封筒をひらひらと振って、ティラは憤慨して熱くなった顔に風を送った。そうして、ちらりと横目で封筒を見遣る。
――おそらく兄は、前回巻き込まれた件で知り合った青年と、自分の仲を疑っているのだろう。ティラから言わせれば全くの誤解だが、男と少しでも口をきけば、兄はこうだ。もし恋人でもできたらと思うと先が怖い。
「……恋人、かぁ」
手を動かすのをやめ、ティラは今しがた考えたことの一部を口にした。ティラはまだ十歳だ。恋など未知の世界であるが、それなりに憧れはある。
「でも、確かにちょっとかっこよかったかも」
手紙をそっと顔に当て、無意識に呟いてしまってから、ティラははっとして頬を赤らめ、それから慌てて周囲を見回した。万一兄に尾行でもされていて、今の言葉を聞かれていたら大事だ。だが、兄が憤慨して駆けよってくる様子も、めそめそと泣く声も聞こえてこなかったのでとりあえずほっとする。
まあ、兄は当分再起不能だろう。必殺『お兄ちゃんなんて大嫌い！』の呪文は最低1日は効果がある。
安堵のため息をつくと、今度は無意識にそんなことを呟いてしま

った自分が恥ずかしくなり、それを誤魔化すようにティラは早足で歩きだした。だが、目的の場所がいつまでたっても見当たらない。
「うーん……、この町に伝書屋さんはないのかしら」
誰かに聞いてみようと辺りを見回す。
立ち話に興じる女性――話しの腰を折っては申し訳ない。
小走りで道を横切る男性――急いでいるようで話しかけづらい。
デート中のカップル――お邪魔虫になりそうだ。
走っていく少年――年齢的に道案内ができるかどうか微妙なところである。
「……あ」
ふと、ティラの視線が止まる。
走っていく少年が、小走りの男性に追い付き、勢い良くぶつかる。よろける男性を尻目に、詫びもしないで少年は路地裏に消えていく。
慌てて、ティラは彼の後を追いかけた。間一髪、少年が路地裏の細道を左に折れるのが見える。その後ろ姿を慌てておいかける。複雑に分岐する道を、少年は迷いなく走っていき、ティラは必死でその後を追いかけた。やがて大きな通りに出て少年がようやく走るのをやめたところで、ティラも立ち止まる。
「お姉ちゃん、オレになんか用事なの？」
追いかけていることに気付いていたのだろう。振り返ってそんなことを聞いてきた少年を、ティラは息を切らせながらきっとにらみつけた。
「さっき、財布をスッたでしょ？　見てたんだから」
「だから何」
取りつく島もない答えだったが、彼はこれみよがしに片手で財布をもてあそんだ。黒い革の長財布は、およそ子どもが持つものではない。スリを働いたことを自ら暴露するような行動はこちらを馬鹿にしているように見え、ティラは眉根を寄せた。
「盗みはいけないことだって、知っているわよね？」
「拾ったんだよ。盗んだんじゃないもん。拾ったものはオレのもの

だ」
「落ちていたんじゃないでしょう？　それは拾ったとは言わないの。だいたい、拾ったものだって役人に届けるのが本当よ。いいから、それをさっきの人に返しなさい。私も一緒にあやまってあげるから」
「うっせぇ、ブース！」
べっと少年が舌を出した瞬間、その手から財布が消える。手に伝わる重みがなくなったことに気付いて少年がはっとした頃には既に、財布は少年の手から別の人物の手に渡っていた。その人物の鬼のような形相に、余裕綽綽だった少年の顔が恐怖に歪む。
「俺の清楚で可憐で超絶的に可愛い妹に向かってなんてこと言いやがる。取り消せ。謝れ。さもなきゃ斬る」
相手が子どもだろうとお構いなし。容赦なく淡々と紡がれたリゼルの声に、直後少年は土下座していた。

■□■□■

「……謝ったんだから、返せよそれ」
立ちあがって膝を払いながら、少年が憮然として抗議する。――腰は若干引けていたが。それでも、隙あらば財布を奪い返そうとしているのが傍目にも解るが、それをリゼルが易々と許す訳もない。
「お前の理論で言ったら、拾ったものは自分のものなんだろ？　だったらこれは俺のものだよね？」
そうにこりと笑いかけられて、う、と少年が言葉を詰まらせる。自分の言ったことに文句は言えない。多少捻くれてはいるものの、そういうところはまだ少年の真っ直ぐさが残っているようだった。そのことにリゼルは微笑んだが。
「兄さん、いつからいたの？」
ティラの問いかけにびくりとする。

「今日は立ち直らないと思ってたわ」
「……立ち直れそうになかったけど、不快アンテナが……」
喧嘩したことを思い出したのだろう。汗をだらだらと流しながらもごもごと答える兄に、ティラは呆れた。大した感度の良さである。
馬鹿にされたことを察知して来たにしてはいくらリゼルにしても早すぎるし、自分と少年の会話を聞いていたのもおかしい。とすれば、不快アンテナが察知したのは、さっきの無意識の呟きだろう。
「下手に独り言も言えないわ」
口の中だけで呟いたとき、少年がそっと立ち去ろうとしていることに気付く。
「コラ、話はまだ終わってないぞ」
しかしティラが声を上げる前に、リゼルがその襟首を掴んでいた。
「んだよ！」
「一緒に返しにいくんだよ」
「もう見つからねーよ！」
「だったら役人に届けるんだ」
どうにかリゼルの手から逃れようと、少年がジタバタともがきながら怒声を上げる。
「なんでだよ！　それもうお前のものなんだろ！　オレに関係ねーよ！」
「いーや、正義の味方としてはお前の所業は見過ごせないね」
だがリゼルが至って大真面目にそう述べると、少年はぴたりと暴れるのをやめた。
「正義の味方だって……？」
そして、くるりとこちらを振り返って、冷めた目で見上げてくる。それは、幼い少年におよそ似合わない、虚ろで病んだ視線だった。思わず絶句するリゼルとティラに向けて、少年が悲痛な声をあげる。
「そんなものいるもんか！　正義なんかなもんか！　勝手に決めるな馬鹿ヤロー！」
叫ぶ少年の目にはうっすら涙が滲んでいて、リゼルとティラは顔

を見合わせたのだった。

兄妹と禁忌の魔法　3

切れた息を整え、上下する肩がおさまるのを待って立ち止まる。それから少年は手を持ち上げると拳をつくり、ぐいと乱暴に目をこすった。ほんの少し水滴が手を濡らしたが、何度もこすっているうちにその感触もなくなる。それから一度深呼吸して、家の扉を開けた。

「ただいま」

「おかえり、ヘイル」

優しい声に出迎えられ、顔がほころぶ。ぼろぼろの靴をぬぎすてて家に上がり、少年ヘイルは声の方へと足を進めた。

「メリルは？」

「庭で遊んでいるわ」

「……調子悪いの？」

返ってくる声に、押し殺した苦痛を敏感に感じてヘイルはくぐもった声を上げた。古いベッドに横たわったままの母は、だがさきほど感じ取った苦痛など気の所為に思えるくらい明るい顔で、ふふっと笑う。

「そんなことないわ。明日には起き上がれるかもしれないくらい、調子がいいわよ」

母は手を伸ばすと、まだおさない息子の頭をくしゃりと撫でた。笑顔は変わらなかったが、痩せ細った手は母の言葉を嘘だと証明してしまっている。それに気付かないほど、少年の心は幼くなかった。母は知らないかもしれないが。

「……ねえ、かあさん」

「ん？」

「正義の味方って、いると思う？」

だけど知らないままでいてほしいから、少年は子どもじみた質問を口に乗せた。そうねえ、と考えて見せる母を、ぼうっと瞳に移し

ながら。庭の方からは、妹の舌足らずの鼻歌が聞こえてくる。
「いると思うわ」
童女のような微笑みで母がそう答えたのと同時に、ばたんと家の扉が開く。
「おじゃましまーす」
驚いて振り向いたヘイルの瞳に、眩ゆい銀髪が揺れた。

■□■□■

「な、ななな何しに来たんだ！　ていうかどうやってここに！」
確実に撒いた筈なのに、と呻く少年に、リゼルはにこっと笑った。
「屋根の上から見てた」
確かにそれでは、どれだけ複雑な道を選ぼうが無意味であった。絶句する少年をにこにこと見ながら、リゼルが言葉を続ける。
「財布、ちゃんと持ち主に渡してきたから」
「財布？」
反芻したのは少年ではなかった。彼の後ろから上がった穏やかな女性の声に、リゼルとティラの目がそちらを向く。
「ヘイル、財布って何のこと？」
少年の顔色がいっきに青ざめ、母を振り返ることもなく硬直する。恨みのこもった視線をリゼルに向けるが、意にも介さず彼は問いかけてきた。
「お母さん、病気なの？」
「……怪我が元で動けなくなった」
蒼白な顔色のままヘイルがか細い声を上げ、リゼルがああ、と声を上げる。まだこの大陸には設備が整った病院がない。少なくともこの小さな町には、病院のようなものは見当たらなかった。歩けない母を抱えて当てもなく病院を探すには少年は幼すぎるだろう。
「ヘイル」
焦れた母の声に、ヘイルがびくっと肩を震わせる。その拍子に、

どこかから聞こえてきていた舌たらずの鼻歌が止み、玄関の扉が開く音がした。
「おにいちゃんおかえり。どうしたの？」
ヘイルよりさらに幼い少女が、とてとてとヘイルの前に駆けよって行く。そして、リゼルを興味津津に見上げた。
「うわぁ、きれいなかみ。ねえママ、おひめさまだよー」
無邪気にはしゃぐ少女を見て、リゼルは相好を崩して彼女を抱きあげた。
「ありがとー。でもお姫様じゃないんだよー。どっちかといえば王子様？」
意味がわからなかったのだろう、少女が不思議そうに首を傾げる。だが少女の興味はすぐに理解できない言葉からは逸れ、髪を触ろうと手を伸ばしてくる。
「やめろメリル！　お前メリルに触んなよっ、馬鹿っ！」
だがその瞬間足をおもいきり蹴られ、リゼルは苦笑しながらメリルを下ろした。不服そうな声を上げるメリルに「あとでね」と声をかけ、リゼルはヘイルからもメリルからも視線を離した。
「息子がすみません。あなたは？」
「俺はリゼルといいます。後ろは妹のティラ。兄として彼の気持ちはよくわかるんでお気になさらずに。俺だって可愛い妹を他の男に触らせたくはないですからね」
ぐっと手を握り締めてそんなことを言うリゼルに、黙って見ていたティラはため息を飲み込んだ。後半の言葉はどう考えても必要ない。
「息子が何かしたのでしょうか」
「息子さんが財布を拾って、落とし主を探していたんで手伝ったんですよ。でも時間かかりそうだったし、俺が家に帰しました」
「……そうだったんですか」
少年の母は、何か言いたげな目を伏せて、そう呟いた。蒼白だった表情に幾分か色を戻し、驚いたように見上げてくるヘイルに、リ

ゼルがそっとウインクをした。
「お母さん、すみません。よかったらその怪我、診せてもらえませんか？」
その横を通り過ぎ、ティラがそう声を掛ける。
「父が医術を少しかじってましたから、お役に立てるかもしれません」
「……あなたが？」
息子とそう歳の変わらない少女の大人びた言葉に、少年達の母がまじまじとティラを眺める。だがメリルは無邪気にはしゃぎながら母とティラに駆け寄った。
「わあ、おねえちゃんおいしゃさんなの？　おかあさんをなおしてくれるの？」
「お医者さんじゃないけど、少しなら何かできると思うわ」
「ほんと！？」
嬉しそうに笑いながら、メリルは背伸びして母にかかっている毛布を掴むと、それを少しずらした。脛のあたりに深い裂傷が見えて、ティラが眉をひそめる。
「ちゃんと手当てされてないから、毒が入ったのね。熱もありますか？」
「少し……」
これは相当に痛むだろうと思えたが、息子達の手前だろうか、母の表情にはそのようなものは見えない。細くか弱そうな女性なのに、母というものはそれだけで強いのだなと、ティラは自分の母を思い出して少しだけ家が懐かしくなった。ティラの母は毛の先ほどのか弱さの欠片もなかったが、それでも温かさは変わらない。
その温かさを思い出して、ティラは両手を上げた。その小さな手が、複雑な印を結び、淡い光がその手を包む。
『貴き神の御使いよ。我が手によりて、癒しの力となれ』

ティラの声に呼応するように、光が強まり、そして収まる。
「……嘘。痛みが……」
「完全に治すほどの力は私にはないですけど、治癒力は上がった筈です。熱は、熱さましの薬草を探してきて、あとはちゃんと手当すれば……」
夢を見ているような声に、ティラが微笑んで答える。だがその言葉は、少年の荒々しい言葉に半ばでかき消された。
「金なんて、ないぞ！！」
驚いてティラがそちらを見やる。
「別に私、お金を取ろうなんて……」
「嘘つけ！　その魔法を使うには沢山お金がいるって聞いたんだぞ！　だからオレ……！」
「ヘイル」
厳しい母の声に、ヘイルの怒声が止む。びくりと肩を跳ねあげたヘイルも、自分の失言に気付いたようだった。
「やっぱり、お金を盗もうとしたのね？」
震えて顔を上げられないヘイルに代わり、ヘイルの母が体を起こす。
「……すみません。ありがとうございます。でも、私が動けなくなって、うちには本当にお金がないんです。夫が一昨年、病で逝ってしまって」
「いえいえ待って下さい。お金は要りません。俺達は正義の味方ですから」
にこにこと微笑みながら、リゼルがどーんとふんぞり返り、いつもの馬鹿な決まり文句を口にする。ついに自分まで正義の味方の仲間入りされてしまったことを突っ込みたかったが、ティラはそれ以上に気になることがあってヘイルをつついた。
「ねえ。魔法を使うのにお金がかかるなんて、誰が言ったの？」
ティラの真剣な顔と声にヘイルが縮こまっていたのも忘れて口を開きかけたとき、また玄関の扉が開いて聞き慣れない声が届いた。

「困るね。人の客を取らないんで欲しいんだけどなあ」
人を食ったような口調と言葉に、ティラは今しがたの自分の疑問が向こうからやってきたことを察していた。

黒衣を纏ったその人物は、まだほんの少年だった。それでもティラやヘイルよりは年上だろうが、リゼルの歳には届くか否かといったところだ。被ったフードからは金色の髪がはみ出し、青い瞳が挑戦的に射抜いてくる。

「……貴方が、この子に魔法を使うのにお金がかかるなんて言ったんですか？」

それでも物怖じせずそう問いかけるティラに、少年はくっと喉を鳴らして笑った。

「そんなこと言ってないよ。金銭の見返りを条件にお母さんを治してあげるって言っただけ。正当な契約だよ」

「営利目的での魔法の行使は、大陸連盟によって禁止されています。それは正当な契約とは言えません」

ティラの切り返しに、少年から笑みが消える。リゼルもヘイル達家族も、魔法についての知識などないから、話についていけず黙るしかない。訪れた沈黙を一人ティラが裂き続ける。

「例え貴方が国籍を持っていなくても、大陸連盟法（フューラ・ロウ）を知らなくても、この世界に生きるエレメンターは連盟の魔法ギルドに帰属し、法を遵守する義務があります」

「君は連盟の人？　それとも君もエレメンター？」

既に、少年には笑みが戻っていた。答えないティラに向けて、ふふっと彼は子供じみた笑い声を上げた。だが、その笑う口元とは裏腹に、瞳は酷く冷めている。

「義務だか何だか知らないけれど、そんな理屈、コドモには関係ないよ。自分の力で生活していくお金を得る。倫理にもとるようなことは何もない。人の財布を掠め取るより余程ね」

ぐっとティラが言葉に詰まり、ヘイルがびくっと身を震わせる。そんな二人の様子を見たリゼルが、ため息と共に言葉を挟んだ。

「明らかに支払い能力のない子供に対し、母親をダシにして大金を吹っ掛けるのが倫理的とも思えないけどね」
また少年の顔からは笑みが消え、面白くなさそうにリゼルを見上げる。挑戦的に睨みつけてくる瞳は途端に興味を失って、少年はフード越しに頭を掻きながら明後日の方向に視線をさまよわせた。
「それで何？　人の商売にケチつけて、無償で人助けして、正義の味方気取りなワケ？」
「気取りも何も、俺は正義の味方だけど何？」
腰に手を当て、またもどーんとリゼルがふんぞり返る。呆れたティラが片手を頭に当てかけ、だが大気の震えを感じてそれをやめる。ピリ、と嫌な感触が肌を撫でる。
目を見開いて振り向いたティラの前で、少年の両手が複雑な印を切る。
「――そう。じゃあボクは魔王ってことにしとこうかな。正義の味方よりカッコ良いと思わない？」
ねぇ、と。少年の冷めた目がヘイルに向けて笑いかける。誰も何も言えない間に、少年の唇が震える。
『高き天に住まいし太陽の王よ。我が魂を供物に、その力を我が前に示せ！』
どうしようもなく震える空気を感じ、自らもまた震えながら、反射的にティラは印を切っていた。――だけど。
『貴き神の御使いよ！　我が手に集い、光鱗の盾と――』
だけど、間に合わない。そして届かない。それもまたどうしようもないほど、ティラは体中で感じていた。今まだ、完全なる効力を得ていないこの瞬間ですら、少年へと収束する光がちりちりと肌を灼く。

そこにあるのは、死だ。
直接的に脳に体が伝える警告に、だが抗う術はない。作り上げようとしたシールドは、呆気なく強大な力に呑み込まれ、がくがくと震える手はもう印を切ることもままならない。
だが、その瞬間肌を灼く痛みは消えた。
「――――、兄さ――」
しっかりとこちらを抱きとめるその体温に、だけど逆に体が冷えていく。
死を免れたことを脳が知り、だけど安堵とは真逆の感覚が体中を支配していく。それは、死よりも恐ろしい、虚無。

欲したのは圧倒的な力だった。あのとき、キメラを吹き飛ばした、いやそれ以上の。
あのときの感覚を思い出し、体中を侵食する光に意識を委ねる。
ぴたりと重なる感覚。
「――――――！」
叫びが唇から滑り落ちる。何と叫んだのか自分でも知る術はないけれど、限りなく溢れだす力の感覚を、外へと解き放つ。

「ぐ、うあああああッ！！！」

悲鳴にティラが目を開ける。リゼルにすっぽりと抱え込まれていて視界は開けなかったが、それでも少年がまとっていた力が既に無いことは感覚で解った。こちらをぎゅうと抱きしめる力が弱まり、その腕から解放されると、叫んだままうずくまる少年の姿が目に入る。彼はげほげほと咽せたように咳き込み、口を押さえた手元からぼたぼたと血が零れた。
「な、ぜ……、ボクが、一方的に食われるなんて」
顔をしかめるティラの前で、憎悪のこもった瞳がこちらを向く。

それを見てリゼルは刀に手をかけた。
「……大丈夫……、少し食われただけだ。ああ、でも収穫はあった。……近く……」
だが、少年はぶつぶつと呟くだけで、刀の柄を握ったままリゼルが怪訝な顔をする。それを見て、少年はふっと最初の笑みを戻し、やがて起き上がると口元の血をぐいと拭った。
「――戦う気はないよ、正義の味方サン。魔王は勇者に敗北した。そういうことにしとく」
フードを払いのけ、少年がにっと笑う。取り払ったフードの中から、煌めく金髪がこぼれ出す。
「改心した魔王が、いいことを教えてあげる。この大陸には色んなものが眠っているんだ。例えば禁忌の魔法とかね？　魔王はそれを手にしようとして敗北した。でも、他の魔王がそれを手にして世界を滅ぼすのを止める為に、正義の味方――勇者の旅は続く。なんて筋書きはどうだろう」
ははっと最後に茶化したように笑い、くるりと少年が踵を返す。
「待て、お前は――」
「ユリス・ハイネル。魔王だヨ」
首だけで振り返ると、少年ユリスはばいばいと肩越しに手を振った。

「なんだったんだろう、あの子……」
湯気の立つ鍋をかき混ぜながら、ティラが独り言を言う。だが、服の裾を引っ張られているのに気付いて、ティラは考え事を止めた。どうせ考えたところで、答えが出るというものでもない。ティラはあの少年に見覚えもなければ、心当たりもなかったからだ。ただ、髪と目の色から同郷かもしれないとは思ったが、その程度だ。金髪碧眼などさして珍しいものでもない。
「おねえちゃん。おねえちゃんが言ってたはっぱって、これ？」
「ええ。よくわかったわね」
「おにわにたくさんあったよ！」
勢い込んで尋ねてくるメリルにそう答えると、彼女は嬉しそうにぱっと顔を輝かせた。
「そう、良かった。割とどこにでも自生してるものだから、あるとは思ったけど」
「ねえねえ、これを食べたらなおるの？」
「そのままじゃダメよ。お薬にするから貸して。メリルはこのお鍋混ぜててね」
「うん！」
だが、メリルに踏み台を譲ると、今度はティラが調理台に届かない。
「うーん、お湯を沸かしたいんだけど……」
一生懸命背伸びをするが、水がめの水を掬うことすらままならない。リゼルはヘイルと一緒にでかけてしまったし、ティラが途方に暮れていると、突然手桶が手から離れた。
「お湯を沸かせば良いのかしら？」
振り向くと、ヘイル達の母が微笑んでこちらを見下ろしていた。水を救う彼女を見て、慌ててティラは彼女を諌めた。

「動いてはダメですよ！」
「はいはい、お医者様」
くすくすと笑いながら、彼女は水を手鍋に移して火にかける。メリルが「ダメー」と頬をふくらませ、母がそちらにも困ったように笑いかける。
「あとはやりますから」
「じゃあ、お願いするわ。でもあなた、まだ小さいのに、お料理もできてお薬も作れるなんて凄いわね」
「全部父上から教えてもらっただけで、上手くはできないんですよ」
「……お料理やお薬を？　お母さんではなくて？」
そんな風に返され、ティラは口ごもった。それは、普通は母から習うものらしい。何と言おうか言葉を迷っていると、ヘイル達の母はきまずそうに口元に手を当てた。
「あ、ごめんなさい。聞いてはいけないことだったかしら？」
「いえ、母は健在ですよ。でも、なんというか……家庭的でないというか……」
慌てて手をひらひらと振って答える。だがこれでは家庭に問題があるようだ。やはり怪訝な顔をされ、ティラはうーんと唸った。
「えっと、でも母上のことは大好きですよ。小さいとき、兄さんとでかけて賊に襲われたときとか、母上が一撃で蹴散らしてくれましたし」
「あら……そう……。逞しいお母様ね」
「私は父上から魔法や学問を教わりましたけど、兄さんは母上から剣を教わっていました。だから、兄さんは強いですよ。だからもしまた変な人が来ても、兄さんが守ってくれるから大丈夫です」
ヘイルの母が納得したようには見えなかったが、ティラは強引に話を変えて終わらせた。それでようやく彼女の表情からも疑問符が取れて、元の笑顔に戻る。
「ティラちゃんはお兄さんが好きなのね。メリルもそうなのよ。凄くお兄ちゃんっ子で」

「あ、いえ、うちの兄はその……何かと手がかかって大変ですけど……」
真っ赤になってもごもごと呟きながら、ティラは鍋の方に注意を戻した。煮立っているのを確認してから料理の方の火を消し、メリルから踏み台を借りる。丁度そのとき、玄関の扉が開いて、リゼルとヘイルが勢いよく飛び込んできた。
「ただいまー！」
「わあ、おにいちゃんー！」
元気に叫んだのはリゼルだったが、ヘイルも一緒なのを確認するやいなや、メリルが一目散にヘイルに駆けよっていく。
「ただいま、メリル」
抱きついてくるメリルを、ヘイルが抱え上げる。といってもヘイルもまだ小さいから、そう体格に違いがあるわけでもない。本当は無理をしているのだろう、現に手は震えているが、ヘイルは笑顔でメリルを抱っこしたまま部屋の中に歩いていく。
「……何やってるの、兄さん」
それを微笑ましく見守ったあとにリゼルに目を戻すと、彼はまだ玄関で突っ立っていた。何故か両手を広げて。
「ティラは来てくんないの？」
「行きません。今忙しいから」
「……昔はティラもああだったのに」
「いつまでも子供じゃないの！」
おたまを向けて怒鳴ると、いつものように兄がめそめそと泣く。それはそれで微笑ましく、ヘイルの母がくすくすと笑った。気付いてティラがまた赤面するが、それを誤魔化すように咳払いする。
「で、何をしてたの？」
「ヘイルと一緒に、朝から配達とかの仕事手伝ってた。これお土産」
包み紙を差し出され、ティラがそれを受け取って開く。
「あ、鶏肉」
「俺の取り分で買った。ほら、育ち盛りだし肉も食べないと」

「そうね……、もう少し早ければスープに入れたんだけど……。今から入れるより焼いた方がいいかな。確か庭に香草があったと思うから、見てくる。あ、兄さん、その葉お湯の中に入れといて」
「ん。あ、ティラ」
裏口の方へ歩いていくティラを、リゼルは思い出したように薬草を持ったまま追いかけ、呼びとめた。
「何？」
「一応、配達がてら見周ってみたんだけど。あいつもいなかったし、変なやつもいなかった。大丈夫だと思うけど、気をつけろよ」
小声で囁く兄に、ティラが頷く。
「うん。でも……、なんだか気になるの。あの子が最後に言ったこと」
「禁忌の魔法が云々って？」
「ええ。あの子が使ってた魔法、変だった。同じ光の魔法だったけど、あんな呪文（スペル）、私知らない。……怖い」
俯くと、ティラは自分を抱くようにして震えた。リゼルは魔法を使えないので、ティラが使う魔法とユリスのそれとがどう違うのかは解らない。だが、あの少年はあのときティラを殺そうとしていた。突き刺さるような殺気を思い出すと、リゼルだってあの少年には薄恐ろしいものを感じる。野放しにしておいて良いとも思えない。
「……街でさ。少しキナ臭い話聞いた。この町の近くで遺跡が見つかったらしいんだ。でも、魔法で封印（シールド）されてて入れないらしい」
「それって」
「ああ、ユリスが言ってたことと関係してるかもしれない」
だとしたら、きっと兄は行くだろう。一般家庭で破壊魔法を使うような――何より、妹を殺そうとした相手を、兄が放っておくとは思えない。訪れた沈黙の合間に家族の談笑が聞こえてきて、ティラは我に帰った。裏口の扉に手をかけながら、だがふと違和感を感じて、それをそのまま口にする。
「今回は、黙って行かないのね」

「だって、黙って行ってもティラ、追いかけてくるもん」
苦笑混じりの声に、改めてリゼルを見上げる。声の通り、彼は苦笑していた。
「……ティラのことは、絶対に俺が守るから」
力強い声も、髪を撫でる手も心地よい。兄は酷く女顔だし線も細いが、どうしてかこういうときは逞しく、誰よりかっこよく見えてしまう。
それが少しだけ悔しくて、ティラは苦笑を隠しながら裏口の戸をあけた。

兄妹と禁忌の魔法　6

夕食を取ってすぐ、件の遺跡に行くためにリゼルとティラはヘイルの家を出た。すっかり懐いてしまったメリルの大泣きを食らい、また明日来るからとなんとか宥めすかしていた所為で、予定よりは少し遅れたが、かといって明日になれば封鎖されてしまうかもしれない。こういった遺跡も全て、大陸連盟の管轄だ。

「……俺、陸連もあんま好きじゃないんだよね」

道すがら、ふと兄がそんなことを呟き、ティラはリゼルの方を仰ぎ見た。

大陸連盟は、国だけでなく大陸すら越える規模の国際組織だ。この世界にある４つの大陸に存在する国家は、全て加盟義務がある。悲惨な戦を繰り返さないために列強が取った策ではあるが、その役割の大部分が、すっかり衰退してしまった魔法に関わる力の管理だ。

「どうして？」

その気持ちが解らないわけでもないが、ティラはそんな風に聞いてみた。うーんと、言葉を選ぶようにリゼルが首を捻る。

「なんつーか、強引だから」

「でも仕方ないと思うわ。ここまで魔法の力が衰退してしまったら、個人が持つ魔力というものは脅威だもの」

戦乱の時代にも魔法は用いられたが、その頃には魔法はそれほど珍しい力ではなかった。つまりは対抗する術もいくらでもあったし、ひとつの国が独占できるようなものでもなかったのだ。それでも稀に失われた古代の力を持つような強力な術者、または古代の遺物などを所有する国が現れると、戦は瞬く間にその国の独壇場となり、血みどろの歴史が繰り返されたのだ。

「多少強引にでも誰かが力の管理を行わなければ、また過ちが起こるわ。そしてその誰かがひとつの国家に偏らないよう、大陸連盟が組織された。合理的なやり方だと思う」

「でもさー、ティラだって昔、無理矢理陸連の奴らにつれてかれて、長い間帰ってこなかったじゃんか。俺から見れば人攫いと大差ないね」
「だから、それは連盟の魔法ギルド登録の手続きと、連盟法を学ぶためのもので、魔法を使える人は受けなきゃいけない決まりなのよ。そもそも、3日で終わったわ」
「3日もティラに会えなかったら十分死活問題だ」
「兄さんは大袈裟なのよ。だいたい……」
言いかけて、ティラは言葉を止めた。不自然なところで言葉が途切れたためにリゼルが不思議そうな顔をし、それに気付いてティラは俯きながら、ぼそぼそと続きを口にした。
「……だいたい、3日会えないくらいで大騒ぎするなら、どうして一人で旅に出ようとなんてしたのよ……」
リゼルの視線を感じて、顔が熱くなる。兄のシスコンぶりには辟易するものの、拒絶されれば辛かった。それを見透かされるのも嫌だったが、どちらにしろ兄は見透かしているのだろう。見かけほど馬鹿でないことはよく知っている。
だけど今夜は連れてきてくれたから、少し虚勢が解けてしまった。それを自覚したら恥ずかしくなり、誤魔化す言葉を考えていたが、結局それよりも、それについてリゼルが何か言うよりも前に。
「――誰かに尾けられてる」
リゼルの鋭い声が空気を震わせる。はっとしてティラは身を固くした。
「まさか――」
ユリスのぞっとするような笑顔と殺気を思い出して、ティラが震える声を上げる。しばしリゼルは黙ったまま後方を睨んでいたが、やがてふっと緊張を解いた。
「いや。違うな」
まだ姿も見えない闇の向こうの人物を兄がどうやって特定しているのかは謎だが、その様子から緊迫したものは消えていて、とりあ

えずはそれでほっとする。じゃあ誰が、という当然の疑問に答えるように、リゼルが声を上げた。
「ヘイルだろ？　出てきなよ」
そう言うとすぐに、リゼルの言葉どおり暗がりの向こうからヘイルが姿を現した。
「なんでバレた？　尾けたり撒いたりするのは自信あるのに、お前変だよ」
「そんな変なことに自信持つお前が変だよ。そーゆーの、正義の味方には通用しないもんなの」
腰に両手をあて、呆れたようにリゼルがため息をつく。
「ちゃんとお母さんに言って出てきた？」
「言って許してくれるわけないじゃん。でも平気だよ。俺よく黙って夜出かけてるもん」
当然のように言ってのけるヘイルを、リゼルが身を乗り出して睨みつける。
「お母さんに黙って家を出るなんて、ダメじゃんか！　心配するだろ！」
「……それ、兄さんが言えたこと？」
だが、ぼそりとティラに突っ込まれると、リゼルははた、と言葉を止め、乗り出した身を元に戻して罰が悪そうに頭を掻いた。
「うん。まあ、男にはそーゆーときもあるよな。しょーがない」
はあ、とティラがため息をつく。
「でも、ヘイル。もしかしたら、危険かもしれないの。あなたに何かあったら、お母さんもメリルも悲しむわ」
「だいじょうぶだよ。兄ちゃんは正義の味方なんだろ？　だったら何かあったって平気だよな。正義の味方って強いんだろ？」
「も、勿論」
後には引けなくなって安請け合いする兄を見、ティラはため息を重ねた。しかし。
「……どちらにしろ、一人で帰すわけにもいかないわね」

「そうだな。まあ、もうすぐそこだし、行くだけ行ってみようか。もしアイツがいたら、三十六計逃げるにしかずということで」
既に街の灯は遠くなり、道も外れている。とりあえずはそれで意見を合致させ、リゼルとティラは先に進むことにした。だがほどなくして、急にティラが立ち止まる。
「ティラ？」
「待って、何か変……」
そう言ったきり、ティラはまるで寒いときのように、両手で体を抱くと身を小さくしたまま動かなくなった。だが、周囲を窺っても感覚を澄ませても、ヘイルはもちろんリゼルにも異変は感じられない。
「何が？」
聞き返してもしばらくティラは答えなかったが、ヘイルが痺れを切らす少し前にようやく掠れた声をあげる。
「……私もよくわからないけど、何か騒いでる。……精霊？　でも、なんで……。こんなの初めて」
ティラが上げた声に、ヘイルは胡散臭そうな顔をした。リゼルにしても、ティラとは彼女が生まれたときから一緒だが、こんなことを言ったのは初めてだ。ティラは魔法こそ使えるものの、彼女の父に比べればそう強い術者でもない。
「精霊が騒いでるだって？」
「うん……」
ティラにもそれは初めての経験だった。肌がざわつくような、心が凍るような、今までにない不思議な感覚――だが、理屈ではなく知識ではなく、では何かといえば本能に近いようなものが、直接魔力を動かしてくる。
「……その、見つかった遺跡。見つかったっていうより、誰かに無理矢理引きずり出されたのかも……」
「引きずり出されたって、どういうこと？」
「つまり、魔法によって見えなくされていたものが、その封印を解

かれて現れた……っていう感じかしら。私もこれ以上は解らない」
ふう、とティラが体勢を戻して額の汗をぬぐう。汗ばむような気温でもないのに、ティラの額にはびっしりと汗の粒が浮かんでいた。
「やっぱなんかキナ臭いな。帰ろうか、ヘイル」
「えぇ、やだよ。なんかわかんないけど、逆にわくわくするじゃん」
リゼルの制止を振り切って、たたっとヘイルが駆けて行く。慌ててリゼルとティラがその後を追うが、そう走らぬうちに問題の遺跡はすぐに姿を現した。といっても、すぐには気付かぬほど小さな入り口ではあったが。
「……もしかして、これ？」
ヘイルが口を曲げる。
小高い丘の下に、草に隠れるようにして小さな入り口が見える。大柄な男だと入れないほどのそれは、ただのほら穴にも見えるのだが、そうでないと断定した理由としては。
「あれ？　あれ？　入れないよ、これ」
「ってかヘイル、不用意に近づくなって」
その穴をくぐろうとしたヘイルが、気味悪そうな声を上げる。その首根っこをリゼルが掴み、穴から引きはがす。
「ってことは、遺跡ってやっぱりこれなのかなあ」
「間違いなくそうよ。魔法で封印されてる。でも、一体誰が見つけたんだろう……、一般人がこれを遺跡だって断定するのは難しいと思うけど」
「でも、俺が噂を聞いたときには既に、遺跡だって。でも、入れないんじゃしょうがないな」
「……私、これ、解けそう」
入口を丹念に調べていたティラが、ぼそりと呟く。
「え、マジで？　ねーちゃんって凄いのな」
「どうしよう、兄さん」
気楽なヘイルの声を押しのけて、珍しくティラがリゼルに判断を仰ぐ。

「連盟が来る前に勝手に弄るのはよくないと思う。でも、嫌な予感がするの。あの子……ユリス？　……きっと、私より強い力を持ってる。この遺跡を連盟がマークする前に、ユリスが封印を解いてしまったら……、それで、ここにあるのがよくないものだったら……」

――禁忌の魔法を、魔王が手にして世界を滅ぼす前に。

彼が口にしたのは子供だましのおとぎ話のように聞こえたけれど。何故かそれが、それだけで済まないような嫌な予感が頭を離れない。そして、リゼルが神妙な顔をしたところを見ると、そう考えているのはティラだけではないようだった。

「……行こう。先に手に入れて、事情を話して陸連に保護を求めれば、悪いようにはされないだろ」

兄の言葉に、ティラは頷くと、入口の見えない障壁に手を当てた。

その遺跡は入口こそただのほら穴だったが、そこから真っ直ぐに続いている下りの階段も周囲の壁も、土でできたものではなかった。支えにした壁の感触は冷たく、足音はかつんかつんと篭った音を立てて内部にこだましている。そして入口の光が遠くなっても、どういうわけか遺跡の中は仄明るかった。最初は一列でしか通れないほど狭かったので、ヘイルを挟むようにしてリゼルが先頭となって進んでいたのだが、じきにに通路も広く、立派なものになっていく。

「すごい……、この大陸には、まだこんな遺跡が残ってるのね」

「え、ねーちゃん達って別の大陸から来たの？」

思わず呟いたティラの声を聞きつけて、ヘイルが驚いたような声をあげる。遺跡に呆けていたティラだったが、問われて彼の方を見下ろした。

「ええ、そうよ」

「へえ、凄いな。随分遠くから来たんだ」

「私だってこんな遠くまで来るつもりなかったんだけどね。なにせ兄さんが奔放だから」

はあ、とティラが大きなため息をつくと、わざとらしい兄の咳払いが聞こえた。気まずいのだろう。だが、

「でもねーちゃんもなんだかんだでそれを追いかけるんだから、ブラコンだよな。メリルも泣き虫ですぐ怒るくせに、オレの後ばっかりついてくんだもん。妹って素直じゃないよね」

「な、なにを……！」

ヘイルが余計なことを言った瞬間、兄の後ろ姿がいきいきするのが見えてティラは焦った。顔が一気に火照り、否定しようにも言い返そうにもなかなかちゃんとした言葉にならない。どの道何を言おうにも既に遅く、兄はもう至福の笑顔でこちらを振り返っていた。

「そうなんだ！」

「ち、違……、私は、ただ兄さんを野放しにしとくと心配だから……」
やっと出た言い訳はやっぱり遅く、次の瞬間にはぎゅう、と抱きしめられる。
「とか言って、ほんとはやっぱりお兄ちゃんが好きなんだよね！？」
「馬鹿！　離して！」
力の限りもがいても、なかなか兄は離れてくれない。そんなことをやっている間に、少し離れたところからヘイルの歓声が聞こえてきた。
「おーい、いちゃついてる場合じゃないよ！　何か凄いよ！」
誰のせいよ、と言い返しそうになるが、子供にムキになっても仕方ない。それよりも先に行ってしまったヘイルを心配して、ティラは兄を無理やり引き剥がすと階段をかけおりた。
「わぁ……！」
そして、すぐにヘイルが言っていた「凄い」の意味を知る。
階段が終わると、そこにはホールのような広い空間と、細かい細工の施された荘厳な祭壇があった。近寄ってみてみるとますます圧巻で、ティラはともかく、リゼルが背伸びして手を伸ばしても、祭壇の上には手が届かない。ティラがリゼルに肩車をしてもらい、ようやく祭壇に手が届くといった具合だった。
「……本？」
掴んだそれを目の前までおろしてみて、ティラが呟く。汚れひとつない真っ白な表紙の分厚い本は、とくに本以上の何にも見えない。だがティラがその最初のページをめくろうとすると、兄の鋭い声が飛んだ。
「ティラ、降りて！」
その声が差し迫っていたので、慌てて本を抱え、身をかがめた兄の肩から飛び降りる。リゼルが刀を抜き放ったのがそれとほぼ同時なら、振り返る兄の刀に何かが飛びついたのもほとんど時間差はなかった。

「な、なんだあれ……！」
震える声を上げ、ヘイルが尻もちをつく。その頃になってようやく、ティラも状況がつかめてきた。
唸り声をあげる黒い獣が、リゼルの刀に喰いついている――いや、刀ではなく兄を喰らおうとしているのだろう。リゼルはいちはやくその気配に気づいて、それを阻止したのだった。だが、獣に諦める様子はなく、刀ごと兄を喰おうとしている。
「兄さん！！」
「ヘイルを連れてここから離れろ！」
「でも……、」
兄の手も刀もぎしぎしと震えている。尋常ではない力の均衡があることが傍目にも解った。リゼルが優勢にはとても見えない。
「……合成獣（キメラ）……？」
拮抗しながらリゼルが唸る。全身が黒いその獣は、見たこともない獣だった。光のひとつもない瞳には生気もない。

『タ……チ……サ……レ……』

「！？」
唸り声が、突如意味をある言葉を成す。大きな顎はまだ刀に喰らいついたままで、獣が喋ったというよりは、直接頭に響くような不思議な声だった。それによって、ティラの記憶が結びつく。
「違う、多分守護者だわ。おばあさまから聞いたことがある。何かを祭った遺跡には、魔法でできた守護者がいるって」
「守護者かなんか知らないけど……！　母上の刀に傷でもつけたら殺されるっつうの！」
渾身の力で刀を返し、それと同時に獣の腹を蹴り飛ばす。それでようやく獣が刀から外れ、リゼルは大きく肩で息をついた。だが、獣の唸り声と不思議な声は依然として続いており、まだ終わってないことを示している。ティラとヘイルを後ろに庇い、リゼルは再び

刀を構えた――が。

『高き天に住まいし太陽の王よ。我が魂を供物に、その力を我が前に示せ！』

突如として巻き起こった激しい光が、黒い獣をあっという間に飲み込んで灼きつくす。三人ともがそれを唖然として見守るしかなかったが、その激しい光に見覚えのあることに気付けば、誰もが状況は悪化したのだということにも気付くことになった。

「……ユリス」

ティラが固い声を落とす。

「やァ、正義の味方ご一行サマ。封印解除御苦労さま」

黒衣の少年が、まだうっすらと光のまとわりつく手を下ろす。

「ささやかなお礼に、守護者は魔王が倒してあげたよぉ」

「――どういうこと？　まさか私に封印を解かせたの？　どうして自分で解かないのよ」

ユリスの言葉に、ティラが身を乗り出して叫ぶ。それを受けてユリスはくっと笑った。

「遺跡を引きずりだしたら、どうも嫌われたようで、入口でシャットアウトされちゃったんだ。それにキミに簡単に解ける封印でも、ボクには少し難しい。魔法の使い方が違うから」

「どういう……こと？」

「キミには知る必要のないこと」

ユリスの言葉の意味を理解できないティラは、同じ言葉を重ねるしかない。そんなティラの疑問を突っぱねて、ユリスはおろした手をもう一度上げた。

「そんなわけで、その本。渡して貰えるかな」

「この本は、なんなの？」

「それもキミが知る必要のないこと。できればボクは穏便に済ませたいけど、嫌だというなら戦うよ？」

ボクにはそれが必要だから。
歌うように囁きながら、ユリスはもう片方の手も持ち上げ、その両手が複雑な印を結び始める。
「――ティラ、俺がなんとか時間を稼ぐ。ヘイルを連れてここから出るんだ。その本、俺に渡して」
刀を握り直し、リゼルが囁く。だがティラは首を横に振った。
「いくら兄さんでも無理よ！　あんな魔法、相手にできるわけないじゃない！」
「あれ、俺そんなに頼りない――」
「ふざけないで、絶対嫌！！」
「……あいつは、渡しても穏便に済ます気なんてないよ」
茶化してみせたリゼルの顔が、一瞬後には見たこともないほど真剣な表情に変わっている。ユリスの、どこか残忍さの浮かぶ愉しそうな笑顔よりも、そのことの方が背筋を凍らせてティラの動きを止めた。
だが、そちらに気を取られている間に、兄から庇うように抱えた本は姿を消していた。
「……ヘイル！？」
「サンキュ」
誰がそれを取ったのか、気付いて咎めるような声を上げたときには、既にヘイルはそれを兄に渡してしまっている。だが、ティラが何かを言う前にヘイルがティラの手を引き、それに合わせるようにリゼルが反対側に跳んだ。その境界を作るように、激しい光が間を貫いた。
「ヘイル、どうして……！」
「ごめん、だってオレ、にーちゃんの気持ちわかるから……！　妹を危ない目に合わせるのなんて嫌なんだよ！　だから逃げよう！」
「そんなの、ずるい……！　じゃ、妹の気持ちはどうなるの！」
「そうだよね。きょうだいは、共にあるものだ。一人だけ助かろうなんて、よくないよ」

すぐ間近で起こった冷たい声に息をのむ暇もなく、冷たい手に首を掴まれティラは身動きが取れなくなった。
「ねーちゃん！」
「ティラ！！」
ヘイルの悲鳴にリゼルが顔色を変える。だが彼の姿をとらえたときには既に、ユリスはティラをとらえていた。それを見て、リゼルがユリスに向けて白い本を投げつける。
「お前が欲しいのはそれだろ！　ティラに触るな！！」
「――残念。ボクが欲しいのは、りょうほう」
リゼルを牽制しながら、またユリスがくくっと笑い声を立てる。思わぬ言葉にリゼルとティラが息を飲むのに構わず、ユリスは投げつけられた本を拾い上げた。だが。
「……あちゃー。でもこれ、フェイクだ。残念」
ばらばらと片手で本を繰った瞬間、ユリスの表情から残忍なものが消える。そして、同時に表情も消えた。突然ユリスの様子が一変して、リゼルもヘイルも、ティラさえも戸惑いながら彼を注視する。
「――マリス？」
怪訝な眼差しを一身に浴びながらも、やはりユリスはそれに気付いた様子さえなかった。ただ、名前のような言葉を口にして、ユリスの手がティラ首から離れる。そこでようやく彼に表情が戻った。
「用事ができた。また今度にする」
意味がわからず唖然とする一同を見て、ユリスが愉しそうにくつくつ笑う。
「やっぱり、きょうだいは離れるべきじゃないよね。今度は一緒に遊びにくるヨ」
そんな言葉だけを残し、唐突にユリスの姿は光に掻き消えたのだった。

兄妹と禁忌の魔法　8

ヘイルを家に送り届けた頃には空はもう白み始めていたが、家のドアを開けるとヘイルの母が仁王立ちで待ちかまえていた。華奢で物静かな印象の女性だったのに、別人かと思うほどの形相でこちらを睨みつけてくる彼女は、リゼルやティラの母と同質のオーラを背後に立ち昇らせていて、二人も思わず直立不動で立ちすくんだ。

「今、何時だと思っているの？」

静かにそんな風に切り出した彼女に、ヘイルが生唾を飲んだのが隣にいるリゼルらにも聞こえる。黙って成り行きを見守るしかないリゼル達の目の前で、間もなくその静寂はヘイルが尻を叩かれる音へと変わった。

「あなたって子は心配ばかりかけて！」

「ご、ごめんなさいいい痛い！」

それは、ごく普通の家族のやり取りに見えた。温かくもあり、微笑ましくもある一方で。

「……俺もあれくらい怒られるのかな」

「あれくらいで済めばいいわね」

他人事ではない兄妹としては、それ以上に恐ろしい。

「あなたたちも。いくら二人で旅してるからって、まだ子どもなんだから。魔物が異常発生してるなんて話もあるんだし、こんな時間に出歩いては駄目よ？」

『ごめんなさい！』

その瞬間に狙いすましたかのように切り込んでくるヘイルの母に、反射的に二人は声をハモらせると頭を下げた。その後で、おずおずとリゼルが頭を上げる。

「あの、俺達もう行きます」

だがそう言うと、途端ヘイルの母は表情を和らげ、いつもの温和な顔に戻る。

「……誤解しないでね。心配しただけで、怒っているのではないのよ。あなたたちにはとても感謝してるの」
「解っています。母に会いたくなりましたから」
苦笑というより、どこか自嘲の混じる笑みを浮かべて、だがリゼルは前言を翻しはしなかった。そして少しの逡巡の後笑顔を消すと、彼は手にしていたものを彼女の目の前へと差し出した。
「夜明けにも、大陸連盟がここに来ると思います。そうしたらこの本を渡して下さい。……俺はあまり連盟と顔を合わせたくないんで、彼らが来る前にここを発ちます」
「え、ええ……分かったけれど」
突然大人びた表情をしたリゼルに気圧されて、ヘイルの母が本を受け取る。汚れひとつない、真っ白な本の表紙を手の平で撫でながら、少し怪訝な顔で彼女はリゼルとティラを改めて見た。
「貴方達は、何者なの？」
「正義の味方です」
大人びた表情は既になく、あどけなさが残る笑顔でリゼルがにっこりと即答する。ヘイルもヘイルの母も唖然としたが、兄妹が踵を返すのを見てヘイルははっと我に返るとリゼルの腕を掴んで止めた。
「ま、待ってにーちゃん。オレも、オレも正義の味方になりたい！」
突然にそんなことを言われ、リゼルは立ち去りかけた足を止めるとヘイルの必死の表情を見下ろした。
「……正義の味方なんて、いないんじゃなかったの？」
悪戯っぽい声を上げながらも、見下ろしてくるリゼルの笑みは優しい。それにどこかほっとしながら、ヘイルは懸命に言葉を繋いだ。
「ううん、にーちゃん達は正義の味方だったよ。母さんを治してくれたし、働いてお金を稼ぐ方法も教えてくれたし、オレを守ってくれた。それににーちゃんは強い。オレも強くなりたい、にーちゃんみたいな正義の味方になりたい！」
最初に会ったときのようなどこか捻くれた目も言葉もなく、真っ直ぐ熱い瞳でそう訴える少年の目線までリゼルは腰を落とすと、口

元に手をかざして内緒話をするように声を潜めた。
「よし。じゃあ教えてあげるよ。正義の味方になる方法」
途端にヘイルがぱっと顔を輝かせる。
「ホント！？　そんなのあんの！？　それやったら、強くなれるの！？」
「別に強くなくたって、正義の味方にはなれるよ」
だが勢い込んで尋ねてくるヘイルに、リゼルはそっと首を横に振った。そして右手を持ち上げると軽く拳を握り、それをヘイルの胸に押し当てる。
「ここにある思いに、嘘つかずに真っ直ぐに向き合うんだよ。少なくとも俺はそうしてる」
「……？　正しいことをするのが正義の味方だろ？」
「いつも正しいものなんて、ないんだ」
意味がわからないというように問いかけてくるヘイルに、リゼルは笑顔のままで答える。
「いつも正しくて優しいものなんてないんだ。勿論、俺だって、俺の言葉だって。それを正しいかそうでないか、判断するのはヘイル自身で、決めたらそれに従ってまっすぐに信念を貫くんだ。自分の心を誤らないように」
「……、よくわからない」
「大丈夫、ヘイルはそのままでいれば、俺より強い正義の味方になれるよ」
ヘイルの胸から手を離し、拳を開くと、リゼルはヘイルの頭をくしゃくしゃと撫でながら立ち上がった。
「それじゃ、元気で」
そしてそれだけ言って手を振る。今度こそ踵を返した彼の後を、ティラがぺこりと頭を下げて小走りに追いかけて行く。
「……変わった兄妹（ひとたち）ね」
じっとその後ろ姿を見守る息子の、ほんの少しだけ大人びた眼差しに微笑みながら、母はそっと息子の頭を撫でた。

親子の見つめる先で、今まさに夜が明け、朝日が顔を覗かせていた。

兄妹と禁忌の魔法　8（後書き）

兄妹と禁忌の魔法・完　次章へ続く★

兄妹と銀紫の魔女　1

軽快な祭囃子の音に合わせて、すれ違う誰の足取りも軽い。
街並みは綺麗に彩られ、道に沿ってずらりと市場のように店が並び、見たこともない珍しい装飾具や、子どもの目を引くような鮮やかな菓子を売り出している。
「こっちの地方のお祭りって初めて見たけど、綺麗ね、兄さん」
普段はどちらかといえばクールなティラだが、そんな浮き立った町の様子に、彼女も年相応の笑顔を浮かべていた。そしてはしゃいだ声で兄を振り返り――、
「ほうはへ」
返ってきた間の抜けた返事に、いつものげんなり表情へと逆戻りする。
いつの間にか、兄の両手にはいっぱいの菓子やら装飾具やらがあった。そして、林檎を飴で固めたような赤い棒付きの菓子や、白くてふわふわしたものをいっぱいに口に詰め込んでいる。うまくろれつが回ってないのはその所為だろう。
「兄さん……」
よくない気配を感じたのだろう。びくっと肩を跳ねさせながら兄が立ち止まり、ティラもまた立ち止まる。
おそらく、物珍しくてあちこちの店を覗き、そして店の人に勧められるまま買ったのだろう。まるで子供と一緒だ。
「なんでも言われるがままに買っちゃだめでしょ……？　大事な旅の路銀よ？」
「ひゃ……へふはひくへふい」
「何言ってるかわからないから、口の中のもの出して。……ううん、飲み込んで」
言うなり全部出そうとする兄を見て、ティラは眉間に皺を寄せると慌てて言葉を付け足した。兄は従順に出すのをやめ、口を両手で

おさえながらもごもごと懸命に頬を動かしている。リスか何かを彷彿とさせるその気の抜けるような兄の顔を見て、ティラは大きくため息をついた。

兄が子供じみてるのは今に始まったことではない。財布を持たせておいた自分が悪かった。

結局リゼルが全部を飲み下す前には、ティラはそんな結論を導き出していた――そんな平和な昼下がり。

平和ならそれで良いではないか。

辿りついた町では丁度祭りを催しており、知らぬ大陸での初めて見る祭りを、ティラだってわくわくと眺めていた。兄のはしゃぐ気持ちも解る。祭りは楽しむものだ。少しばかり兄が調子に乗ってはしゃいでも、いつものように暴れてトラブルに首を突っ込むのに比べたら可愛いものだ。

そうしてようやくティラの怒り顔が苦笑に変わったというところで。

唐突に喧騒が巻き起こる。

嫌な予感と共にティラが周囲を見回し、リゼルもまだ口をもぐもぐさせたままで何事かときょろきょろする。騒ぎの理由は、すぐに知れた。

ティラのすぐ隣を通り過ぎた少女が手にしていた赤い風船が彼女の手を離れて飛び立ち、咄嗟にティラがそれを取ろうと手を伸ばすがその手は空を掻き、その見上げた視線の先で、何人かの人が動いた。

「あれは――」

そして目を見開く。

周囲の人の視線を追えば、リゼルもすぐに屋根の上の大立ちまわりに気付いた。一人の女性が長い銀髪を翻して屋根から屋根の上を伝い逃げ、それを数人が追いまわしている。追いかけている者はいずれも同じ制服を纏い、同じ色のマントをたなびかせていた。だがリゼルの目に留まったのは、専ら追われている女性の方だ。

「待って、兄さん！」
すぐにも駆けだそうとする兄の意図を察するのは、妹にとって至極容易なことで、想像できるからこそ反射的に兄の服を掴んで止める。
「……どっちを助けるつもり？」
聞いてから、ずいぶんと間の抜けた質問をしたものだとすぐにティラは首を左右に振った。
追いかけているのがぱっと見全員男で、追われているのがぱっと見女性という時点で、女好きの兄の行動など他にあるだろうか。それだけではない。追われている女性には、ティラにもまた心当たりがあった。
「気持ちはわかるけど、落ち着いて兄さん。あの制服、大陸連盟よ。連盟に逆らう気？」
厳しい声で諭すと、さすがに兄の表情も神妙になる。まさか気付いてなかったのかとティラが呆れた顔をする前で、だがリゼルの表情は諦めてなかった。そして、大変間が良いのか悪いのか、手近な店が陳列していたお面をひったくる。
「ふぃら、おはねははっほいへ！」
言いたいことは大体察したが、まだ飲み込めていないらしい。
盛大にため息をつきながら、面で顔を隠して、軽やかなフットワークで屋根の上へ駆け昇って行く兄を見送り――
驚いている面屋の主人の前で、ため息をつきながらティラは財布を取り出した。

兄妹と銀紫の魔女　2

抜刀しながら一気に屋根の上に駆けのぼると、リゼルは迷わず女と連盟員達の間に割って入った。そして当然ながら、大陸連盟の制服を纏った男達に向かって刃を向ける。多勢に無勢も好かないが、女を追いまわすのはもっと気分が悪い。知り合いなら尚のことだ。

「君は……」

背後で聞こえた声が、知り合いかもしれないという可能性を確信へと変える。それでなくても、リゼルは一度会った美女は決して忘れない。美女アンテナもばっちり反応しまくっているから間違いない。だが、その声に答える前に、耳触りな男の声がそれを遮る。

「なんだお前は！」

そう問われれば、答はひとつだ。

「正義の味方だ！」

何故かため息は背後から聞こえてきた。だが連盟の男達が警戒して身構えるのを見て、リゼルもまた油断なく刀を構える。

「我々は大陸連盟だ。連盟法（フューラ・ロウ）に基づき、公務を執行している。邪魔をすれば――」

公務執行妨害になるのは知っている。なので連盟員の口上にもリゼルが怯むことはなかった。逆に怯んだのは彼らの方で、それは丁度、風がリゼルの束ねた銀髪を勢いよく巻き上げたときだった。

「銀髪……！」

“銀紫の魔女”が二人だと！？」

「おのれ、まやかしか！」

口ぐちにリゼルが理解できないようなことを叫び、そして次の瞬間には彼らは次々に印を切っていた。それが、魔法の発動の第一段階と知るリゼルは、だがそれを許さない。一気に間合いを詰め、刀の峰を胴に打ちこんで、次々に男達を昏倒させて行く。だがすんでのところで、最後の一人が放った炎が逆巻いてリゼルを飲み込み、

男はほっと口元を緩ませた。だが、
「油断大敵火がボーボー。って、それじゃ俺が油断したみたいだよね」
意味の解らない独り言と共に、炎が両断される。呆気に取られる間もなく、そこから飛び出してきたリゼルの「とう」という軽い掛け声と共に、最後の男も屋根から転げ落ちた。それを見届けて刀を鞘に仕舞うと、リゼルは満面の笑みでくるりと背後を振り返った。
「どうどう、俺の活躍見てた、惚れちゃったりしちゃったりしてないって、いないー！！」
そして、尻すぼみに悲痛になっていくリゼルの叫びが何もない空間に溶けて、風に浚われて行ったのだった。

■　□　■

「久しぶり、というほどでもないか。元気だったか、ティエラ？」
「はあ、まあ。兄の所為で胃の調子がイマイチですけど」
「ふふ、変わりないな」
屋根の上で意気消沈するリゼルを余所に、その下でティエラは追われていた女性とそんな会話を交わしていた。冷たく見える整った表情に、だが幾分かは友好的な薄い笑みを浮かべてそんなことを言う銀髪紫眼の美女は、やはり兄とも自分とも面識のある女性だった。
サーラという名の、旅のキメラハンター。知っていると言っても、その程度ではあったが。
以前、異常発生した合成獣（キメラ）を倒すのに、兄が力を貸した相手だ。
「どうして連盟に追われていたんですか？」
「……君の兄は、相変わらず滅茶苦茶だな。連盟に逆らったって良いことはないだろうに。まあ、うまく勘違いしてくれたようだから君達が追われるようなことはないだろうけど」
誰のせいだと言いかけて、ティラは押し黙った。どんな理由で追われていたにせよ、彼女の言うとおり兄が勝手に助けただけだ。八

つ当たりだと気付いて、落ち着く為に深呼吸する。彼女が悪い人物ではないことは解る。だが、前回トラブルに巻き込まれたことと、今回もトラブルの気配を持ってきたことに、ティラは彼女に対してあまり良い感情を持てなかった。

それを察してかそうでないかは不明だが、サーラは僅かに苦笑して話を戻した。

「追われているのは、私がギルドへの登録を拒否しているからだ。別に法を侵したわけじゃない」

「……精霊使い（エレメンター）の魔法ギルドへの所属義務は連盟（フューラ）法（ロウ）に明記されていますが」

「連盟員のような口ぶりだ。……ああ、そうか。君も精霊使い（エレメンター）だったな」

「別に、連盟の肩を持ちたいわけじゃありません。事実を言っただけです」

取りつくしまもないティラに、サーラはふっと苦笑を深くした。

「そう邪険にしなくとも、君たちを巻き込むつもりはないよ」

「邪険にしてませんし、それがあなたの本意じゃないのも知ってます。でも、兄さんは……」

どちらかといえば、サーラの方がリゼルを邪険にするに違いなかった。それでも、兄は勝手に首を突っ込むだろう。サーラが拒んでも、自分が止めても。それが見えているから、ティラのため息は止まらない。駆けつけてくる足音が、それを尚一層深いものへと変えた。

「サーラさん！！　お久しぶりです！！」

猛ダッシュで駆けつけてきたリゼルが両手を広げ、そのまま飛びついてくるのをサーラが無表情でひょいと避ける。派手な音を立てて脇のゴミ箱へ突っ込んでいく兄を見て、ティラがもう一度ため息をつくと、隣でサーラがついたそれと重なった。

「助けてくれた礼は一応言うけど頼んでない。君に付きまとわれるのも君の妹に恨まれるのも、正直ご免だ、リゼル」

こけて倒れたリゼルを腕組みして見下ろしながら、冷めた瞳でサーラが告げる。そのまま踵を返した彼女のマントの裾を、だがリゼルは未練がましくがしりと掴んだ。
「連れないですー。せめて夕飯くらい」
「し・つ・こ・い！」
無視して歩いていこうとするが、頑として手を離さないリゼルはそのままずるずると引きずられて行く。耐えかねて、振り向いたサーラが踏みつけんばかりの勢いで睨み叫ぶ。
こうなるとある意味痴話喧嘩にも見えてきて、どちらに加勢すべきか考えるのも馬鹿らしく。
丁度横にあった屋台で小さな林檎飴を買うと、ティラはそれを頬張ることでため息を堪えながら、他人の振りを決め込むことにしたのだった。

兄妹と銀紫の魔女　3

そんなこんなでひと悶着あった後、結局リゼルのすっぽんの如きしつこさに負けたサーラと「夕飯だけ」の条件で夕飯を食べて、だがその日は兄妹とサーラは同じ宿に部屋を取った。幾つも宿があるほど大きな町ではない、というのが理由の大部分だが、上機嫌の兄を見ていると何故だかむしょうに腹立たしくて、ティラは早々に布団に潜ったのだった。

ほどなくして規則正しい寝息が聞こえてくると、リゼルは妹が眠っているのを確認し、その金の髪を優しく撫でても起きないことを確認してから部屋を出た。

それから早足に廊下を歩き、幾つか扉を通り過ぎてから、目的の扉の前で数度ノックを繰りかえす。

「……どうして私の部屋を知っている」

「俺の美女アンテナって、結構精巧なの」

アホ毛を撫でつけながらへらっと笑うリゼルに、サーラは心底げんなりした顔を見せた。

「そんな顔しないでよ。だって今訪ねないと、サーラさん、夜の間に発つつもりだったでしょ？」

間延びした声と気抜けする笑顔の奥で、碧眼が鋭く光ったような気がして、サーラはふう、と息をついた。扉を閉めてしまおうかと思ったが、それを許してくれないような気配を無意識に感じて、仕方なく言葉を返す。

「何の用だ」

「どうして追われてたんですか？」

「昼間君の妹にも言ったが、ギルド登録を拒否しているから――」

「そっちじゃない」

今度こそ、リゼルの顔から笑みが消える。鋭く細まる形の良い青い瞳から逃れるようにサーラは視線を外すと、諦めて扉を開けたま

ま部屋の中へと引き返した。ついてくるリゼルの気配を背に感じながら、ベッドの端に腰を下ろす。
「陸連とやりあってる間中、殺気を感じた。サーラさんも気付いてたでしょ」
「関わらない方がいいと思うぞ。妹を危険に晒したいか？」
「もう関わってるかもしれないから、聞いてるんだ。少年のエレメンターがティラを狙ってる。そいつの気配と、昼間感じた気配は、違うけど凄く似てた」
　そんな風に返してきたリゼルに、サーラは再び彼に目を戻した。一応は遠慮しているのか、部屋には入ってきたが、リゼルは扉の前からは動かなかった。そこまでランプの灯は届ききらず、彼がどんな表情をしているかはよく見えない。だがそちらに目を向けたままで、サーラは座ったままベッドに両手をついて体重を乗せた。ぎ、と古びたベッドが軋んで音を立てる。
「……なるほど？　それで君はそんなに躍起になってるわけだ。ティエラの為か」
「サーラさんを助けたいとも思ってるよ」
「口説いているつもりにしては、酷くついでな感じがするな」
「俺はそんな器用に嘘を言えないよ。……少なくとも、必要じゃないときはね」
　苦笑を含んだ声に、サーラも苦笑を滲ませた。
「本当に君はお人好しだ。道化かと思えばそうでもない」
　意味が解らなかったのだろう。返事に詰まったリゼルに、「いや、いい」と返してサーラは立ち上がった。普段は馬鹿以外の何者でもないくせに、刀を抜けば別人のように豹変したりする。阿呆面の中に、突如別人の表情を見せるような道化者をサーラはあまり好かなかったが、リゼルはそれとは少し違った。それにしてはあまりに素直だ。情報の為だけでもなければ、口説く為でもないのだと、あっさりと口にしてしまう。そして悪気なく、両方だという彼は、やはりただの馬鹿なのかもしれないが。

リゼルのすぐ前まで歩み寄ると、サーラは何の翳りもない碧眼を真っ直ぐ見上げた。
「……妹離れはできた？」
「できないとダメ？」
サーラの髪に手を入れると、彼女の頬にさっと朱が差す。
「年上をからかうな」
「先にからかったのはサーラさんでしょ」
憮然として踵を返したサーラの後を、リゼルがくすくすと笑いながら追う。それを睨みつけて黙らせた後、サーラは再びベッドに腰を下ろすと逡巡するように視線を巡らせた。
「……そのエレメンター、どんな魔法を使っていた？」
ややあってサーラが口にした問いは、だがリゼルを大いに困らせた。ティラと違い、リゼルは魔法を使えない。魔法学の基礎くらいはやったことがあるが、本当に基礎だ。それ以外の知識など持っていない。
「ティラならともかく、俺は魔法のことなんかさっぱりわからない」
「少しでも呪文（スペル）を覚えていないか？」
「うーん……、でもそういえば、ティラが変だって言ってたな。同じ光の魔法だけど、ティラも知らない呪文（スペル）だったって」
リゼルの答は要領を得ないように見えて、だがサーラは確信したように頷くと、頬に流れた髪を掬い、後ろに流した。手首に幾重かに嵌めているブレスレットがぶつかりあって、静まった部屋にシャランと響く。
「なら十中八九間違いない。最近私にちょっかいをかけている奴と同じだな。ただ、私を狙っているのは少女の精霊使い（エレメンター）だ」
「どうして同じって断言できる？」
「そのスペルは恐らく禁呪だ。ティエラが知らないというなら、それで恐らく間違いないだろう。まっとうな人間には知る必要のないことだ」

「禁呪？」
知らない単語をリゼルが反芻する。説明しかけて開いた口を、だがサーラは閉じると軽く首を振った。
「……君に説明しても仕方ないな。まあ、分かりやすくいえば、自分の生命を削って具現するような類の魔法だ」
「生命を削って？　……あんな子供が？」
穏やかでない言葉に、リゼルが眉を潜める。
「子供だからこそ命の価値がわからないこともあるさ。だが、バックに組織がある可能性もあるな。私も奴らのことはよくわからない」
すぐ感情的になるリゼルとは対照的に、サーラは淡々としていた。そしてそのまま、わからないで締めくくられ、リゼルが腑に落ちない声を上げる。
「じゃあどうしてサーラさんが狙われているのかは……」
「断言はできないが、狙われる心当たりを上げるとすれば、私が人とは違う力を持っていることだ」
「……違う力？　でも、じゃあ、ティラはなんで……」
「お前の妹も同じだぞ」
リゼルには、サーラが人と違うところなどわからない。確かに強い魔法は使うが、それが普通の精霊使い（エレメンター）とどう違うかなど、リゼルには察しようもなかった。サーラについてすらそうであるから、彼女が継いだ言葉にリゼルは心底驚きを隠せなかった。
「……なんだって？」
「お前の妹も、違う力を持っている。私にも理解不能な、未知数な力だ。お前には心当たりがないのか」
「俺は、ティラが産まれたときからずっと傍にいる。けど、ティラに人と違うところなんてない！　確かに、常人より遥かに可愛いし聡明だけど！」
大真面目に叫ぶリゼルに、サーラは思わず呆れて思考を中断してしまった。だがすぐに立ち直り、リゼルを無視して宙をにらむ。

前回、ティラが力の片鱗を見せたときには、確かにリゼルは気を失っていたが、それ以前に力を見せたことはリゼルの反応からして無いようだ。
「彼女の近親者で、強い力を持つ者はいるか？」
「父も祖父も強い光の術者だよ」
「妙だな。力は高い確率で遺伝する。お前は何故魔法が使えない？」
紫の瞳に射抜かれ、リゼルが言葉を失くす。
使えない振りでないことは、魔法に精通しているサーラからすれば一目瞭然だった。
「……まあ別に詮索したいわけじゃない。私も詮索されるのは好きじゃないからな」
だがサーラが探るような視線を向けてきたのは一瞬だった。すぐにそう言って目を逸らした彼女に、リゼルが肩をすくめて見せる。
「別に、隠すようなことでも謎でもなんでもないよ。俺とティラは父親が違う。それだけだ。そのことは多分ティラも知ってる」
あっさりと明かしたリゼルに、サーラは少し気まずそうな顔をした。
「詮索したいわけじゃないと言ったのに……」
「気にしないでよ。実のとこ、サーラさんに付きまとったのはその髪が気になったからっていうのもあるんだ。美人だからっていう方がでかいけど」
「お前はどこまで本気なのかが全くわからん。……髪だって？」
「実父が銀髪だったらしいから、もしかして関係あるかもしれないって思って。でもこっちやもっと向こうの大陸じゃそう珍しい色じゃないし、多分関係ないよね」
「ああ……。まあ、関係ないだろうな。私の両親は銀髪じゃないし。両親の親戚については両親も良く知らないらしいから、言い切れはしないが……」
「いいんだ。別に捜してるわけじゃないから」
すまなそうな顔をしたサーラに、リゼルがへらっといつもの気の

抜ける笑顔で笑って見せる。
「やっぱり、サーラさんって優しいね」
「っ、君はまた、すぐそういう陳腐なことを――」
だが、二人の会話はそこで途絶えた。弾かれたようにサーラが立ち上がり、リゼルが身構える。
全くの突然に二人の前に気配が生じたのは、それとほぼ同時だった。

兄妹と銀紫の魔女　4

「やァ、正義の味方。また会ったね」
楽しげにそんなことを言いながら、黒いローブの少年が邪気のない笑顔を浮かべる。だがリゼルは反対に笑顔を消すと、油断なく刀を構えたまま黙って彼を――ユリスを睨みつけた。
「こいつだよ、ティラを狙ってるのは」
「ふん……、私に絡んでくるのとは違うやつだが……」
二人の短い会話を聞いて、ユリスがさらに口角を釣り上げて笑う。そうすると、邪気がなかった笑みに少し陰湿なものが混じった。
「同じだヨ、“銀紫の魔女”？　キミのことは聞いている。彼女が狙っているものは、ボクも狙っている。でも、狙っているからと言って敵じゃないけどね」
「敵じゃないからといって友でもない。それでも敵じゃないというなら私に構わないで貰おうか」
「それは無理だ」
「なら敵だ」
すっぱりと断定するサーラに、ユリスは肩を竦めた。そんな隙だらけの様子を見せながらも、ユリスに油断はない。三者とも牽制し合いながら、だがまだ誰もしかけない。そんな間を縫って、ユリスから視線は外さずリゼルはサーラに気になっていたことを問いかけてみた。
「サーラさん、“銀紫の魔女”って？」
「連盟が勝手につけた私のコードネームだ。昼間やつらが君をそう呼んだのは、私が出した幻影か何かと勘違いしたんだろう。何せ私は魔女だと思われているし、君も銀髪だ」
「思われている――じゃなくて、実際魔女じゃないの？　あんたの魔法は通常の精霊魔法の定義も使わず、禁呪でもない。明らかに普通じゃないよ？」

リゼルとサーラの問答にユリスが口を挟むと、サーラはうざったそうな表情をそのまま表面に出して、長い銀髪を後ろに流した。
「私から言わせれば、禁呪を使って人を襲う方がよほど普通じゃない」
「あれ、あんたも正義の味方サマなわけ？　ていうか、正義の味方くんと知り合いだったんだ」
「知ってはいるから知り合いだろうが、一緒にするな。不本意だ。私は正義なんて胡散臭い言葉は信用しない。そして、それと同じくらいお前が気に入らない。それだけだ」
他愛ない会話のやり取りの終幕を告げるように、サーラが片手を突き出す。静かに彼女に力が集うのが見え、ユリスは身構えると目を細めた。
「あっそ。でもボクが用があるのはあんたじゃないんだ。正義の味方くんの方」
呼ばれ、不穏な空気にリゼルが息をのんだのと時を同じくして、派手な音と共に窓硝子が破られる。リゼルとサーラがそちらに視線を向け――、そしてサーラが動きを止めたのは、そのとき現れた人物にでも、起きた事象にでもない。すぐ真横で膨れ上がる、かつて感じたことがないほど冷たく突き刺さるような殺気にだった。
「リゼル――」
サーラの引き攣った声を消すように、ユリスのたのしげな笑い声が響く。それを受けて、窓を破って現れた人物もまた、ふわりと宙に浮きながら妖艶な笑みを模った。その腕の中で、寝間着姿のティラがぐったりとしている。
「こんばんは、銀紫の魔女。それから、初めまして正義の味方さん。で、魔女さん。いつもと用件は同じなんだけど、一緒に来て欲しいのよ。正義の味方さんも、彼女を説得してくれないかしら。あたしたちと一緒に来るように」
髪と目の色を除けば、彼女はユリスとよく似た面差しをしていた。歳もまたユリスと同じくらいであろう、まだほんの少女だ。同じ型

で色違いの白いローブから、濡れたような黒髪が零れている。ローブの下から覗く瞳もまた、黒かった。
「魔女さんを捕まえて差し出してくれるなら、妹さんは返してあげる。嫌なら、このままあなたの妹さんを連れていくわ。選ばせてあげる、どっちがいい？」
にこにことそう告げる少女を、サーラは汚いものでも見るような目で睨みつけた。
「馬鹿なことを――」
「――ふざけるな」
サーラの声は、またも途中で掻き消された。ここにきて、ようやくユリスも少女も笑みを消した。
「ティラに何かしようとしてみろ。その瞬間殺してやる」
リゼルの冷たい殺気に触れ、それでも少女が何かを言おうと唇を開きかけた瞬間、ひゅ、と小さく風が巻き起こった。何が起きたのか少女が理解する前に、黒髪が数本宙を舞っていた。
「言っただろ。口でも手でも少しでも動けば、次は殺す」
「マリス！」
「ユリス、お前も、次に動いたらこの子を殺すよ。いいの？」
冷たい殺気を放ったまま、リゼルの刀の先が動き、ユリスがマリスと呼んだ少女の喉元にピタリと当たる。
「ティラを置いて、とっとと消えろ」
「……できるの？　正義の味方さん」
ぴくりとも表情を動かさないままのリゼルに、冷や汗を流しながらもマリスは唇を動かした。僅かに刀が喉元に食い込んだが、それ以上は動かない。その事実に、勝ち誇ったようにマリスの顔に笑みが戻った。
「できないわよね、正義の味方さんには。こんな小さな女の子を殺すなんて」
だが、次の瞬間、マリスの笑顔は歪んだ。爆発するようなリゼルの殺気に、瞬間死を覚悟する。サーラが反応できないようなコンマ

数秒の歪みにマリスの悲鳴が吸いこまれ、ユリスが走り、そしてリゼルの刀に力が篭る。どれが一番、何かを成すのが早かったといえば――

「やめて、兄さん」

マリスの喉を串刺しにしかけたリゼルの刀が、その一言で動きを止める。つ、とマリスの喉から赤い筋が伝うが、だがそれだけだった。断末魔を飲み込んだマリスの腕の中で、気を取り戻したティラが、殺気にも見たこともない兄の表情にも怯むことなく、きっとリゼルを睨みつける。

「そんなこと、しないで」

「ティラ――」

その瞬間、嘘のようにリゼルから殺気が消えた。だが、場はまだおさまらない。

『高き天に住まいし太陽の王よ。我が魂を供物に、その力を我が前に示せ！』

悲鳴にも近いユリスの声に応じて、兄妹の間を光が裂く。それと同時にユリスが走るが、光は一瞬で消えた。

『我が御名において命ず！』

サーラの声が光を掻き消し、そしてマリスが小さく悲鳴を上げる。腕にまきつく炎から逃れるようにマリスがティラを離し、その体をリゼルが受け止める。

「退こう、マリス！」

「でも――」

悔しげなマリスの声には応じず、ユリスは無理やりマリスの腕を掴むと何事か呪文を呟いた。その直後、二人の姿は闇夜へと消えていた。

安堵の息を落としてサーラがそれを見届け、それから兄妹の方を振り返る。
「怪我はないか、ティエラ――」
だが、三度サーラの声は消えた。三度目、それを成したのは、ぱしんというなんとも軽い音だった。頬をおさえて目を見開くリゼルを振り返りもせず、部屋を飛び出したティラが扉を力任せに閉める音が、虚しく部屋の中に響き渡った。

部屋の中にぐしぐしと響く情けない鳴き声に、サーラはついにため息を噛み殺せなくなった。盛大に息を吐ききってから立ち上がり、腰に両手をあてて部屋の隅に向かって三角座りをしているリゼルを見下ろす。

「鬱陶しい！！」

「うえええええんんん！！」

だが毒づいたのは逆効果のようで、ついにリゼルは声を上げて泣き出してしまった。いよいよ手を持て余し、サーラがうんざり顔をさらにうんざりさせて身をのけぞらせる。

「だいたい、らしくない。追いかけなくていいのか」

「だってぇ……凄く怒ってたんだもん」

「だからって放っておいたら逆効果だと思うが」

「でもぉ……ティラに嫌われたら俺生きていけないもん……」

鬱陶しいにもほどがある。

まだ大人とは呼べないとはいえ、いい歳をした男がこれほどみっともなくぐしぐしと泣くのを、サーラは初めて見た。そしてそれを可哀想だとか、もしくは可愛いと思えるほど、心が広くもないし母性に溢れてもいないのだということを、自覚した。それと同時に、ぶち、と何かの緒が切れた。

「とにかく鬱陶しいから出ていけ！　ここは私の部屋だ！」

「やだ、帰りたくない！　泊めて！」

「断る！！」

「お願いー！　何もしないから、多分！」

「死ね阿呆！」

足に縋ってくるリゼルを踏みつけながら、サーラが切れた声を上げる。魔法のひとつやふたつぶっ放そうかと本気で考え出した頃に、だがリゼルはようやく手を離した。

「……何で怒ってるのか、解らないんだ……」
ぼそりと呟いたリゼルの顔と声は、本当に途方に暮れた迷子の子供のようだった。かざしかけた手を下ろし、小突いていた爪先を下げて、ブレスレットを鳴らしながらサーラは腕を組んでそんなリゼルを見下ろした。
「君は、正義の味方じゃなかったのか？」
サーラが何を言いたいのか解らず、怪訝な表情でリゼルは彼女を見上げた。
「さっきのが、正義の味方のすることか？」
「……」
さっきの一連の出来事を思い出そうとしているのだろう。リゼルが俯き、黙りこむ。
「勘違いするなよ。私は正義なんていう陳腐な言葉は嫌いだ。……でもティエラは、君に正義の味方であって欲しいと思っているんじゃないか？　例え妹を護る為だとしても、簡単に他人の命を奪うような兄であって欲しくはないだろう」
はっとしたようにリゼルが顔を上げる。だがその目が意外そうなのに気付いて、サーラは目を逸らすと腕組みを解き、髪を払った。
「……君のことは苦手だが嫌いじゃない。だが中途半端に正義を語るような男なら、嫌いだ」
「ありがとう」
思わぬ謝辞に、サーラは逸らした目を思わずリゼルへと戻してしまった。泣き腫らして赤みの差した碧眼に、だが涙はもうない。それでも涙の後が残る顔は情けないものではあったが、それ以上に気になることとしては。
「何故そこで礼を言う？」
「励ましてくれたんでしょ？」
立ちあがりながらそんなことを言うリゼルに、思わずサーラは呆けたように口を開けて固まってしまった。
それから目を伏せ、やれやれというように首を振る。馬鹿にした

ような態度だったが、リゼルは苦みのない微笑を浮かべ、だがすぐにそれも消した。
「自分の中にある信じるものを、真っ直ぐ貫けるようになれって。母上は俺にそう言って剣を教えてくれた。それが俺にとっての正義なんだ」
「……君はシスコンなだけでなく、マザコンなのか？」
「え？　ま、まあ、ある意味コンプレックスではあるよ。未だに母上に一度も勝てたことないし」
「君の母親は化け物か……？」
リゼルはどうしようもない妹馬鹿ではあるが、腕だけは確かだということはサーラもよく知るところではある。キメラハンターを生業としているために歴戦の戦士は幾人か見てきたが、その中でも一等若いに関わらず、まったく遜色ない、いやそれ以上の戦いの腕をリゼルは持っていた。そのリゼルが敵わない相手など、サーラとしては敵味方に関わらず、正直関わり合いたくない。
しかも、化け物か、との問いかけに、迷わずリゼルは何回もこくこくと頷いた。そして心なしか青ざめて額の冷や汗を拭っている。
「化け物です」
「……まあ、その話はいい。とにかく、君には君の正義があって、それを貫く力がある。だったら簡単に我を忘れるんじゃない」
脱線しかけた話を戻し、サーラがそんなことを呟く。声や口調は冷たいが、紫の瞳は決して冷たくはなく、リゼルはもう一度微笑んだ。だが、根本的解決ができていないので、その笑みは少し困ったような色が混じる。
「うん……、でも、俺……、ティラより大事なものなんてないんだ。ティラがいなかったら何も意味がないよ……」
「……」
さっきの、途方に暮れた迷子のような顔と声に戻ったリゼルに、だがサーラにはそれを嘲笑することはできなかった。
「それは、解る。私にも大事なものはあるからな。でもとにかく、

今は戻ってティエラに謝るのが先決だと思うが」
「うん……」
「それから、ティエラは連盟に属しているのだから、連盟に事情を話して保護して貰うのが安全だろう。やつらは危険だ。ああいうのを何とかするのが連盟の仕事だろうからな」
「……うん」
「元気を出せ。へらへら笑っている方が君らしい」
ぽん、と軽く肩を叩かれて、リゼルは目を丸くした。そして、妙なものでも見るような目でサーラを見下ろす。何だ、と言いかけたサーラの声を遮って、リゼルは彼女の額に自分のそれを軽くぶつけた。
「熱でも出たの？」
「……」

パン、と。
その直後、先ほどよりも幾分か強烈な音が、再び部屋に響き渡った。

兄妹と銀紫の魔女　6

兄を引っ叩いた後、ティラは部屋まで走って帰ると、扉を閉めてベッドにもぐりこんだ。毛布を頭から被っても、寒いわけでもないのに体が震えた。普段アホ面しかしない兄は、たまに真剣な顔を見せたり、たまに切れたり怒ったりはするけれど、あんな顔は見たことなかった。

少女に刀を突き付けた兄からは、本気の殺気を感じた。だから本気で止めたけれど、そうでなければ多分、殺していただろう。

――殺して。

また、ぞくりと肌が粟立った。

そうしなければ、自分が傷つけられていたかもしれない。或いは死んだかもしれない。今は連れ去られるだけでも、ゆくゆくどうされるかなど解らない。ユリスと最初に対峙したときに覚えた死の恐怖は、今でもときに体を縛る。家にいた頃は縁のなかった命のやりとり。生きるか死ぬかの世界。戦乱の世ならともかく、ティラはそんなことを感じたことはなかった。でもそれはきっと、両親やリゼルにいつも守られていたから。縁がなかったのではない。ぬくぬくと温かい場所にいただけだ。

だから、兄を恐ろしいと感じるのは筋違いだ。――なのに、あの瞬間を思い出すと震えが止まらない。恐ろしくて仕方なかったのに、どうしてあんなに冷静でいられたのか、自分が解らないくらいに。

そうしてベッドの中に潜って震えながら、どれくらいの時間が経ったのだろうか。

「……ティラ」

ふいに聞こえた声に、ティラはベッドの中で硬直した。よく聞き慣れた声。恐らくは、記憶のない産まれたすぐ直後から、すぐ傍にあった声なのに。

「ティラ、起きてる？」

一瞬寝た振りをしようかと思ったが、何の解決にもならないことが見えすぎていて、止めた。まさか永遠に寝たふりをするわけにもいかないだろう。それに、あんなことのあとに何事もなく寝られるような性格じゃないことを、兄は誰より知っている筈だ。

重い体はまるで言うことを聞かなかったが、それでもティラは起き上がると、毛布から顔を出した。宵の口だった筈の外はもう白み始めているようで、部屋の中は薄明るくなりはじめている。その弱々しい光より輝く銀髪に目を細める。

「……寝てるわけないよね」

見透かしたような笑みを見せる兄に、ティラは泣きだしそうになるのをこらえた。もやもやしたよくわからない感情が胸につかえたが、少なくともそれが畏怖ではないことに自分でほっとする。

「……ごめんなさい……」

自分のものかと疑うくらい掠れた声が唇から零れ、半分はそれが本当に自分の声なのか疑いながらも、半分は素直に謝れたことにほっとしていた。

「叩いたりして」

「いいよ。俺が悪かったもん」

「兄さんは悪くなかった……」

悪いのは簡単に捕えられてしまった無力な自分だ。なのにリゼルは首を横に振った。

「悪いよ。ティラを泣かせた」

言われて初めて、ティラは自分が泣いていることに気付いた。どうりで視界がはっきりしないわけで、あわてて目元を拭っていると、リゼルがいつの間にか隣に腰を下ろしていて、そっと頭を抱きかかえられた。

「怖い思いさせてごめんね」

泣きやもうと思ったのに、優しい声に余計涙が溢れた。泣きやむことも拭うことも忘れて、頭を預ける。もう頭がうまく回らなかった。

「話があるんだ、ティラ」
なのに、改まってそんなことを言う兄の声が、止まった思考をまた狂わせる。もう何も考えず眠ってしまいたいのに、続く兄の言葉はそれを許してくれない。
「俺はこの件から手を引けない。あいつらはティラを狙っているし、サーラさんも狙われている。でも、ティラを危険な目には合わせたくないし、さっきみたいになるのも嫌だ。だから、ティラ。家に帰ろう？」
あれほど溢れた涙が、枯れてしまったように止まった。最後に流れた一筋が、ぽつりと膝の上に落ちる。
「……兄さんは？」
「俺も帰るよ、いずれは。……この件が終わったら、そろそろ帰ってもいい頃かもね」
「一緒じゃないと、いやだ……」
「一緒にいる為に、やることやってから帰るから。俺がティラに嘘ついたことある？」
兄の碧眼が優しく瞬く。真っ直ぐ見られて、ティラはしぶしぶと頭を横に振った。満足げにリゼルが微笑んで、負けたような気分になる。
「ティラに嘘はつかないよ。でもティラは嘘をついてる」
兄は決して目を逸らさない。結局ティラが目を逸らすことになって、いよいよティラは負けを認めた。
「父上や母上に黙って出てきたでしょ？」
悪戯を諭す、それはまさしく“兄”の声だった。全然似ていないのに、どこか父を思い出してしまうような、穏やかな声に、もはやティラには何を言い返すこともできなかった。全部兄が見透かしている通りだ。
黙ったまま見上げていると、ふとリゼルは自分の髪を結っていたリボンをほどき、こちらの髪をひと房掬って結びつけた。そうして穏やかなままの瞳でこちらを見て、まるで幼子をあやすような優し

い声を上げる。
「……陸連に話を通しておいた。彼らが家までちゃんと送ってくれるから。それまでまだ時間あるから、少し眠った方がいい。眠るまで傍にいる」
もう何を考えるのも疲れ果てていて、ただティラは慣れたぬくもりに身を委ね、子守唄のような兄の声を遠くで聞きながら目を閉じた。

兄妹と銀紫の魔女　7

東の空が白み始めた頃、ふいに背後に感じた気配にサーラは足を止めて振り返った。果たしてそこには想像通りの人物がいたのだが、その姿が想像とは少し異なっていて、仏頂面が少しだけ解ける。そしてその理由を、相手は正確に読みとったらしかった。

「ウザがられるかなと思って」

少し気まずそうに笑いながらそんなことを言う銀髪碧眼の少年は、だがいつものピンクのジャケットは着ていなかった。後ろで長い銀髪を束ねていたピンクのリボンもない。シンプルな旅服は黒で、男物だ。美貌はやはり目を引くが、今までほど浮いてはいないし、そういう格好をしていれば普通の少年に見える。

だがそうしている理由を先ほどの言葉と照らし合わせて考えてみれば、サーラの口からはため息が漏れた。

「ついてくる気か？」

「サーラさんに他に目的があるのは解ってる。邪魔はしない」

「……ティエラは？」

答える彼の声はいつになく真剣なものだったが、それには直接応じずに、サーラが口にしたのはまたも疑問だった。問いかけた後、泣くかもしれないと一瞬サーラは本気で思ったのだが、リゼルは少し寂しげに表情をゆがめただけだった。

「サーラさんに言われた通り、陸連に保護を要求したよ。ついでに、家に送ってもらうように頼んだ」

「お前はよく拘束されなかったな。あの精霊使い（エレメンター）達のことは話したんだろう」

「妙な奴らに狙われてるという程度にはね。俺は銀紫の魔女捕獲に協力すると言ったら割とあっさり解放してくれたよ」

「それで私を捕獲しにきたのか？」

「まさか」

リゼルが肩をすくめて見せる。そんな皮肉めいた仕草は別人のように見えた。
「ただの口実だよ。俺は――」
「でなければ私を餌にあいつらをおびき寄せて、ティエラの身の安全を図ろうという腹か？」
「……サーラさんから見れば、そうだろうと思う。でも、さっきも言ったけど邪魔はしないし、役に立つと思うよ」
リゼルが腰の刀に触れて、その刀が僅かに鳴く。その音も、覚悟を決めたような表情も、大人びた視線も。
そこにある全てが彼の本気を物語っているのに、何故かサーラが感じるのは、今まで以上の苛立ちだった。
妹にべったりで、馬鹿面で、すぐ泣いて、正義の味方を謳われるよりもだ。
「私も毒されたものだ」
ふ、ととサーラが失笑する。そうしたのは、苛立ちの理由にサーラ自身が気付いたからだが、その真意がわからないリゼルは怪訝な顔をした。その彼からはもう目を逸らして、髪を払って踵を返す。
「確かに嘘がうまくはない。君はそんな下手な駆け引きをするような人間じゃないだろう」
見ていないが、リゼルがはっと目を見開くのが見えたような気がした。彼とはそう長い付き合いでもないし、嫌いとまでは言わないが好きでもない。どちらかといえば苦手な人種だ。だが、憎めない。
それが彼という人物なのだろう。
「……ティラも、サーラさんも守りたいんだ。だから一緒に行かせて」
肩越しに彼を横目で見て、サーラは苦みのない笑みを浮かべた。
さっきよりずいぶんと言葉は陳腐だが、さっきより遥かに瞳に宿る光は強い。そのことに満足してしまう自分も大概甘くなったもの

だと思うが、悪い気はしないのもまた事実だった。
「好きにしろ」
一言だけ流して、歩き出すと、当然のように気配は後をついてきた。
「それから、もうひとつ頼みがあるんだ」
「なんだ」
「俺に魔法のことを教えて。あいつらと対抗するのに必要だと思うんだ。俺には、あいつらが使う魔法と普通の魔法の違いすらわからないから……」
「親切丁寧な説明はしないぞ」
サーラから零れる言葉はどこまでもぶっきらぼうだが、リゼルはそれでも笑った。他にも聞きたいことや確認しておきたいことはいくつかあったが、とりあえずその場はそれ以上の会話を打ち切り、歩き出す。

早足のサーラに少し遅れて、リゼルが後を追う。そして登り始めた朝日の光が、さらにゆっくりとその後を追っていた。

兄妹と銀紫の魔女　8

『高き天に住まいし――』

「やめなさい！」

紡がれかけたスペルをぴしゃり叩きつけるように掻き消す。その後で、黒髪黒目の少女は、金髪碧眼の少年をきっと強く睨みつけた。その色彩と表情の違いさえなければ、二人は鏡合わせのように良く似た面差しをしている。

「こんなかすり傷に命を削ってどうするの！」

ヒステリックに叫ぶ声に、おずおずと少年は印を切りかけた手を下ろす。

「でも、マリス……、まだ血が」

「だから何だというのよ！」

ぐい、と忌々しそうに、マリスは――少女は喉元の血を乱暴にこすった。白く小さな手が赤黒く汚れ、そのことにまたマリスが苛立ちを見せる。

「退くところじゃなかったわ。慎重なのは結構なことだけど、ユリス。慎重なのと臆病なのは違ってよ」

「……マリスが傷つくのは嫌なんだ」

拗ねたようにユリスが呟く。自分を慮ってのこととわかっても、マリスの苛立ちは依然として消えなかった。地団太を踏んで、年相応の少女のように純粋な苛立ちを周囲に振りまき続ける。といっても、夜明け前の路地裏には、自分と双子の弟以外誰がいるわけでもないが。

「甘いことを言わないで。傷ついても血を流しても、そんなことは些細なこと。この世界をあたしたちに跪かせるには小さな過程」

言い聞かせるように、強くマリスは言葉を噛みしめた。マリスの言葉の全てを受け入れ切れないユリスも、その言葉には同調するよ

うに、強く幼い表情を引き締める。
「ふざけた兄妹。まずはあいつらから跪かせましょう。それから」
銀紫の魔女も。
年頃の幼さを消し、そう言ってマリスが妖艶に笑って謳う。それを聞いて、ユリスの表情もまた、残忍な笑みを宿す。
そして、双つの小さな影は、暗がりからゆらりと揺らめいて消え去った。

■□■□■

それから、幾つ夜が明けたのか。
慣れた揺れにぼんやりと揺られながら、ティラは小さな窓から流れゆく景色を、見るともなしに眺めていた。
ひゅうひゅうと、胸の穴を風が抜けて行く。そのこともその理由も自覚していながら、だが何かをするような気力はまるでなかった。最近、同じような感覚を味わったときにそれでも動けたのは、だけどまた会えることが解っていたからだ。
必ず来てくれると信じていたから。
「……お兄ちゃん……」
そんな言葉は、喉の奥に引っかかった。
素直にそう呼んで後をついてまわれた、何も知らなかった幼い頃は幸せだった。そんな時間がずっと続くと、何の疑いもなかったから。
胸に過ぎるのはそんな過去のことばかりで、これからのことに何も結びつかない。らしくないとわかっていても、ただ連盟の馬車に揺られ、ぼんやり過去の思い出に浸るしかできていなかった。この数日間ずっとだ。
だが。
「間もなくヴァニスに差しかかります。少し休憩されますか？」
同席する連盟員がそんなことを聞いてきて、ティラははっと顔を

上げた。
はっとしたのは、声をかけられたからではない。これまでも食事や小休止、夜を越すのに何度か馬車は降りている。無視するわけにもいかないから、上の空で返事をしては、味のない食事や空虚な夜を過ごしてきたけれど。
「……もうそんなところまで戻ってきたのね」
ヘイルと見つけた遺跡もとっくに過ぎて、兄と歩んできた道を逆戻りして。
兄とヴァニスに辿りついた頃には、もっと強い自分を持っていた筈だった。命を危険に晒しても、曲げられない想いや信念が確かにあったのに。
なのに、今の自分はどうだろう。
ここに着いた頃の自分は、例え何があっても、兄の傍を離れたりしなかった筈だ。
戻ってこないことを疑ってとか、足手まといになることを厭ってとか、そんな葛藤は小さなことで――ついていったのは、もっとシンプルなただひとつの譲れない想いのためだ。
「一緒にいたかった。ううん、一緒にいたい」
トラブルづくめの旅でも、呆れてしまうくらい破天荒な兄でも、大好きなかけがえないたった一人の兄だから。
蘇った強い想いを噛みしめながら、ティラは休憩を受け入れる返事を返した。間もなく馬車が停まってステップを踏む。風を頬に感じながら外を見渡すと、真っ先にヴァニス城が目に飛び込んでくる。それを見上げ、ティラは兄との旅を思い出していた。そうして歩き出しながら、ティラはこの馬車に戻らないことを密かに誓うのだった――。

兄妹と銀紫の魔女　8（後書き）

兄妹と銀紫の魔女・完　次章へ続く★

兄妹と逆襲の双子　1

「お産まれになりました！　女の子ですよ」

扉が開く音と共に飛び込んできた声に、少年はまどろみから目を覚ました。眠った覚えはなかったのだが、時刻はとうに子供の活動時間を過ぎている。だが寝ぼけ眼をこすりながら顔を上げると、安堵をにじませた父の穏やか瞳と目が合い、睡魔に侵された思考が晴れていく。

大きな興奮と、少しの不安に誘われながら母がいる部屋に向かうと、口ぐちにかけられるおめでとうございますという祝辞を産声が裂いた。

そこにいたのは小さな小さな存在だった。

まだ5歳の少年の、小さな手よりもさらに小さな小さな手。壊れてしまいそうにひ弱なのに、泣きごえはその存在を力強く主張し続けている。その声は、母の囁きを掻き消しそうだったが、決して消えずにそれは少年の耳に届いて全身を満たした。

「お前の妹だ、リゼル。名は――」

■　□　■　□　■

「ティラァァァァ！！！」

「いい加減にしろこの変態シスコン！！！」

ドガァ、と派手な音と共に、今日もとある町の宿の一部屋が盛大に吹き飛んだ。

朝食を取るために冒険者がごったがえす食堂の隅で、リゼルはすすり泣いていた。だが今朝はついに「鬱陶しい」という怒号すら飛ばなくなって、そのせいですすり泣きが途絶えることもなかった。向かいに座っているにも関わらず、まるでこちらを空気かなにかのように完全無視したまま食事をするサーラに、耐えかねてリゼルが涙声を上げる。

「サーラさん～、無視しないで～」

懇願はあっさり無視されたが、リゼルはめげなかった。

「悪気はないんだよ～」

これにも返事は返ってこない。無言のままスープを啜るサーラに、だがリゼルはさらに言いつのる。

「これ以上部屋を壊されたら、俺弁済金で路銀が尽きちゃう」

そこで、ぶちっと何かが切れるような音がリゼルの言葉を途切らせた。――実際には聞こえる筈のない音だが、いつの間にか聞こえるようになる特技が身に着いたようだ。というのは、リゼルの気の所為ではないようで。

がんっ、と、今度はちゃんと耳で聞き取れる派手な音を立てて、サーラがスープの器をトレイに叩きつける。スープの中身が飛び散るほどの勢いで、熱、と小さな悲鳴とともにリゼルがのけぞった。当然だがそんなことなどお構いなしで、サーラが獣も逃げるほどの眼光をリゼルに叩きつけ、リゼルがまた小さく悲鳴を上げた。

「……これ以上部屋を壊されたくないのなら、毎夜人の布団にもぐりこんで妹の名前を叫ぶのはやめたらどうだ……？」

口調こそ静かだったが、そこには怒号を叩きつける以上の怒りが込められている。それを察することができなかったわけではないのだが。

「ええと……、じゃあ純粋な夜這いならいいと」

「そんなわけあるかあああ！！！」

茶化して誤魔化そうとしたのは、明らかなる判断ミスだった。ぶちぶちぶち、と数十本くらいまとめて何かがぶち切れた音（耳で聞こえない音）と共に、ついに爆発したサーラの怒号がリゼルの食事をまとめて弾き飛ばす。ひぃ、というリゼルの悲鳴に、周囲の悲鳴も重なった。普通、怒鳴り声だけで火花が起こったり食事をふっ飛ばしたりはしないが、サーラはそれくらいの魔法ならば印も呪文も必要としないようで、切れると無意識に魔法を使う傾向にあった。そんなわけで、もはや被害はリゼルだけにとどまらなくなっている。

「ご、ごめんなさい。本当にすみません。もうしません。……多分」

さすがに危険だと判断したリゼルが平謝りに出て、いったんサーラは怒りを鎮静させたのだが、多分、という言葉が聞こえた時点でぴくりと片眉を跳ね上げた。それに気付き、慌ててリゼルは弁解の言葉を連ねた。

「いや、ほんとにすみません。……寂しくて、つい。ティラとこんなに離れたことなかったから」

「自分で追い返したくせにか」

「そうしろって言ったのサーラさんじゃん」

「お前もついていってやればよかっただろう。いつ誰が私についてこいと言った？」

「……それはそうだけど」

確かに、ティラとの離別を選んだのは自分だ。ティラの了承すら得ず、連盟に彼女の保護と家に帰すことを依頼したのも自分だ。だけど、それを後悔はしていない。

「でもティラが狙われているのにじっとはしていられない。かといってティラを危険には巻き込みたくない。傍にいれば、俺はどんなことをしてもティラを守るけど、ティラがそれを望まないなら……こうするしかない」

伏し目がちに呟く声に力はなかったが、だが後悔の色もないそれに、サーラは小さく息を吐くとトレイを持って立ちあがった。それを追いかけても彼女は何も言わず、ひとまずほっとしたリゼルだっ

たが。

「また合成獣（キメラ）の異常発生だってよ」

「そういえば、最近ギルドも合成獣（キメラ）討伐の依頼が増えてきたな。キメラハンターのライセンスでも取るか」

「バーカ、お前じゃ無理――」

行き過ぎる途中のテーブルから聞こえてきた会話に、サーラが足を止める。彼女の後についていたリゼルもまた立ち止まることとなったのも必然なら、その会話が途絶えたのも必然だと言えただろう。彼らのテーブルの椅子を引き、サーラがそこに腰を据える。

「――その異常発生。どこで起こってるのか詳しく教えてくれるかしら」

きゅっとサーラが口角を上げると、たちまち周囲の冒険者が色めき立つ。サーラの美貌ならば、それを成すことは簡単だろう。だが合成獣（キメラ）の会話を交わしていた男達は、サーラの望む答えを返すことはなかった。ひゅう、と下品な口笛を吹き、サーラを舐めるように見つめ返す。

「それより俺達と遊ばないか、姉ちゃん」

下心丸出しの声に、リゼルが不快そうに眉を潜める――実際のところ、美女と見ればついていくリゼルも同類だとサーラがそれに気付けば突っ込んだかもしれないが。

「私の問いに答えてくれるなら、考えてあげる」

今のサーラには駆け引きの方が大事だった。表面上は不快さを押し殺した甘い声は、

「気になるなら後でギルドに行ってみなよ。詳しくは俺も知らねえんだ。それより――」

「ならお前に用はない。失せろ」

男の答を聞くと共に、一転氷点下まで冷めた。そのことに一瞬男はぽかんとしたが、馬鹿にされたと気付いた次の瞬間には、かっと

してサーラに掴みかかっていた。だがそれを許す彼女ではく、あっさりとそれを避けるとあまつさえテーブルにおいてあった水さしの中身を男にむかってぶち撒けた。そしてまたも男が唖然としているうちに、素早くリゼルの両手を取る。

「リゼル」

「え、はい」

驚いたようにこちらを見下ろすリゼルに、サーラはにこりと笑いかけて呟いた。

「あとは任せた」

一言だけ残し、彼女はくるりと踵を返す。そうして悠々と表を歩いていても、激怒した男が追いかけてくることはない。その代わり店の中では騒ぎが起こっているようだったが、それはもうサーラには関係のないことだった。店が視界から消えないうちにリゼルはこちらに追い付いてくる。勿論怪我もなければ息すら切れていないのを見て、ふむ、とサーラはひとつ頷いた。

「……鬱陶しいが、扱いを覚えれば役に立つ」

「なんの話？」

刀をジャケットの下に仕舞いながら疑問の声を上げるリゼルに、

「お前を捨てて行かない理由の話」

端的に言い捨てて、サーラはギルドへと足を向けるのだった。

兄妹と逆襲の双子　2

闇夜に、白刃が閃く。
夜を待って合成獣（キメラ）の発生地に向かったサーラの後を追い、リゼルもまた合成獣（キメラ）と戦っていた。
夜の戦いなど不利なことしかない。それなのに夜を待つサーラの行為は、普通の冒険者ならまずしないことではあるのだが、人目につくのを嫌うサーラはだからこそあえて夜を選ぶ。

『探索（スキャン）』

リゼルが刀を振るう隣で、サーラは手をかざして同じ呪文（スペル）を繰り返していた。合成獣（キメラ）を撃退する傍ら、そんなサーラにリゼルが声をかける。
「ねえ、サーラさん、その魔法ってなんなの？」
問いかけながらも、隙は作らない。勿論自分の身を守るだけでなく、時折サーラに跳びかかろうとするのを防ぐのも忘れない。リゼルの刀に触れて、合成獣（キメラ）達は次々と塵になって消えていく。そのため、サーラはほぼ無防備な状態で魔法に集中していたが、問われて一旦手を下ろした。
「なんなのっていうのは？」
「いや、俺が知ってる魔法の定義とだいぶ違う気がして……」
ふうん、とサーラの紫眼が面白そうに瞬く。その後でサーラはもう一度片手を持ち上げ、空に翳した。

『我が御名において命ず』

その手の平から迸った炎が、リゼルの刀を逃れた合成獣（キメラ）数匹を塵

へと返し、一旦猛攻が止む。だけどそれが一時凌ぎでしかないことはリゼルにとて解る。刀は抜いたままの彼に、サーラは短く告げた。
「少し場所を変える」
「あ、うん……」
サーラの言葉は問いとは関係ないことで、そのことに対しほんの僅か不満を滲ませながらもリゼルは頷いた。もちろん、それを見ずとも問いを素通りした自覚はあるから、移動しながらサーラは言葉を続けた。
「相変わらずいい腕だな。自分の作業に集中できて助かる」
「惚れた？」
「それはない」
ふざけた問いに冷めた目で即答し、だがため息をつきつつもサーラはリゼルを振り返った。めそめそと泣く様子が視界に入ってげんなりしながらも、だがさらに続いた彼女の言葉は、罵倒でも否定的なものでもなかった。
「お前が知っている魔法の定義を言ってみろ」
「へ？」
「問いに答えると言ったんだ。助かっているのは事実だから、礼代わりだ」
それが意外で、リゼルは泣くのをやめるとぽかんとした顔をサーラに向けた。その整った顔に涙の後はなかったから恐らくは嘘泣きだったのだろうが、間の抜けた声にサーラが答えると、リゼルはほんの少し笑った後、すぐにそれを消してうーんと首を捻った。
「ええと……、自己の魔力で精霊と意思の疎通を図り、印を切ることによって精霊を集め、呪文（スペル）によって具現化する？」
回答の途中で、合成獣（キメラ）がリゼルの背後から爪を閃かせる。振り返りもせずに、リゼルが抜いたままの刀でそれを迎撃して、塵が風に流れる。そんなことは歯牙にもかけず、サーラはリゼルから視線を外して踵を返し、再び歩き出した。
「教科書をそのまま読んでいるような答だ」

「だって俺は魔法を使えないもん。主観では答えようがないよ」
「いや、意外と勤勉だと思っただけだ」
「意外って……、俺成績は悪くなかったよ」
「それが意外なんだ。ただの阿呆かと思っていた」
「……」
サーラの唇がまた一言の呪文（スペル）を紡ぎ、合成獣（キメラ）を一匹塵に還す。ほめているのかけなしているのか解らないサーラの言葉に、リゼルは複雑な顔をした。だが魔法の光に照らし出されたサーラの表情が渋いのを見、やはりけなされているのだろうと唸りながら刀を振るった。見る間に合成獣（キメラ）は数を増やしていく。
「……今お前が言ったのは、精霊魔法の定義だな。厳密に言えば、契約による精霊魔法の定義になる」
「契約？」
「契約は、力関係が精霊と同等か、それ以下だ。精霊に希う形で、精霊の了承を得て魔法を具現する。これは精霊とシンクロさえ行えれば、印と呪文（スペル）の模倣だけで行える」
「ええと、サーラさん。ちょっと待……」
「だけど、術者の力が精霊を凌駕する場合、精霊は恐れて契約に応じない。その場合、契約でなく精霊を使役することになる。古代ではそちらの方が一般的だったが、現代では使役による魔法の行使は行われなくなった。というより行えなくなった。魔法の衰退の要因は、精霊の減少や古代と現代の魔力の性質が変わったなど幾つもの学説があるがな」
「あの……」
刀を振るう手に迷いはなく、息も乱れていないながら、だがリゼルはなんとも情けない顔をしていた。サーラの説明は端々にわからない言葉があり、しかも早口で、戦いの片手間になどとても理解できない。そんなことは彼女にもわかっている筈なのに、説明をし直す気配は一切なかった。
「なんらかの理由で契約でも使役でも魔法が使えない場合、もうひ

とつ方法がある。それが禁呪だ。自分の生命を精霊に対価として差し出すことで具現を行う。あの子供達の魔法はそれだ。そして私の魔法は使役によって行使されている」

一息に述べたあと、あった、と小さくサーラが呟く。それにリゼルが反応する前に、サーラは手を翳していた。

『汝、虚無の海に眠れ。物質消去（ライフデリート）』

翻したリゼルの刀が空を斬る。

サーラが何事か呪文を紡ぐと共に、合成獣（キメラ）の群れは嘘のように掻き消えていた。狐につままれたような表情で納刀するリゼルに、サーラは腰に手を当てて、説明を締めくくる一言を紡いだ。

「あと、今のは精霊魔法じゃない」

「すみません。全っ然解らないんですが」

「丁寧な説明はしないと言ってあったはずだ。成績は悪くないんだろう？」

「天才じゃなくて、秀才タイプなんだよね」

「だったら後は自分なりに解釈するんだな。……それより、リゼル――」

急に閑散としてしまった夜中の草原は、もう風の音とそれが草を撫でる音しか聞こえなくなっている。その中に響くサーラの透明な声が何を言いかけたのかが気になったが、それよりも無視できない異質な気配の方が強制的にリゼルを動かしていた。

「サーラさんっ！」

『高き天に住まいし太陽の王よ！　我が魂を供物に、その力を我が前に示せ！』

朗々と読み上げられる呪文（スペル）とリゼルの叫び声か重なる。反射的に

サーラが手を翳し、

『我が御名において命ず！』

そのサーラの前に飛び出したリゼルの目の前で、閃光が弾けた。

兄妹と逆襲の双子　3

物陰から顔をほんの少しだけ出し、注意深く周囲をきょろきょろと見回す。そうして、フードを目深に被り、走りだそうとして、慌ててやめる。路地裏にしゃがみこんで、ティラは大きく息を吐きだした。さっきの一瞬に跳ね上がった心臓が、まだどくどくと大きな音を立てている。

「……やっぱり、停車場はおさえられてるわよね。これからどうしよう」

大陸連盟に保護されて家路についていたティラは、だが連盟員の目を盗んで彼らの元から逃げ出していた。兄の元に戻りたい一心での咄嗟の行動だったが、未だに逃げ出した場所であるヴァニスから出られていない。乗合馬車に乗ろうと停車場の近くに身を潜めてみても、町のそこかしこに連盟員がうろうろしているため身動きが取れない。彼らにしてみても馬車に乗られてしまえば捜索が難航するだろうから、真っ先に乗合馬車の停車場を押さえるのは当然のことだった。

逃げ出したときは不意をつけたが、ここで捕まってしまえばもう彼らに油断はなくなる。脱出は難しいだろう。このチャンスを逃すわけにはいかない。

だとすれば。

ティラは俯いていた顔を上げると、屋根と屋根の間から覗くヴァニス城を仰ぎ見た。

乗合馬車に乗れなくても、方法はもうひとつある。城ならば、馬車を有しているだろう。

以前兄とヴァニスを訪れたときに巻き込まれた一件で、ティラはヴァニスの姫と面識があった。頼めば、馬車を出してくれるかもしれない。そうは思うのだが、そんな厚かましいことをためらいなく頼めるほどティラは図太い神経をしていなかったし、何より全ての

国家には大陸連盟への加盟義務がある。とくにヴァニスはまだ復興途中だ。連盟に逆らうだけの力はないだろうし、それによって招く被害も甚大だろう。
自分の我儘だけのために迷惑はかけられない、そう思い二の足を踏んでいた。だが、このままではそのうち暮れる。
路銀はほとんど兄が持っていて、ティラは小遣い程度しか持ち合わせがなかった。宿を取れば馬車に乗れなくなるし、そもそも宿も連盟に押さえられているかもしれない。いよいよ困り果て膝を抱えていると、ふとその上に影が落ちた。どきりとして、ばっと顔を上げたティラの瞳に、連盟の制服が写る。
「……ッ」
「ティエラ様ですね？」
弾かれたように、ばっとティラは立ちあがった。だが逃げようにも、連盟員の手は既にがっちりとこちらの腕を掴んでいる。
「お願い、放して。兄さんの所に戻りたいの」
「その貴方のお兄様から、貴方をお送りするように依頼されているのです」
「それはなかったことにして。貴方に迷惑はかけないから」
「そういうわけには参りません」
懸命にティラは訴えたが、連盟員からは無情な声が返ってきただけだった。ぐい、と腕を引かれる。このまま表に出て他の連盟員にも見つかれば、それで終わりだ。
「いやっ、放して！」
必死に踏ん張って振り払おうとするが、ティラの力では結果は見えている。一瞬魔法を使おうかとも思ったが、ここでこの連盟員を傷つければ、公務執行妨害どころか障害罪だ。そんなことになれば、家族に迷惑をかけてしまう。それはできない。
兄の元へ戻り、また一緒に旅をするのは、もう無理なのだろうか。ティラが諦めかけたそのときだった。
「……！？」

唐突に手が離れる。突然に帰ってきた自由に、ティラはバランスを崩して転びそうになったがどうにか耐える。何故、と訝るが、それを確認している暇はなかった。この好機を逃す手はない。そのまま走り出そうとすると、だがまたも手を掴まれた。

「待て」

放してという叫びは、その声が聞こえて喉の奥に止まった。振り払おうとするのもやめる。その声には聞き覚えがあった。

「あなたは――」

「しっ」

振り返り、声を上げかけたティラを制して、闖入者は片手でティラを抱え上げた。そのまま跳躍して屋根を越える。呪文（スペル）を詠む声が聞こえたが、すでにそれは遠い。

危機を脱したことを知り、ティラは安堵の息を吐くと、自分を抱えるその腕の主を見上げた。大剣を背負った、黒髪の青年。目があった一瞬に、彼は解るか解らないかくらいの薄い笑みを浮かべた。だがすぐにそれを消し、それから屋根伝いに大通りを二つ越し、細い道へと降り立った。それを待ちかねていたようにして声がかかる。

「久しぶりですわね、ティエラ」

そこで待ちかまえていた人物もまた、ティラのよく知った顔だった。

兄妹と逆襲の双子　4

「フリートさん、それにイリヤ……！」
抱えられていた手から解放されて地面に降りてから、ようやくティラは助けてくれた青年と、目の前に立つ少女の名を呼んだ。イリヤ＝グランヴァニスと、フリート・シルヴァス。それが彼女らの名で、彼女こそが先の一件で知り合った、ここヴァニスの姫だ。
「どうして……」
「町の視察ですわ。復興作業に当たっている方に声をかけているんですの。そうしたら貴方の声が聞こえたものですから」
腰を手に当てて、高飛車な喋り口調でそう言うイリヤには、別れたときの憔悴した様子はもうどこにもなかった。出会ったときのような元気を取り戻していたが、物腰はどこか柔らかいし口調にも嫌味がない。表情には、純粋に再会を喜ぶ笑顔があった。そして再会が嬉しいのはティラとて同じだ。だが、ティラには素直に笑えるだけの余裕がなかった。
「ありがとう。助かったわ」
とりあえず礼は述べたものの、あまり悠長にはしていられなかった。こんなところを連盟に見つかれば、ヴァニス国を巻き込むことになってしまう。それは、復興途中のヴァニスにとって迷惑極まりないだろう。
「ごめんなさい。会えたのは嬉しいんだけど、行かなくてはいけないの」
「水臭いですわね。お困りでしたら力を貸しますわよ？」
ティラは何も語らなかったが、状況と様子で察したのだろう、イリヤがそんなことを言ってくる。それは本当に有難い申し出だったが、それだけにやはり彼女らに迷惑はかけたくなかった。
「ありがとう、本当に嬉しい。でも、巻き込めないわ」
「あら、わたくしは既に無関係の貴方を巻き込んでいるんですのよ

？　気にすることなどないのではなくて？」
口に手を当て、ころころとイリヤが笑う。そんな言い様に、思わずティラもくすりと笑った。それを見て、イリヤも勝気な笑顔の中にどこか安堵に似たものを混じらせた。だが、あることに気付いてきょろきょろと周囲を見回す。
「そういえば、お兄様はどこですの？」
「……今は一緒じゃないの」
ようやく浮かんだティラの笑顔は、だが一瞬で影をひそめてしまった。一転悲痛な顔になってしまったティラを見て、イリヤとフリートが顔を見合わせる。それからイリヤも笑顔を消して、ティラの手を取った。
「事情を話して下さいまし、ティエラ。……わたくし貴方に恩返しがしたいと、あの日からずっと思っていたんですの」
同じ青い瞳に見つめられ、迷うティラを後押しするように力強い声をイリヤが上げる。
「きっと力になってみせますわ」
その声の温かさに、ティラの中で張り詰めていた何かが溶けていった。それが溢れ出るように、ティラの瞳から涙がいくつもこぼれる。
「……兄さんのところに、戻りたい」
「リゼルはどこにいるんですの？」
「わからない。別れてから随分時間が経ってしまったし……」
握り締めたイリヤの手の上にティラの涙が落ちる。そんな弱気なティラは、イリヤの知らない姿だった。そしてそんなティラの姿は、イリヤにかつての自分を彷彿とさせた。
「……わかりましたわ」
ほとんど事情など説明していないも同然なのに、イリヤは強い口調でそう言った。そして、ティラからフリートへと視線を移す。
「フリート」
「……は」

「ティエラを、お兄様の元に送り届けてあげなさい」
「はい」
迷わずフリートにそう命じたイリヤに、ティラは驚いて顔を上げた。
「駄目よ、イリヤ。私が連盟に追われていたの知っているでしょう？　兄さんが私の保護を連盟に依頼してるの」
「それが何だと言うんですの？」
「全ての国家は連盟への帰属義務があって――」
イリヤが強気なのは連盟と国家の関わりを知らないのだと思い、ティラが説明を始める。だがイリヤはその途中で、ぱん、と握っていたティラの手を叩いた。
「世間知らず扱いはやめて下さいませ。わたくしちゃんと勉強していますの。それくらい知ってますわ。でも相手が連盟でも神でも魔王でも関係ないの」
「イリヤ……」
目を細めて、イリヤが鋭い視線を向けてくる。でも決して怒っているわけではないことは、ティラにはちゃんと解っていた。ごめんなさい、と呟いたティラに、ふっとイリヤはやわらかな笑みを戻した。
「……わたくしはこの国を出られません。でもヴァニスの国境まで城の馬車を出すことはできますわ。それに乗ってここから脱出なさい。後はフリートが守ってくれますから」
「本当にいいの？　この国に迷惑がかかってしまうかもしれないのに？　それに私、何か狙われてるみたいだし……」
「要はバレないようにうまくやれば良いのですわ。シルヴァスもお母様も、ティエラを助けるためならきっと解ってくれます。事情はよくわからないけど、狙われているならば余計に護衛は必要でしょう？　フリートの腕はあなたも知っている筈。心配することは何もありませんわ」
なんでもないことのように言ってのけ、イリヤが笑う。言いなが

ら、イリヤはティラのリボンへと手を伸ばした。怪訝な顔をするティエラをよそにそれを解くと、イリヤはコートのポケットを探り、赤いリボンを取りだした。見覚えのあるそれに、あ、とティラが小さく声を上げる。それは、ティラがかつてイリヤに貸したリボンで、それをイリヤはティラの髪へと結びつけた。

「いつあなたに会っても返せるように、いつも持っていたんですのよ。……ああ、やっぱりそっちの方が似合いますわ。さあその悪趣味なリボンを、さっさとお兄様に叩き返してきなさいな」

晴れやかに笑うイリヤからリボンを渡され、彼女を見る。礼を言いたいのに、声が詰まって出なかった。ありったけの感謝を心の中で述べ、そしてティラは受け取ったピンクのリボンを、強く握り締めたのだった。

兄妹と逆襲の双子　5

閃光がおさまると同時にリゼルが崩れ落ち、サーラは舌打ちしながら手を下ろし、彼へと駆け寄った。
「リゼル！」
「動かないで銀紫の魔女。もちろん魔法もなしよ」
光が逆った方角とは逆の暗闇から、長い黒髪の少女が現れる――マリスだ。
詠唱の声はユリスのもので、彼ももう姿を見せていた。そして彼が放った光の魔法は、サーラが咄嗟に張ったシールドが完全に防いだ筈だった。にも関わらずリゼルがダメージを受けたのは、ユリスの魔法とは絶妙な時間差でマリスが放った魔法によるものだ。
ユリスの魔法を防ぐと同時にサーラもそれに気付いたが、その時には既に遅かった。だが――
「リゼル、お前は、気付いてたな？」
治癒のスペルを唱えかけ、しかしマリスに牽制されてサーラは手を下ろした。彼女を一瞥し、そして彼女に向けたのと同じような睨みを今度はリゼルへと向ける。暗くて負傷がどの程度なのかはわからないが、マリスの魔法をもろに受けたことは間違いない。禁呪の直撃を受ければ、まず軽傷では済まないだろう。
「さっきの魔法――まさか古代魔法かしら？　いよいよ面白いわ、あなた」
幼さに釣り合わない声色で、手を翳したままマリスが口を開く。それとは対照的に、全く面白くなさそうに、サーラはマリスの方を見た。
「さあ、あたし達と来なさい、銀紫の魔女。それでも抵抗するならお相手するわ」
「その間に正義の味方クンが死んじゃってもしらないけどね」
サーラはただ見ただけで口を開かず、再び声を上げたのはマリス

の方だった。その後にユリスが続き、二人同時に印を結び出す。それは明らかなる脅迫だったが、サーラはとくに怯む様子もなく、手を翳すこともなく、ただ冷たく二人を睨みつけた。
「……別にこいつがどうなろうと知ったことじゃない、というほど私も薄情じゃないが。彼の為に命をかける程の義理もないな」
「冷たいのね。正義の味方さん、貴方より早くあたしに気付いていたわ。避けようと思えば避けられたのに、あえて貴方の盾になったのよ？」
「頼んでない」
すっぱりとサーラが切り捨て、ユリスが小さく肩をすくめる。
「ていうか、別にボク達、キミの命が欲しいなんて言ってないよ。まぁ、絶対安全だとも言えないけどさ」
「なら、なんのために私やティエラを狙う？」
「あなた達の力が、あたし達の目的のために必要だからよ。……さあ、お喋りはお仕舞い」
サーラとユリスの会話に、マリスが終止符を打つ。それと時を同じくして、二人の手の動きが止まる。それはいつでも魔法を発動できることを意味していた。それが解らないサーラではない筈だから、マリスとユリスは笑みを浮かべた。絶対の勝利を確信して。
『どうする、銀紫の魔女？』
二人の声が重なり、ふぅ、とサーラはため息と共に髪を掻きあげた。
避けることはできるが、避ければ二人は容赦なくリゼルに魔法を撃ちこむだろう。印を切っている間に仕掛けようかとも考えたが、一人で禁呪使い二人を相手にするのは少々分が悪い。リゼルを庇おうとするなら尚困難だ――というか守り切って勝利する自信は正直なかった。ならば道は、従うか、道が拓けるまで時間稼ぎするか、どちらかだ。それは恐らく相手にもわかっている。
ふと、サーラは考えるのをやめると苦笑した。
「降参かしら？」

「いや。選択肢を二つに絞った自分を馬鹿にしただけだ」
マリスの声に、苦笑したまま答える。答えるというより、ほぼ独白だったから、彼女に声は届かなかっただろうが。
そう――何も選択肢は二つだけでない。避けて逃げれば一番早い。なのにその選択肢を最初に消してしまった自分が可笑しかった。ずっと一人だったから、誰かの為に自分の行動を変えたことがサーラにはなかった。
（……でもこいつはきっと、誰かの為にしか動いたことがないんだろうな）
今度の言葉は、本当に胸の中だけに止めておく。それからもうひとつだけため息をついて、サーラは手を翳した。
「……受け切れると思って？」
「まあ、とりあえずやってみようかと思って」
投げ遣りにマリスに返すと、ユリスがくすりと笑った。
「正義の味方クンみたいな口振り」
そして、膨大な力が、二人の禁呪使いへと流れ込んで行く。その力の大きさは予想以上だったが、一度決めた以上することは変わらない。だから怯むことも恐れることもなく、ただサーラも自分の魔法に集中する。
『高き天に住まいし太陽の王よ！　我が魂を供物に、その力を我が前に示せ！』
『冥界の深奥に住まう冥府の主よ！　我が魂を喰らいて出でよ！』
力の塊が解き放たれる。それに向けて、サーラは手を突き出した。
『我が御名において――』
唇から零れた呪文（スペル）は、しかし途中で途切れた。一瞬何が起こったのか理解できず呆けた顔で目を瞬かせる。だが理解した瞬間、出て

きたのは怒号だった。

「ッ、お前は――！　ずっと起きてたんだろう！」

「ご、誤解ですッ！　ちょっと、あの、血が足りなくてクラクラしてるのに首締めないで……！　マジで死ぬ！」

激怒したサーラに（けっこう本気で）首を絞められ、彼女を抱えたままリゼルが悲鳴を上げる。その頃には、一瞬前までいた場所で白と黒の閃光が嵐のように渦巻いている。距離をおいても肌を焦がすような強大な力に、ここにきてようやくサーラは身震いした。だが、

「ホントに今気がついたんだってば！　ってかマジ死ぬかと思ったんだけど、嫌な夢見てさ！　なんかティラが男と二人旅してて、不快アンテナがびょんびょんしまくるから、ホラ！」

「そのまま死んでろ変態シスコン！」

リゼルが耳元でそんなことを叫ぶので、思わずサーラは彼を張り飛ばした。

「マリスの魔法が直撃したのに、もう動けるだなんて――！」

そんな彼らの姿を見て、ユリスがひきつった叫びを上げる。マリスはとくに動きは見せなかったが、その表情に動揺は隠し切れていなかった。

二人の様子に気付き、張られた場所をさすりながらもリゼルが二人に向き直る。

「まあ、正義の味方は死なないものだからさ」

そんな風に茶化しながら、刀を構え直し、リゼルは不敵な笑みを浮かべたのだった。

『高き天に――』

「遅いよ」

咄嗟にユリスが叫ぶ頃には、もうリゼルが接近している。毒づきながら距離を取ろうとユリスが転がるが、速さではリゼルと勝負にならない。接近戦では勝敗は見えている。

「ユリス！」

「人より自分の心配をしたらどうだ」

駆けだそうとするマリスの前には、サーラが立ちはだかった。その手が翳されるのを見て、ぱっとマリスも印を切ろうとし、だがその手は止まる。

手を止めたのは、それが無駄であることが火を見るよりも明らかだったからだ。サーラは魔法の具現に印を使わない。

「禁呪の弱点だな。威力は普通の魔法を上回るが、具現の度に魂を捧げる儀式を必要とする」

「……」

その事実は、禁呪使いであるマリス自身が誰よりもよく解っているから、何も言い返さずに、切りかけの印を再開することもなしに、黙ってサーラを睨みつける。だが。

「分が悪いんじゃないか？」

「――そうかしら」

サーラが無表情のままそう言うと、マリスは睨みつけた瞳を緩めて、笑みを浮かべた。どう考えてもこちらの優勢は揺るがないのにと、サーラが怪訝そうに片眉を上げる。しかしマリスの余裕の表情は、はったりにも見えなかった。

微笑んだままマリスはサーラから視線を外し、そのあまりの無防

備さに、サーラもついそれを追う。そしてその先には、ユリスとリゼルの姿があった。どうにかユリスがリゼルの追随を逃れようとしているが、それも時間の問題に見える。マリスが何を言いたいのか解らず眉をひそめるサーラを見て、マリスがくすくすと笑いながら声を上げる。

「いくら正義の味方さんが丈夫でも。禁呪の直撃を食らっていつまでも動けるかしら？」

はっとサーラが目を見開く。

あまりにリゼルに緊張感がないせいか、それともその腕にだけは信頼を置いているせいか。そこまで気を回せずにいたが、言われてみれば、いつもよりも彼の動きは鈍かった。

――追い詰めるのは時間の問題。そうは言っても、あのリゼルが少年の精霊使い（エレメンター）相手にまだ片を付けれずにいるのは、考えてみればおかしな話だ。

「ッ」

だがそれについて、サーラがそれ以上考えることはできなかった。

反応できたのが奇跡的だと思う。合成獣（キメラ）とやりあってきた中で身に着いた、野生の勘にも近い何かが無意識に体を動かしていた。その刹那、喉元を何かがかすめて飛んで行く。あと少し反応が遅れていれば、喉笛を斬り裂かれていただろう――、舌打ちしながら喉を押さえて振り向くと、不敵に笑うマリスの手には数本のナイフが煌めいていた。

「禁呪に時間を食うのは百も承知よ。対策くらい考えるわ。――あなたはどうかしらね、銀紫の魔女？」

言い終わる頃には既に、ナイフは彼女の手を離れて舞っている。それに向けてサーラは手を翳したが、その向こうでマリスの手が印を切るのを見て、今度はサーラが動きを止めた。

ナイフをどうにかしようとすれば――物理障壁を張るにせよ、避けるにせよだ――、その間にマリスは禁呪を完成させる。それから禁呪に対する障壁を張るのは間に合わない。だが、その二つを避け

るのも、その二つに有効な強力な防御癖もしくは攻撃呪文を具現するのももう間に合わない。
だが背後に気配を感じて、サーラは咄嗟に具現する魔法を絞った。
直後、目の前でリゼルが全てのナイフを刀で弾き、彼の前でサーラの魔法が展開する。

『我が御名において命ず！　光よ！』

『冥界の深奥に住まう冥府の主よ！　我が魂を喰らいて出でよ！』

サーラの具現した障壁にマリスの魔法が弾かれて効果を失い、その中から飛び出したリゼルがマリスへと詰め寄る。だがその刀は、マリスに届く一歩前で止められた。
「……もうやめない？」
背後でユリスが印を切る気配を感じて、リゼルが呟く。
「ユリスが魔法を使うより、きみが何かをするより、俺がぶっ倒れるより、俺の刀は速いよ。……まだ、分は俺達にあると思うけど」
「……そうね。あなた達には勝てないみたい」
さすがにリゼルに接近戦を挑むのは無謀と察したのか、マリスは大人しくナイフを引くと負けを認めた。それを見て、リゼルも刀を少し引く。
「解ってくれたなら、もうティラやサーラさんを狙うのはやめてくれないかな」
「――妹さん、今日はいないのね」
ティラの名前を聞き、ふとマリスがそんなことを言う。一瞬の逡巡を挟んでから、再びマリスは微笑んだ。
「今日は退くわ。でもあたし達が立ち止まることはない。必ずあなたをあたしの前に跪かせてみせてよ。正義の味方さん？」
「ッ、待――――！」
マリスの声にユリスのスペルが重なり、二人の姿が闇に溶ける。

リゼルの制止が虚しくこだまし、サーラは舌打ちをした。
「リゼル、あいつらティエラを――」
「わかってる」
刀を収めながら、リゼルからは固い声が返ってきた。だが、踵を返して数歩もいかぬうちに、彼の体はぐらりと傾ぐ。
「リゼル！？」
咄嗟に駆けよって腕を掴むが、ぬるりとそれは滑って行った。どさりと彼の体が地面に落ちる。冗談かというほどべったりと血に汚れた自分の手を見て、背筋が凍る。
「……嘘だろ？」
困惑したサーラの独白を、冷たい夜風がさらった。

兄妹と逆襲の双子　7

――ここはどこだろう。
目を開けたら闇しかなかった。地面の感触もなくて、ゆらゆらと漂っている感覚。確かなものは何もない。
どこから来て、どこへ行くのか。それも解らない。自分が誰かさえわからない。――が。
「お兄ちゃん！」
その声が弾けると共に、ぱっと周囲に色が散った。
闇はとけて、見慣れた自分の家が広がる。ずっと育ってきた場所で、ちゃんと地面に足をつけて立っている。その感触が伝わると共に、背中に小さな衝撃も加わった。
「お兄ちゃん！　行っちゃやだ！」
「いててて！　髪！　髪引っ張らないでー！　……どこにも行かないったら」
飛びついてきた小さな金髪の少女が、泣きながら髪を引っ張る。その痛みに悲鳴を上げながら、だけどその痛みは心地よかった。振り返ってしゃがんで、その小さな存在を抱きしめる。
「だから、髪引っ張るのやめてね。ハゲちゃうし」
「えー、やだー。お兄ちゃんの髪、綺麗だもん。お月さまみたいな綺麗な色」
「……ティラの髪も綺麗だよ。父上と同じ色だ」
そう言うと、えへ、と幼い少女が笑う。だがその後で、でも、と彼女は付けくわえた。
「お兄ちゃんと一緒の方が良かったな……」
そんなことを言った妹に目を見開く。だがすぐにその目を細め、柔らかく笑う。そして、彼女を抱きあげた。といっても自分もまだ子供だったから、抱えるのは至難の業だったが。それでも、そんな苦難は顔に出さない。努力するまでもなく、無邪気に笑う妹を見て

いたら、笑顔しか零れない。
そう。ここで育った。彼女は妹。名前はティラ。そして――――
自分は。

■□■□■

「リゼル！！」

呼ぶ声に、唐突に脳が覚醒する。がばりと飛び起きると、隣にいた人物がびくりと飛び上がったのが見えた。
「いきなり気がつくな！　驚くだろう！」
「……俺は、リゼルだ」
ぐるっと首を回してこちらを向き、そんなことを呟いたリゼルに、サーラは怒号を収めると顔をしかめた。
「知ってる。……頭大丈夫か？」
「うん」
かなり本気で心配して聞いたのだが、問いかけるとリゼルはふっと笑顔を浮かべて軽く頷いた。その気の抜けるような笑みはいつものリゼルで、サーラはほっと息をついた。
「そうか。血と一緒に脳味噌まで出てしまったのかと思った」
「何気に酷ッ」
こんどはめそめそと泣きだす。まぎれもなくいつものリゼル全開だ。もう一度大きなため息をつくと、サーラは脇の椅子に腰かけた。
「突っ込む元気があればもう大丈夫だな。……まったく……どうなるかと思った」
腕を組み、仏頂面でサーラが呟く。その顔には疲労が濃かった。美貌には、うっすらと隈ができてしまっている。
「あれからどうなったの？」
「どうもこうも。治癒したが、失血まではどうにもならん。お前は目を覚まさないし、仕方なく担いで町まで来た」

「わぁ。サーラさん力持ちー」
「他に言うことないのか？」
額に青筋を浮かべたサーラが怒りのオーラを立ち上らせ、ひっとリゼルが小さな悲鳴を上げてのけぞる。その後で、小さく呟く。
「えっと、ありがとうございます？」
「違う！　ごめんなさいだろうが！！　どれだけ心配したと思ってるんだ！！」
サーラが椅子を蹴って怒鳴り、またリゼルがひい、と悲鳴を上げて、両手で顔を庇う。だがサーラの言葉の後半に、その手を下ろして意外そうにサーラを見た。
「……心配してくれたの？」
「自分を庇って怪我したやつが死にそうなのを見て、喜ぶような人間だと思ってるのか？　私を？」
サーラが沈鬱な表情をし、リゼルは慌てた。ふざけるのはやめ、自身もまた真剣な顔をする。
「……ごめんね、サーラさん」
「二度とするな。ティエラに一生恨まれるのはごめんだ」
だがティラの名を出すと、リゼルの表情はまた少し変わった。ふざけるのではなく、どちらかといえばその逆だが。焦燥とも、不安ともつかない曖昧な表情は、だが彼が何を考えているのかサーラが知るには充分だった。
「……行くのか」
「うん」
「その傷で？」
言外に止めたのだが、それがわからないわけでもないだろうに、リゼルはベッドから足を出した。それから、枕元にある刀に気付いて手を伸ばす。
「持ってきてくれてありがとう。これ無くしたら、俺母上に殺される」
「……だってお前の取り柄、それだけだろ」

「サーラさん厳しいー」
しくしくと泣き真似しつつ、立ち上がって刀を腰に下げる。
「――お世話になりました」
そしてサーラに頭を下げると、彼女はまた椅子にどさりと腰掛け、冷めた目を向けてきた。
「私はもう用済みというわけか？」
「そんなわけじゃ……」
「……その体じゃ、まだ治癒は必要だろう」
サーラの言葉は遠まわしだ。だが、言おうとしていることは伝わる。踵を返しかけて、だがリゼルはそれを止めてサーラを見下ろした。
「……来てくれるの？」
彼女は答えなかったが、もしかして仏頂面で機嫌が悪そうに見えるのは、照れているからなのだろうか。浮かんだ考えを確認するべく、リゼルは彼女の前にしゃがみ込むと、その仏頂面を覗きこんだ。
「もしかしてホントに俺に惚れた？」
「……と言ったら、大人しく治るまでここにいるか？」
思いもかけない言葉に、え、とリゼルが動揺する。それを視界の端に映し、サーラはため息を吐いた。思わぬ言葉に動揺しているだけで、どうせ考えを変える気はないのだ。そんなこと解っている。
「どうせティエラが気になって無理なんだろう。……そんな妹べったりの変態シスコンに誰が惚れるか」
冷めた声を吐いて立ち上がると、サーラはさっさと歩きだして部屋のドアに手をかけた。
「いくぞ」
「……うん」
嬉しそうなリゼルの声に、何故か頬が熱くなった。だが気の所為だと咳払いし、扉を押しあける――それと同時に。
向こうからも誰かが、扉を引いた。予期しなかったことと、他のことを考えていたせいでサーラも派手にバランスを崩したが、向こ

うはそれにしても妙なくらいにぐらりと体を傾げた。そして、どさりと部屋の中に倒れる。
「っ、何――」
「……お前は」
何事かと訝しむサーラの後ろで、倒れこんできた人物を見てリゼルが声を上げる。
黒髪の長身のその青年は、リゼルの見覚えのある男だった。

兄妹と逆襲の双子　8

突如部屋に倒れ込んできた男のせいで、リゼルとサーラは足止めを食うことになった。酷い怪我をしていたし、リゼルが見覚えがあるというので放ってもおけず、今までリゼルが寝ていたベッドに運んでサーラが治癒をしている。

「サーラさん、大丈夫？」

心配そうにリゼルが横でおろおろするのが、逆にサーラを苛々させる。

そんな彼を見ていたら全快していそうにも見えるのだが、そんな程度の軽い負傷でないことは、治癒したサーラが一番解っている。そして、回復魔法を使えるのもサーラだけだ。結果、男を運ぶのも治癒するのも全てサーラがやった。だがそうして疲労した体に鞭打ち余計な消耗を食ったことを、誰に対して怒ればいいのか。リゼルに無理をさせなかったのも、見ず知らずとはいえ重症の人間を見過ごせなかったのも自分だ。自らやった以上怒るのは筋違いとわかっているが、わかっているから余計に苛立つ。

「……大丈夫だから、お前は少しじっとしていろ。そしていい加減、こいつが誰なのか思い出せ」

「うーん……それがどうしても思い出せないんだよねー。男の顔と名前ってどーも覚えられなくって」

真剣にそんなことを言って首を捻るリゼルに、サーラは呆れを多分に含んだ冷たい視線を送った。八つ当たりも兼ねて、嫌味のひとつやふたつを言おうと口を開くが、それを遮って、小さいがはっきりとした声が二人の間を縫う。

「……フリートだ。ヴァニスの」

まだサーラの治癒の光は消えていなかったが、そう口にして男が起き上がる。彼が口にした名前を聞いて、リゼルは「あー！」とすっきりしたように満面の笑みで叫んで男を指差した。だがすぐに笑

顔は消え、指差したままリゼルの視線が冷える。
「……ムッツリ君。また俺のティラに手を出す気か？」
「ティエラに……？　ロリコンか？」
「……」
リゼルとサーラの謂われない言葉を受けて、フリートが一瞬沈黙する。だが、ため息だけでそれを流すと、鋭い視線をリゼルに投げた。
「ふざけている場合じゃない、リゼル。……ティエラが攫われた」
フリートの報せに、リゼルの表情が変わる。サーラもまた、少なからぬ驚きに治癒の手を止めた。
「……なんであんたがティラといるんだ？　ティラは陸連に保護を頼んだ筈だ」
珍しく、半ば睨むようにしてリゼルが問いかけてくる。ふざけていないと、途端に冷たい印象になる美貌は、下手な答えを返せばすぐにでも斬りかかってきそうだった。だがフリートもいちいち怯まない。付き合いが深いわけではないが、初対面の時点でそういう男であることは知っている。
「ティエラは、お前に迷惑をかけないようにと、一度は帰るつもりでいた。だがやはり、途中でどうしてもお前の元に戻りたくなって、大陸連盟の馬車から逃げ出したそうだ。その場所がヴァニスで、追われているところをおれが助けた。その後、おれはイリヤ様にティエラをお前の元に送るよう命じられたんだ」
フリートの説明に、リゼルの鋭い瞳が揺れる。ティラが引き返すなどとは考えていなかった。こうなったのは、自分の浅はかさが原因だ。それは解っていても。
「じゃあ、なんでここにティラがいない？」
「……二人組の術士に襲われ、守り切れなかった。逃げろと言ったが、ティエラは……逃げなかった。おれの責任だ、リゼル。殴るなり斬るなり好きにしろ」
フリートの顔も口調も冗談ではなく、覚悟を決めた目だと解って、

リゼルが言葉に詰まる。
「あいつらだな。傷が、魔法でできるものと似ていた。もしかしてとは思ったが」
淡々とサーラが口を挟むと、リゼルはついにフリートを睨むのはやめ、唇を噛んで俯いた。フリートが悪いわけではない。これはただの八つ当たりだ。全ては、あのときティラと別れたのがいけなかったのである。
――どんなことをしてでも、守ると。幼い日に誓ったのに、それを守り通せなかったのは、自分だ。
「……俺とサーラさんで五分だったんだ。ティラを守りながらは無理だ。あんたのせいじゃない」
深く長い息を吐いてから、リゼルが力無い声を吐きだす。それはサーラとフリートが顔をしかめるほど、か弱く情けない、彼らしくない声だった。
「だったら、そこにおれも加われば五分を越える。……斬らないなら、連れていってくれ。このままおめおめとはおれも帰れん」
「怪我人二人と、憔悴した術士で五分を越えるかは知らんがな」
サーラが背もたれに体重を預け、ぎ、と椅子を鳴らしながら呆れ果てたように呟く。
「俺は――」
「解ってるだろう。行ってお前が死ねば、どの道ティエラは助けられん。そもそも、どこに行くつもりだ？　当てはあるのか？」
「でもサーラさんだってさっき」
「ティエラを探しに行くなら早い方がいいと思った。それなら、連盟の馬車を追えばいい。だが戦いに行くなら別だ。これだから男は短慮で嫌いだ。守ろうとして死ねれば満足か？　残された方の身にもなれ、阿呆！」
次から次へと飛び出すサーラの罵倒に、男二人が気圧されて黙る。
「とにかく怪我人は寝ろ！　お前もだリゼル！」
視線を向けられて反射的にフリートがベッドへと体を戻し、リゼ

ルが動きかければすかさず指差されて、はい、と返事をする。
「……その間に私が情報を集めておいてやる。あいつらが狙っていたのは私だった。私の代わりにティエラが攫われたのなら、私にも責任はあるからな」
大人しくなった男達を見て満足げにサーラは息を吐くと、長い銀髪を後ろに払って仏頂面で呟き、返事を待たずに踵を返した。彼女が部屋を出てから、暫くは沈黙が続いたが。
「……お前の周りには気の強い女が多いな……」
「……いや、お互い様だと思うよ……」
やがて、ぽつりとそんな呟きを交わしたのだった。

兄妹と逆襲の双子　9

「……こんなことなら、最初から妹さんを狙えばよかったよね」
暗い遺跡の中で、気を失って横たわるティラを見下ろしながらユリスが呟く。光を出すことはできるが、灯りを求めるためだけに命を削るのも馬鹿らしい。例えどんなに些細な魔法だとしても、禁呪を用いない限り、呼びかけに精霊が答えたことはない。
「銀紫の魔女の方が確実だった。この子の方は、あんまり力を持ってるようには見えないわ」
「でも、ボクの魔法を跳ね返した」
「今は、ユリスが見た力を信じるしかないわね。忌々しいけど、あいつ……、あの銀髪の男、厄介よ。何者なの」
事実忌々しそうにマリスが吐き捨てる。その気持ちはユリスにもわかるし、マリスはすぐ癇癪を起こす節はあるが、それでもいつまでも済んだことに固執して苛立つのは珍しいことだ。一応こうして、それなりに成果はあった。大陸連盟の手に渡ってしまっていたら、さすがに手出しはできなかったところだ。
腕の立つ用心棒はいたようだが、二人でいれば滅多に引けを取ることはない。――だからこそ余計に、二度も同じ相手に退いたことが、マリスには悔しいのだろうが。
「いいじゃない、マリス。この子で試してみようよ。もう時間もそうないし。……何が間違いかって言えば、手分けしたことだ。ボクが遺跡、マリスが依（よりしろ）。いくら急いでたっていっても、離れるべきじゃなかった」
ティラに視線を当てたまま、ユリスがしゃがみこんで呟く。それを聞いたとき、マリスの表情からも苛立ちと憤怒は消えた。その隣にしゃがんで寄り添い、ユリスの手を取る。
「……その通りだわ。これからはずっと一緒よ。誰にも邪魔させない……」

「マリス……」
久しぶりに見るマリスの笑顔に、ユリスも微笑む。
――そう。最初から全てはそのために――

■□■□■

――禁呪。
自らの魂、すなわち生命力を捧げて精霊と契約を交わし、具現を成すもの。
つまるところ、糧を捧げない限り、精霊が応じない、分不相応な魔法の行使を指す。
印と呪文（スペル）の模倣のみにて行えるものに非ず。
本当に必要なのは、生命力を捧げることそのものより、それすらを惜しまない強い意思――

「サーラさん」

呼びかけに、サーラは手にした書から顔を上げた。声を聞いた時点で分かっていたことだが、そこに現れた人物に顔をしかめる。
「休んでいろと言った筈だが？」
「何もしていないと余計に悪化しそうなんだ。可愛い女の子が添い寝してくれるならともかく、男と同室じゃ余計息が詰まる」
「……君は、よく真顔でそんなふざけたことが言えるな……」
呆れを通り越してある種感心の域にさしかかりながら、サーラはため息と共に書を閉じ、古びた棚に戻した。
この大陸はまだ発展途上で、大きな国もないし、施設も乏しい。だがその代わりに、手つかずの遺跡、価値のある古文書は、他の大陸に類を見ない。
「調べ物？」
それを踏まえてそんな風に問うと、サーラは曖昧な表情をした。

「ああ。……いや、というより確認だがな。あとは少し考えを整理したかった。思ったより情報も手に入ったし」
「で、収穫は？」
そうは言うものの、肝心の収穫について彼女はなかなか語りださない。リゼルが不思議そうに首を傾げたところでようやくサーラが口にしたのは、だが別のことについてだった。
「あの男は何者なんだ？」
「フリート？　……ヴァニスのお姫様の護衛だよ」
「ということは、貴族か何かか？」
「ああ、でも養子で、元は流れの剣闘士らしいよ？」
「――そうか」
サーラの表情に真意は見えないが、リゼルはふっと息を吐くと、軽く目を伏せた。
「サーラさん、こないだ俺に何か言いかけたでしょ」
一瞬サーラは考え込むように宙を見たが、すぐに思い当って、ああ、と呟いた。
「……何でもない。忘れてくれ」
「じゃ、話変える。サーラさんは、王侯貴族、ついでに陸連も、嫌い？」
首を傾げたまま、リゼルが碧眼を開く。別段探るでもなく、世間話でもしているように尋ねてくる彼に、サーラは眉をひそめた。それについて言及するなら、話を変えられたといってもサーラには意味を成さない。それで、リゼルは話を変える気などなかったのだと気付き、サーラはため息混じりに答えた。
「……嫌いだな。リゼル、お前は教育を受けてるだろう。貴族か？」
「その答えの後に答えるのは、ヤだな」
リゼルは首を傾げるのをやめると、小さく苦笑した。その視線が何故と言外に含んでいるのに気付き、サーラは彼から目を逸らした。だが、やがてぽつりと言葉を零し始める。
「――魔法の適正行使と管理は、戦を繰り返さぬために必要。その

大義名分はなるほど尤もだ。だがその大義名分のもとに切り捨てられる者がいる」
　サーラが歩き始めて、リゼルも無言でそれを追った。小さな店を出て、彼女がどこに向かうつもりなのかはわからない。サーラ自身も考えていないのかもしれない。ただ、外に出たかっただけかもしれない――、今日は陽がよく出ていて、風も温かい。
「世界平和から見れば、国の中で生きる民など小さなものだ。しかし、私にとっては小さな世界が全てだった。でもその小さい世界は、引き裂かれてしまった。……私の父は、禁呪使いだった」
　町はずれまできて、サーラは立ち止った。やはり、どこに向かうつもりもなかったのだろう。これ以上進めば町を出てしまう。それに気付いて立ち止ったに過ぎない。どこに行けばいいのかわからないように、また動きかけた爪先は、だが歩みを刻む前に止まった。
「だけど、父さんは私利私欲で術を使っていたわけじゃない。力は傷つけるだけじゃなく、救うこともできる。そうだろう？　だが国々という単位から見れば、父は危険因子だった。母は城仕えで、国を裏切ることはできなかった。……私は父と二人、まだ連盟の力が弱いこの大陸まで逃げた。力を持つのが父だけならば、父さんは従ったのかもしれない。多分、同じように力を持つ私の為に、父さんは……」
　ぽつりぽつりと零れるサーラの声には、いつもの凛とした強さがない。振りむかないサーラのすぐ後ろにリゼルも立ち止まったまま、だがそこでようやくリゼルも問いかけを落とす。
「……それで、サーラさんのお父さんは？」
「この大陸に来てすぐ、合成獣（キメラ）の異常発生を知った。よせばいいのに、父さんは力を使って人を守ったから、すぐに連盟にかぎつけられた。結局、父さんは連盟に連れて行かれたよ。その前に、私を逃がして」
「――それでサーラさんも、お父さんと同じようにキメラから人を守っているんだね」

「違う。私は人なんか守りたいわけじゃない。でも、父さんは違った！　それをやつらが理解するまで、私は戦おうと思ったんだ。それだけだ」
　声に力がこもり、その勢いと共にサーラが振りむく。憤る紫の瞳は、だが怒りにつりあがる反面、泣きだしそうに潤んでいた。
「……サーラさんは、自分たち家族を引き裂いた陸連を恨んでるんだね。それで陸連を作った王侯貴族も嫌いなんだ」
　サーラは答えなかったが、今までの話とそれを語るサーラの様子が、それを肯定していた。だから、リゼルの言葉も問いかけではなかった。
「それなのに、俺とティラを助けてくれるの？」
　一般市民の教育もだいぶ進んではいるが、魔法学のように高等な学問まで兄妹揃って受けるような身分は限られている。前にサーラが教科書のような答だと言ったあのとき、彼女もそれに思い当ったのだろう。それで、貴族ではないのかと問おうとした。もしそうなら、力を貸すのをやめようと思ったに違いないとリゼルは考えていたのだが、ほとぼりが冷めてもサーラがその話に触れることはなかった。
　そして、その話題を再び出すことのないまま、ティラを助けてくれるのに協力してくれようとしている。
　率直な問いかけに、サーラは困惑したように睨むのをやめ、地面に視線を落とした。さっき以上になかなか言葉は出なかったが、リゼルはそれを促すことなく、待った。
「……お前なら、助けてくれただろう。私と父さんを。そう思ったからだ」
　ずっと強がって、意地を張ってきた。個を無視し、国が平和を望むのは、全て自分たちの安全の為なのだと、連盟を悪としてそれに抗ってきた。だが、正義を陳腐だと罵った時点で、自分が正義でないことにもまた気付いていた。もう、強がるのも誤魔化すのも無意味なのだと、気付いている。

「……自分の為にしか動かないのは、私の方だ……」
自嘲を込めて独白すると、ふいに温もりが体を包んだ。その正体に気付いて、離せと叫ぼうとしたが、できなかった。それは、阻止されたわけじゃなく。優しく髪を撫でられるその感触と、温もりは、懐かしいものをサーラに思い出させたから。
「サーラさんは、優しいよ」
耳元で囁かれる声に、いつものふざけた色はない。相変わらず陳腐なくらいストレートで、だけどそれが心地良い。こんなときに限って、どこまでも温かくしかない。どんなに馬鹿をやっていてもティラがリゼルを慕うのは、きっと彼女がいつも見ているのはこういう彼だからなのだろう。

兄妹と逆襲の双子　１０

「……前にティエラが言っていたことを憶えているか？　古代の力と現代の力のズレ。それが魔法衰退の最も有力な学説だ」
　やがていつもの落ち着きを取り戻したサーラは、そんな風に話を切り出した。そういえば最初にサーラに会ったとき、ティラとそんな話をしていなと、リゼルは頷いた。
「私が使う、使役の形式による魔法行使は、どちらかといえば古代の力に近い。……それを、一度だけティエラもやったことがある。あの双子が私とティエラを狙うなら、目的は古代の力だ」
「そんなもの、どうするつもりなんだ？　力なら、あの双子だって充分持ってる気がするけど」
「糧を捧げねば発動できない精霊魔法と古代魔法では力の桁が違う。古代の力の恐ろしさを、聞いたことくらいはあるだろう。その力によって古代文明そのものが滅び、現代でも残った力の片鱗で、この大陸の半分以上を吹き飛ばした」
　リゼルの疑問に、サーラが固い声で答える。その穏やかでない答えに、リゼルはいつになく青ざめた顔でもう一度問いかけた。
「――まさか、あの二人はそれをもう一度やるつもりだと？」
「大陸を吹き飛ばしたいのか、世界を滅ぼしたいのか、それとも征服したいのか。そんなことは私も知らん。……だが、そんな連中は何もあの双子だけじゃない。大陸連盟の設立によって、力があるものは迫害される傾向にある。そんな奴らは、誰もが一度は考えることだろう」
「……サーラさんも考えたの？」
　哀しそうな声に、サーラはリゼルの方を振り仰いだ。彼は実際に泣きだしそうなほど哀しそうな表情をしていて、呆れたようにサーラは息を吐きだした。
「そんな面倒なことするか。正義の味方を名乗るおめでたい奴に阻

止されるのかと思うと余計面倒だ」
　そう言うとリゼルはほっとしたように笑い、サーラは彼から目を背けた。皮肉が通じてくれないどころかそれを喜ばれてしまっては、逆にこちらが恥ずかしくなる。咳払いして自分のペースを取り戻していると、だが再び聞こえてきたリゼルの声は、またどこか憂いを含んでいた。
「ねえ、サーラさん。サーラさんは陸連の設立は間違いだったと思う？」
　もう一度リゼルを振り返ると、彼は俯いていてその表情も碧眼も見ることはできなかった。サーラは少し考えるように宙をにらんでから、手近に積んであった木箱に腰を下ろす。
「……力の管理や統制は必要なことだ。戦に使われれば、それこそもっと多くの人が死ぬ。それが連盟の建前だろう」
「そう。でもそれは本来天秤にかけちゃいけないことだ」
「でも、誰もが幸せになる方法など存在しないし、それができる人間なんてものはもっと存在しない。そんなこと誰だって解っている。……私もな」
　自嘲めいた声と視線を、サーラもまた足元に落とした。
　例えば力を持つ一人が戦争に利用され多くを滅ぼしてしまうなら、その一人を滅ぼすべきだと誰もが口をそろえるだろう。――その一人以外は、だ。痛みは、痛みを感じるものにしか解らないものだ。解った気になったところで、自分や自分の大事なものが失われそうになったなら、人は簡単に掌を返す。それを悪と言ったところで仕方のないことだろう。誰だって自分の世界が大事だ。例え悪と言われようが。
「国や法律、それに準ずる組織は、個人の為に存在するものじゃない。個人に肩入れすれば均衡が崩れてしまう。頭では解っているんだ……」
「じゃあ、そうやって見捨てられた人は、どうやって幸せになればいいんだろう？」

「――自分の力で」
地面から顔を上げ、サーラは噛みしめるように言葉を紡いだ。
「そもそも誰かに与えられて保証される幸せなどない。それを見失ってはいけない。……それでも、見捨てられて見失ってしまうときは」
ふとそこで言葉を止めると、サーラは声と表情を和らげた。
「通りすがりの正義の味方とかに助けられたりすれば、また見つけられるんじゃないか」
ようやく、青い瞳と視線が交わる。
サーラも、今ようやく解った。陳腐なことばかりを言う、この奇特な人間のしたいことが。交わった視線の先で、その瞳が再び輝くのに内心では嬉しく思いつつも、表面ではため息をついて仏頂面に戻る。そんな自分が大概素直じゃないことは自覚していても、今更おいそれとは直せないものだ。
「さて、話がそれたな。……そう、連盟に追われたものは、私もそうだが――大抵この大陸に逃げ込む。ここはまだ新興国が多く、未開発で連盟の力も弱まるからだ。奇しくも、ここには手つかずの遺跡、眠った力が沢山遺されている。迫害された者がそれを手にしたとき考えることといえば、ひとつだろう。世界への復讐だ。現に、おかしな宗教団体がこの大陸では増えている」
「あの双子もその一員だと？」
「私はそう考えるのが妥当だと思う。双子の独断か、誰かの命令かは分からん。だが、『誰か』が『何か』を見つけた。その封印を破るために、古代の力が鍵になる。だとすれば――」
「ティラは、復讐の道具として使われようとしてるってことか」
「……そうだ」
肯定され、ぎゅっとリゼルが刀を握り締める。――誰にどんな正当性のある理由を言われても、それだけは許せなかった。
「――自分を見失うなよ、リゼル。ティエラは、自分の為にお前に悪になって欲しいとは思っていない筈だ。せめて、お前は彼女にと

っての正義の味方であるべきだろう」
サーラの言葉に、ふっとリゼルから立ち上った殺気が消える。それからリゼルは項垂れた。
「ごめん、サーラさん。……駄目だな、俺」
「お前だけが正義の味方である必要はない。安心しろ、何度でも止めてやる。礼代わりだ。ただし、」
ティエラが戻ってくるまでの間だけだ。
そう念をおされて、リゼルは陰のない笑顔を浮かべた。

兄妹と逆襲の双子　１１

その後リゼルとサーラは宿へ戻ると、場にいなかったフリートの為に今一度ティエラが攫われた理由について話した。フリートはとくにリアクションを示さなかったが、最初から表情の薄い男なので興味があるのかないのかについてはわかりかねるところだ。だが一言だけ、彼は疑問の声を上げた。

「話は理解した。だが、それで結局どこに向かえばいいんだ」

確かにそれがわからなければティラの救出は不可能だ。さきほどのサーラの話では、連盟に迫害を受けた力あるものの組織が、復讐のためにティラを狙ったということしか分からない。目的が分っても、場所がわからなければ話にならない。しかしその程度のことはサーラとて百も承知だ。

「だから、それを今から割り出すんだ。目的が分からねばその見当すらつけられないだろうが」

二人の視線を制するように吐き捨て、サーラが手にしていた紙を部屋のテーブルの上に広げる。そして、リゼルとフリートがそれを覗きこんだ。――大陸地図だ。

「私はこの１年ほど、合成獣（キメラ）の異常発生を追い続けてきた。それを振り返ってみると、やつらの発生には色々法則があるんだ」

言いながら、サーラは取り出したペンで、地図にバツ印を書きくわえて行った。

「最初がメーレ地方。ここで頻発し、次は隣のランフェ。こうして徐々に東へ広がっている。後で気付いたことだが、キメラが異常発生した場所には必ずなんらかの遺跡があった。そしてそのいずれも新しく見つかったもので、誰かが侵入した痕跡がある。私が聞いたもので一番新しいのは、ここからすぐ西のヴァドだが」

「……それ、俺だ。ティラが封印を解いて、そこでユリスに会った」

そこは、リゼルが初めてユリスと会ったところだった。丁度滞在

中に遺跡が見つかり、ティラとヘイルと共に侵入したあの遺跡だ。
「お前に再会する直前に、私はそこでキメラの異常発生をおさめている」
やはりな、と呟いて、サーラはその場所にもバツ印をつけた。彼女の言うとおり、発生地は東から広がり、これで大陸の東半分がほぼバツ印で埋まった。そこでサーラがペンを置く。
「途中で私も気付いた。私は誰かの足取りを追っているのだと。キメラは、行き場をなくした古代の力の破片だ。誰かが遺跡の封印を解き、そこから零れ出た力がキメラとなる、あるいは喚ぶ。異常発生は人為的なものだ」
「……だとしたら、キメラが発生したところにあいつらはいる……？」
「憶測でしかないがな。ところで、情報収集の結果、ここから南でキメラの異常発生が確認された」
すっと、サーラの紫眼が細まる。それを受けて、リゼルがフリートへと視線を伸ばすと、彼は無言のまま立ち上がった。
「無理をして足手まといになるくらいなら、留守番を勧める」
「ならば今戦ってみせる。足手まといか否か判断するといい」
「阿呆か。無駄に消耗するだけだろうが」
辛辣な言葉を返したものの、今の一瞬に叩きつけられた殺気で、リゼルもサーラも彼が戦えることは理解した。普通に答えればいいのにわざわざ言葉以外の方法を選ぶあたり、こちらから返す言葉は辛辣にもなる。
「……お前はどうなんだ、リゼル。大丈夫なのか」
恐らくこっちも無意味だろう。
そう思いつつも問いかけたサーラに、リゼルはさも当然とばかりに苦笑する。
「わかってるくせに」
ため息をついて、サーラは立ち上がった。
何をどう説得しようが、ティラを放っておくことなんかあと1秒

だってできないのだろう。先陣切って部屋を飛び出すリゼルの後について、サーラとフリートも部屋を出るのだった。

兄弟と逆襲の双子　１２

背中を通して、冷たい石の感触が伝わってくる。
寒くて、苦しい。悲しくて、怖い。
だけどいつだって、そんな状況は長続きしないから、絶望は沸いてこない。きっと助けにきてくれる筈だから――
――兄さん。
そんな呟きは、だけど声にならなかった。背中から、石の感触が消える。
ふわりと体が浮き、闇に沈む周囲に、銀の筋が奔る。
兄が刀を振るい、その刀の先を、黒髪の少女に突きつける。その唇が、聞きたくない言葉を紡ぐ。
ざっと、体から体温が失われる。
――やめて。
それは、寒くて苦しい。悲しくて怖い。
でも、だからこそ。
自分が傍にいて、止めなければならなかった。だから、捕まっている場合ではないのだ。

「兄さん」

今度はちゃんと声になる。闇を光が裂いて、五感が帰ってくる。
両手を握りしめると、ティラは意識を覚醒へと向けた。

■　□　■　□　■

「……ユリスの催眠魔法を破るなんてね。力があるのは、やっぱり間違いないみたい」
起き上がったティラを見て、マリスが呟く。口調と声こそ落ち着

いていたが、動揺は隠せなかった。
どうしようもない疲労感を、だがティラもまた表面上は押し隠す。切れた息を整えて、握り締めた拳で額の汗を拭う。
「――フリートさんには、手出ししてないわよね？」
「ちゃんと約束は守ったわよ。放っておいたってどうってことなさそうな人だったし。あなたのお兄さんと違ってね」
含みのある声に、ティラが顔色を変える。
「……兄さんに何かしたの？」
「本当は、貴方じゃなくて、銀紫の魔女が欲しかったの。それを邪魔するんだもの。あたしの魔法が直撃したけど、生きてればいいわね？」
くすくすと、悪戯っぽくマリスが笑う。挑発だと分かっているのに、胸が冷えて顔が強張った。実際のところマリスにとっては挑発ではなく八つ当たりであったから、ティラのそんな表情は心地が良かった。リゼルにもこんな表情をさせてやれたらどんなに愉快だろうかと思う。――いや。この際もうリゼルもどうでも良かった。
「あいつらにもこんな顔させてやれたら、いいわね」
ふと呟いたマリスの言葉を受けて、ユリスも顔をほころばせる。想像しただけで、心が躍る。それをマリスと二人で笑って見下ろして、自分たちを認めさせることができたら。そう思うと気持ちが逸る。そして、それはもう夢物語ではない。
「遺跡とそこに眠る秘宝、そして鍵。教団が探してたもの全てを、あたし達が手に入れたのよ。ねぇ、ユリス。あたし達に扱えなくても、鍵を扱えればそれでいい」
ぐい、とティラの腕を掴んで、マリスが立ち上がる。痛い、とティラが抗議の声を上げたが、そんなものは彼女の耳に入りすらしなかった。
「さあ、封印を解くのよ。何が何でもね」
威圧的に命令してくるマリスの漆黒の瞳を、だがティラも負けじと睨み返した。

「なんだか知らないけど、嫌よ。自分ですればいいじゃないの。貴方達の方が、私より強い力を持ってるくせに」
ぱん、と。その瞬間、衝撃を受けて、頬にぴりぴりとした痺れが残る。叩かれたのだとわかって、今一度ティラはマリスを睨んだ。だが喉元までこみあげてきた怒号は、彼女のそれに先に飲まれる。
「あたし達の力なんて、命を捧げなければただ一度の具現すら許されないのよ！　これだけの封印を解くには、どれだけの命を使えばいいと思う？　あたし達のちっぽけな命じゃ足りやしないの！　力を持ってる貴方なんかには、想像もできないかしら！？」
頬を押さえながら、叫ぶマリスをティラは食い入るように見つめた。だが、黙って見ていると、今度は苛立ちが零れてくる。
「だったらそんな封印なんて解かなくていいじゃないの。魔法なんか、力なんか使わなくていいじゃない。命まで削って、どうしてそんな必要があるのよ？」
「キミも正義の味方くんも、本当におめでたいよね。削らないとそのものがなくなってしまうからだよ。そんなことも解らないの」
静かに答えたのは、ユリスの方だった。その言葉の厳しさに、今度こそティラは言葉を失う。
「よほど呑気に生きてきたんだね、キミは。明日生きていけるかなんて、考えたことないだろ？　だったら今考えさせてあげるよ」
ユリスがマリスへと視線を走らせる。それを受けて、すかさずマリスがナイフを取り出し、ティラの喉元に当てた。
「明日も生きていたいなら、あたし達の言うことを素直に聞きなさい。嫌なら絶望して死になさい」
「どっちも嫌よ。それに、どうでもいいけど、私の力が欲しくて攫ったんでしょ？　私を殺したら意味ないんじゃないの」
「そしたら今度こそ銀紫の魔女を使うわ。正義の味方さんに止めを刺してね。ああ、それも悪くないわ――、正直はったりで脅したけど、もし貴方が死んだことを知ったらどう思うかしらね、貴方のお兄さん。また剣をとって立ち上がれるかしら。それでも正義の味方

なんて馬鹿なこと、言っていられるかしら？」
マリスの手に力が篭り、首にちくりとした痛みが走る。その痛み自体は大したことではなかったが、マリスの凍りつくくらい冷えた眼差しとその言葉は、蔦のように全身を縛りつけた。
その恐怖は、死に対してのものか。それとも、それを兄が知ったらどうなるだろうという、そのことへの恐怖か。
どちらにせよ、それは恐怖だ。死んだらどうなるのかわからない。だけど永遠に家族に会えないことだけは確かだ。
父にも、母にも。――兄にも。二度と会えない。
（……そんなの、嫌）
体の内側が熱くなる。ここ最近のうちに、何度か経験した感覚。

――解放しなさい。力持つものよ。

唐突に頭に声が響いたのはそのときだった。

――私を求めなさい。そうすれば、あなたはあなたの内にある力、そして我が力の全てを自在に使いこなせる。そうしたら、

「兄さんを、助けられる」
マリスの目の前でティラの唇が小さく震え、そして、その直後彼女を核に、凄まじい光の奔流が巻き起こった。

兄弟と逆襲の双子　１３

ぞわり、と肌が粟立つ。その感覚に、思わず集中が途切れ、そのサーラに今まさに爪を立てんとしていた合成獣（キメラ）をフリートの大剣が両断した。

すぐにキメラの発生場所へと向かった3人は、情報通りキメラの群れとぶつかり、サーラはいつものように“ポイント”を探しながら戦っていたのだが。

「――どうした」

様子がおかしいことに気付いたフリートが端的に問い、リゼルも周囲のキメラを一層すると、サーラへと視線を当てる。

「サーラさん？」

「……こんなやつらと遊んでる場合じゃない。こいつらは後だ！」

言うなりサーラは踵を返した。まだポイントは見つけられず、発生を止めるには至っていない。しかしそれどころではないと脳が警鐘を鳴らした。

それほどに、強い何か。

肌を刺す力の奔流が、頭の中で警鐘を打ち鳴らし続ける。その方向へとサーラは駆けだすが、リゼルとフリートには状況が分からない。それでもサーラが走って行ってしまったので、その後を追う他にない。

並走するキメラ達を蹴散らしながら、しかしサーラが辿りついた場所には、見る限り何の変化も見られなかった。今まで見てきた景色と同じ、何の変哲もない草原――だったが。

『封印解除（アンロック）！』

サーラが手を翳して叫んだ途端に、凄まじい光が周囲をめぐった。

「サーラさん、これは――」

その様は、サーラが何かの魔法を使ったかのように見えた。だが、それを暗に問うリゼルに、サーラは首を横に振る。
「私は目隠しの結界を剥がしただけだ。遺跡自体の封印はもう解かれてる。この光はそれによるものだ――この力は、ヤバいぞ」
翳した手の指先がちりちりと熱く、サーラはその手を引き寄せ、引き攣った顔で光の発生源を睨んだ。光が強すぎて中に何があるのか容易には判断できないが、だからといってそちらに集中してばかりもいられない。突如背後にせまった咆哮に、ふりむきざま炎の魔法を具現する。
「っ、鬱陶しい……ッ」
炎に呑まれたキメラが塵に返るが、それだけでは終わらない。キメラ達の増殖は止まることを知らず、後から後から押し寄せてくる。
「こいつら、さっき相手してた群れじゃない。この光からも出てきてる」
「最悪だ。この現代に、目覚めさせてはいけないものが目覚めたな――！」
リゼルが刀を閃かせ、サーラが舌打ちする。その間も、フリートは黙ったまま淡々とキメラを撃退していたが、ふと表情を変えた。
「危ない！」
フリートの警告と同時に、サーラがシールドの呪文（スペル）を紡ぐ。
『冥界の深奥に住まう冥府の主よ！　我が魂を喰らいて出でよ！』
光を黒い闇が裂き、だがそれをサーラのシールドがさらに飲み込んだ。
「遅かったわね、正義の味方ご一行さん？」
そんな言葉と共に、マリスとユリスが光の中から現れる。ローブのあちこちが破れ、肌からは血が滲んでいたが、双子はどちらも幸せそうな笑みを浮かべていた。
「……ティラは、どうした」

そんな二人の様子は異様で、眉をひそめながらもリゼルが問いかける。
「この光の中心に」
答が返ってくると同時にリゼルは走りだしたが、戦闘態勢を取った双子と、サーラに腕を掴まれたことにより、それは阻止される。
「離して、サーラさん」
「……気持ちは解る。だが状況も解らず飛び込んでは危険だ」
表情の消えたリゼルに、だがサーラは怯まず淡々と告げた。その間にも双子が印を切り、しかしフリートがそれを見過ごさず斬りかかったことによって、舌打ちして飛び退る。
「では、この状況で何か策があるというのか」
大剣を構えたまま、振り返らず発せられたフリートの問いに、さしものサーラも咄嗟には返す言葉がなかったのだろう。ぐっと押し黙った。
「……そうだよ、サーラさん。俺は行くよ。ティラがいるなら、俺行かなくちゃ」
「だが――」
腕を掴む手に力を込め、サーラはリゼルを見た。そして――ゆっくりと力を抜く。
説得は無理だ。それは最初から解っていた筈のことだ。
リゼルの表情は、もう穏やかないつものそれに戻っていた。困ったように頼りなく、彼は笑う。
どの道策などない。この光の向こうに何があるのか、近づいたらどうなるのか、サーラにも解らない。ただ、そこにティラがいるなら、ティラがこの力を使っているなら、止めさせなければならない。そして、救わねばならない。
それだけは確かで、そしてそれができるのは――、導き出した結論に、サーラは掴んでいた腕を離した。
「ありがとう」
リゼルが微笑んで礼を述べ、だが次の瞬間には走りだしている。

その彼の前に、マリスがナイフを構えて飛び出した。
「行かせない。止めさせないわ。あれはあたしたちの希望の光なの。この世界をあたし達に跪かせる――――」
咄嗟にリゼルが刀をかざすが、そのナイフがマリスの手を離れる前に、そしてマリスが怒号を解き放つ前に。
ぐらりと、その小さな体は大きく傾いだ。
「――マリス！？」
ユリスの叫びにも応じず、マリスが駆け廻る光に埋もれるようにして、ゆっくりと倒れる。その背中には、短剣が突き立っていた。

兄妹と逆襲の双子　１４

「うわあああああああ！」
ユリスの叫びが、光の奔流に吸い込まれる。合成獣（キメラ）が彼を狙ってとびかかるのにも意に介さずユリスがマリスに駆け寄り、そのキメラをリゼルの刀が間一髪で貫く。
「マリス！　……ッ、お前ら……ッ！」
それにさえも気付かず、マリスを抱き起こしてユリスが光の外を睨んで呻く。
「囲まれてるな」
絶え間なく襲いかかってくるキメラを撃退しながらフリートが呟き、リゼルも神妙な顔で頷いた。突き刺さるような殺気を、そこら中から感じる。
「よくやったね、ユリス。これで連盟を潰せるだけの力が、“教団”の手に入ったわけだ」
その中のひとつが姿を現し、ユリスと倒れたマリスに近づいて行く。その気配が、さっきマリスが倒れる寸前に閃いた殺気とぴたりと重なった。短剣を投げたのはこの人物だと悟ると同時に、その尋常ではないプレッシャーが彼の強さを語り、刀を持つリゼルの手にじっとりと汗が滲む。
「なんでマリスを……！」
「裏切ったからだよ。きみたち子供の浅はかな考えが分からない程、大人は馬鹿じゃない」
だが、動かないわけには行かなかった。その青年がマリスの背から短剣を抜き、ユリスへと振りかぶる。それを間に入ったリゼルが弾き、そうして青年の足を止めながら、サーラに視線を走らせる。一瞬、サーラは抗うような色を見せたが、リゼルの表情を見て抗いから呆れへと表情を移し、そしてマリスの方へ歩み寄った。そして獣のように威嚇してくるユリスを制して、手をかざす。唖然とする

ユリスの目の前で治癒の光が零れ、見る間にマリスの傷が癒されていく。それを見て、青年が理解しがたいという視線をリゼルに投げた。
「……なんで庇うの？　この子達は君の敵だろう」
「敵だろうと味方だろうと、目の前で誰か死ぬのは嫌なんだ」
「随分な綺麗事を吐くね。君だって一度マリスを殺しかけてる筈だ」
リゼルは刀を構え直すと、改めて目の前の青年を見た。この大陸ではさして珍しくもない、黒い髪と黒い瞳。肩までの髪が、力の奔流を受けて翻り、愉しそうに笑う顔は整ってはいるが、それ以上の印象は特にない。
だが、強い。
そして、彼の台詞に、彼がずっとユリス達を監視してたのだろうことも想像がついた。
「……居場所をなくした子供は純粋だよね。それを求めて死に物狂いでなんでもやるんだ」
「それを利用する大人（あんた）は、随分と腐ってるけどな」
「いつまでも綺麗ではいられないんだよ。綺麗でいられるのはこどもの特権だ。僕もそれはある意味羨ましい」
吐き捨てるようなリゼルの言葉に、青年が微笑んだまま答える。ごう、とまた力が強まり、肌を灼くように周囲を滑って行く。その中心を肩越しに親指で刺し、子供のようににこやかにほほ笑んだまま、青年は軽い声を落とした。
「さ、ボクは“これ”で世界に喧嘩を売りにいくから。子供はおやすみなさいの時間だ」
「そうはいかない」
立ち去りかけた青年の前に回り込み、リゼルは青年の前で刀を構えた。
「大陸連盟創始者にして“統制者”の一族、レゼクトラ家のリゼル・アーシェント・レゼクトラだ。お前を世界に仇名すものとし、統制者の名において拘束する」

無視して通り過ぎようとしていた青年は、リゼルの囁きに歩みを止めた。聞こえたのだろう、サーラが驚愕の目でこちらを見たのが分かったが、今はそれには応えられない。
「……やれやれ。ただの子供の振りしとけば、この場は見逃してあげたのにね」
ゆらりと男が手を翳す。呪文（スペル）も何もなく、ただそれだけの動作で男の手の周りが揺らめき、剣を模る。
「ッ」
そこからやはりなんのモーションもなく、黒髪の男が斬りかかってくる。ほぼ反射だけでそれを受け、だが青年の力にあっさりと競り負けて、リゼルの体が宙に浮く。間髪いれずその無防備な体に青年が突きを繰り出し、リゼルは浮いたまま身を捻った。それでどうにか串刺しだけは免れる。だが剣の刃が脇腹をかすめ、鮮血が舞った。
「リゼ――」
「よせ、行くな」
駆け寄りかけたサーラの肩を、だがフリートが掴んで止める。
「集中が切れれば即座にやられる。あんたが行っても足手まといだ」
「――なら、魔法で」
手を翳した瞬間、その手を風の刃が襲い、咄嗟にサーラは手を引いた。気付けばあちこちで詠唱の声が聞こえる。
「敵はあいつだけじゃない」
「くそ……！」
その間もフリートは戦いの手を休めず、キメラを斬る片手間に、こちらに魔法を放つ精霊使い（エレメンター）達をどうにかしようと機会を伺っている。だが、キメラの数が多すぎて、とても攻撃が追い付いていない。その間にも光はどんどん強まり、その中から生まれるキメラの数も比例して増えている。このキメラの所為で術士達は近づけないだろうが、そもそも彼らは近づく必要はない。彼らは、キメラが群がる場所をキメラごと攻撃すればいいのだ。対して

こちらはキメラに阻まれ彼らに近づけないどころか、サーラが魔法を放とうにも位置を特定できない。圧倒的に分が悪かった。
「キメラを……、いやそもそもこの光を、なんとかしなければ。酷く力が不安定だ」
サーラが魔法に対してシールドを張り、その間にフリートがキメラを仕留める。今のところはそれが精いっぱいだが、それすら限界は見えている。しかし、今はそれよりも。
「これでは、まずティエラが持たない……！」
光の方を振り仰ぎ、サーラが焦燥の声を上げる。その声に、フリートが彼女を振り返る。
「行かせてやらんとな」
「ああ――、でもいいのか？　命張ることになるぞ」
「あの兄妹には借りがある。それにあいつなら――迷わんだろう」
「……お前も同じか」
どれだけの他人の為に、何度彼は命を張ってきたのか。
恐らく、その必要のない場所に生きる人間なのに、綺麗事と罵られながら、馬鹿だと嘲笑されながら、彼は正義の味方を名乗り続け、他人の為に駆け抜け続ける。
「長くは持たん。援護を頼む」
「こっちも長く持ちそうにないがな」
短いやりとりの後、フリートがためらいなくリゼルと青年の間に割って入る。そこに突っ込んでいくキメラをサーラの魔法がまとめて焼き払い、それと同時に魔法からの防護壁を展開する。
「予想以上にキツいな、これは……！」
集中を切らさぬよう噛みしめた唇は、こんな状況なのに笑みを刻む。
「聞け、リゼル！　どうにかしてティエラを止めろ！　力が暴走している、このままじゃ力の核になってるティエラが危ない！」
フリートが黒髪の男の剣を受け、そして弾く。
「……行け！」

「でも、二人だけじゃ――」
「どの道このままでは全滅する。それに、本当はお前は、行きたくて仕方がない筈だ」
その間にも、キメラは襲いかかり、魔法の詠唱は続き、青年の剣は唸る。
「行けリゼル！　お前には、絶対に守らねばならないものがある筈だろう！」
「――――ッ！」
サーラの声に、リゼルは弾かれたように駆けだした。群がるキメラを振り払い、魔法が炸裂する中を突っ切って、光の中心へと駆ける。
「……止める手段なんてあると思う？」
うすら笑う青年の手で剣が踊り、力任せにフリートへとそれを振り下ろす。受けたフリートの大剣に、ぴしりと一筋亀裂が走った。
「依代（よりしろ）の命が尽きても、一度目覚めた力はもう止まらない」
「そうかな」
びしびしと亀裂は筋を増やしていく。だがフリートは退かなかった。退いてはいけない。その必要もない。その剣を食いとめ続けられればいい――1秒でも長く。
「あいつは滅茶苦茶な男だからな。道理が通ると思わない方がいい」
無表情なフリートの顔が薄い笑みを結んだとき、ばきんと音を立てて大剣が折れた。

兄妹と逆襲の双子　１５

視界も、頭の中も、全てが光に侵食されたように真っ白だ。
その白い光の洪水に、双子は押し流されていってしまった。そして自分の意識さえ押し流されそうなのを、ティラはすんでのところでどうにか保っていた。
「……兄さ……ん」
唇が僅かに震えるが、声は自分のものではないように低く掠れていた。
魔力も、体力も、思考する力も、自分で解るくらいにどんどん失われていく。まるで自分の内側から、光と一緒に流れていくように。
――強い力を、求めた。誰にも利用されず、大事なものを自分で守れるほどの。だけど、これはそんなものじゃない。
記憶までもが流れて行きそうになる。けれどそれだけは手放せない。
「お兄ちゃん……、お――」
自由にならない手を伸ばす。そうすれば、光より眩ゆい銀の髪に届きそうで。幻でも良かった。幻でも見えるなら、まだ戦えそうだったから。
多分、自分は間違ったことをした。その自覚はある。これは罰なのだとも思う。それでも死ぬわけにはいかない。
ずっと一緒だという、約束を守るために。

「――ティラァァァ！」
中心に近づくにつれて、光は強さを増し、目を灼いて視界を奪う。それでもリゼルは走った。
一刻も早くティラを探し出して止めないと、ティラが危ない。そう言って行かせてくれたサーラ自身もフリートも、このままでは多

勢に無勢だ。
「誰も死なせない！　死なせてたまるか！」
掠めていく光が、そのうち力になって肌を裂く。さっきの戦闘で受けた傷と、そこから流れる血は確実に気力と体力を奪い、見つからない焦燥がそれに拍車をかける。だがそのいずれもを吹き飛ばすように、リゼルは叫ぶと走り続けた。
だが、ふと声が聞こえて立ち止まる。
「……ティラ？」
確かに、酷く掠れてはいたが、お兄ちゃんと呼ぶ声が聞こえた。立ち止まって呼吸を整え、冷静になって周囲を注意深く見回す。目を灼かれそうな光に耐えながら目を凝らすと、ぼんやりとだが人影が見えた。そちらに向けて、一目散に走りだす。
「ティラ！」
光に抱かれるようにして、ティラが浮いていた。その瞳は固く閉じられていたが、手は何かを掴もうとするように伸びている。
「ティラ！　俺だ！　迎えにきたから目を開けろッ！」
その手に手を伸ばすが、すんでのところで届かない。さらにそれを妨害するように光が吹き荒れ、ティラの体を運んでいこうとする。慌てて追おうとすれば、光が力となって襲いかかってくる。
「くそッ」
手をこまねいている場合ではない。リゼルは刀を抜くと、光を振り払うように刃を立てた。半ば自棄の行動ではあったが、刃が仄かに輝いて、光を払う。
「――母上」
まるで母が力を貸してくれているようで、心強かった。そのまま刀を振りまわして光を遠ざけ、再びティラへと近づく。
「ティラ――」
「……にいさん」
もう一度叫ぶと、うっすらとではあったが、ティラは目を開けた。そして酷くか細い声で、呼ぶ。

「兄さん、ごめんなさ――」
「ティラ、ごめん！　ほんとごめん！」
「……どうして兄さんが謝るの？」
ほとんど表情はなかったが、ティラのすっかり掠れた声は憂いと疑問を含んでいた。そして、小さく彼女は頭を振る。
「ごめんなさい……、力がコントロールできなくて……、眠いの……。でも、死にたくない……、帰りたい……」
「帰ろう！　もう離れたりしないから、約束するから！　俺が絶対守る！」
「……お兄ちゃん……」
ほんのわずかだがティラの手が伸び、リゼルは刀を捨てるとその手を強く掴んだ。そして引きよせて抱きしめる。
「ティラは死んだりしない……！　力に負けたりしない！　やればできる！　ティラはやればできる子だって、俺知ってるから！」
「……滅茶苦茶、言わないでよ……」

にいさんの、ばか。

そんな呟きと共に、光はティラへと収束して行った。

■　□　■　□　■

「……本当にどうにかしてしまうとはね。さすがは、ってところか？」
光とキメラが消えうせ、黒髪の男が僅かな驚きを零す。その足元で剣先を突きつけられながらも、フリートはくくっと笑った。
「だから言っただろう。道理など通じんと」
男の剣を持つ手に力が伝わる。そちらに視線を返すと、フリートが剣を素手で掴んでいた。
「くっ」

刃を手に食い込ませながらも彼が剣を押し上げ、その力に男がバランスを崩す。転びそうになって、男は咄嗟に剣から手を放した。フリートが起き上がり、奪い取った剣を男に突き付ける。
「こっちもまだ終わっていないぞ」
「ふん」
キメラの猛攻が止んだことで余裕ができたサーラも、満身創痍ながらこちらに向かって魔法を放とうと構えている。それを見て、男は鼻で笑った。そしてさっと手を振るとフリートの手から剣が消える。
「形勢逆転にはなってないと思うけど？」
そして青年がその手をまた一振りすると、その周囲の空気がぶれて剣を生み出す。キメラはあらかた消えたものの、まだ数匹は残っており、そして術士たちの攻撃も止んではいない。
「……万事休す、か」
呟きながらもサーラは手を翳し、フリートが構える。誰が見ても、サーラ達の劣勢は明らかだった。だが。
「ぐえっ！」
突如周囲から巻き起こったそんな悲鳴に、サーラとフリートが思わずそちらを振り返る。するとその視線の先で、次から次へと詠唱を行っていた人影が倒れ伏していった。
「な、何だ……？」
エレメンターだけでなく、キメラも。呟くサーラの目の前で、キメラが一匹、腹に突きを入れられて塵になった。
「……嘘だ。素手でキメラを……」
「仕方ないだろう。馬鹿息子が私の刀を持って行ってしまったんだ」
呆然と呻くサーラに、今まさに後ろから飛びかかろうとしていたキメラを鮮やかな回し蹴りで仕留めて、女がそんなことを言う。
そう、女だった。結わえたアッシュブロンドを躍らせて、キメラと術士達を素手で殲滅してしまったのは、たった一人の女性だったのである。そして彼女が何者なのか、その言葉でサーラにも察しが

つく。
確かに、化け物だった。
その彼女はキメラを殴りつけながらリゼルの傍まで歩いて行き、そして落ちていた刀を拾うと、涼やかな顔で黒髪の男に向けてそれを突きつけた。
「大陸連盟統制者レゼクトラ家現当主として、貴様に出頭を命ずる」

兄妹と逆襲の双子　１６

「というわけで、かなり無茶苦茶だった」

リゼルが目覚めたのは、それから丸二日が経過した昼過ぎだった。そして、今は三日目の朝になる。

元々禁呪で受けた傷が治り切っていないところを、謎の黒髪の男との戦いでまた傷を負い、その体で得体の知れない力に向けて突っ込んだのだ。かなりの重傷だったのだが、今では動けるまでに回復した。そこまでの短時間で目覚めて動けるようになったのは、サーラの治癒のお蔭に他ならない。

そのサーラからことの顛末を聞いたリゼルは、だが今度は精神が重傷を受けたようだった。ぶるぶると震えながらベッドの上で固まってしまっている。

「そうなんだよ……滅茶苦茶なんだよ、あの人……」

「あの黒髪の男には、結局逃げられてしまったんだが。マリスも助かったし、あの双子から組織の全貌が割れれば本格的に連盟も動く。連盟に協力することであの双子も保護されるだろう……おい、聞いてるのか、リゼル」

せっかく気を失っていた間のことを話してやっているのに、リゼルは両手にシーツを握り締め、うわごとのようにぶつぶつと繰り返すばかりである。この調子では、気を失っている間に母が帰っていて良かったのだろう。前述の通り、黒幕らしき男には逃げられたものの、他のエレメンター達を捕縛し、リゼル達の母は一足先に国へと帰っていた。

ふう、とサーラはため息をつき、それにしてもと話を変える。

「リゼル。お前、大陸連盟創始者の息子だったんだな」

不意を突かれた言葉で、リゼルははっと我に返った。震えるのもうわごとを言うのもやめて、ベッドからサーラを見上げる。

「……ごめん。騙そうとしたわけじゃないんだ」
「解っている。お前に人を騙す技があると思わん」
腕を組んでこちらを見下ろすサーラの言葉は相変わらずどこか棘があり、リゼルは苦笑した。
「そんなお偉いが正義の味方などとほざいて世界を放浪するんだから、世も末だ」
言葉にこそ棘があるが、サーラの表情は柔らかい。苦みのない笑みがそこにはあって、リゼルも苦笑をやめると微笑んだ。だが、サーラが脇にあった荷物を抱えるのを見て、それも消す。
「もう行くの？」
「ああ。もう傷の心配もないだろうし、……父に会えることになったから。お前の母がそう約束してくれた」
だったら、一刻も早くそうしたかっただろうにと考え、だがそれでも残ってくれていたのは自分の治癒の為だと気付く。慌てて謝罪と感謝を述べようとリゼルは口を開きかけたが、その前にとげとげしい声に戻ったサーラの方が先に口を開いていた。
「それに、妹に添い寝して貰わないと眠れない変態シスコンに、いつまでも付き合っていられんからな」
サーラのそんな言葉を受けて、リゼルはてへ、と笑っただけだったが、その隣にいたティラが真っ赤になった。気がついてからこのかた、リゼルはかたときもティラを手放さないのである。

「もう絶対離れないって約束したからな！　1秒も離れない！　嫁になんか絶対行かせない！！」

と聞いてもいないのに主張され、フリートなどリゼルが目覚めてそうそうに厄介払いされた。
ただでさえ極度のシスコンだったのに、それに輪をかけて酷くなってしまったわけである。ティラとしては、自業自得といえども頭が痛い。

「というわけで、今日も一緒に寝ようね！」
そう言ってティラに抱きつくリゼルを見て、サーラが呆れたため息とともに踵を返し。
そしてぎゅむぎゅむと抱きつかれながら、苦しい、とティラが呻く。

「もう、にいさんのばか！！」

おしまい★

兄妹と逆襲の双子　１６（後書き）

ご読了心より感謝致します。ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0565m/

ストレンジツインズ

2011年3月15日10時55分発行